
ポケットモンスター * アスタリスク *

小雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター * アスタリスク *

【Nコード】

N0742Q

【作者名】

小雨

【あらすじ】

ルネシティに住む少年スズ。

閉ざされた小さな世界で平凡な日々を過ごしていた彼だったが、テロリストの襲撃により当たり前の日常が崩れていく。

- プロローグ的な - (前書き)

*** 注意事項 ***

* ポケットモンスターの二次創作小説です。

* 遅ればせながらのbw発売記念。

* bw発売記念といいつつ、舞台はホウエン地方です。

* 登場ポケモンは第五世代までの範囲で登場します。原作のキャラ達も何人が登場しますが、作者はアニメポケをあまり見ていないのでアニメには準拠しておりません。ので、アニメを見ている方は違和感を感じることがあるかと思います(すいません)。

* オリジナルキャラも登場します。

* オリジナルポケモンは登場しません。

* いちおうゲームにも登場するルネシティに住む少年のスピンオフ的作品です。てことで、始まりはルネシティ。なんでそんなモブキャラを選んだのかというと、レジ系ゲットしたくて久々に起動した第三世代ROMのルネシティの雰囲気及び少年のセリフに魅了されたからです。

* 作者の都合のいい解釈、展開などが多数出てくるかと思いますが、生ぬるい目で見ていただけると嬉しいです。全ては作者の力不足によるものです。

*読者様の好きなポケモンが例えば敵として登場することもあるかもしれませんが、あくまでストーリー上の話であり、その種族全体を悪としてとらえているわけではありません。ご了承ください。

*作者の第五世代ランダムマッチにおける勝率は3回に1回程度のレベルです。ネット対戦勝てない人挙手。

*感想等お気軽に頂けると小雨は喜びます。

大体ここら辺が許せる方、よろしく願いいたしますー！。

- プロローグ的な -

まあるく広がる空が蒼い。雲ひとつ無い空だった。

僕は大きく背伸びをしてゴツゴツした大地に横になった。暖かな陽気だ。

僕の住むこの町は、大昔に火山が爆発して隆起してできた窪みの中にある土地らしい。

隆起だのなんだのと言われても僕にはあんまりピンとこないけど、とにかくそういう事らしい。

階段状の大地に連なる家々を広く見渡せるこの場所は、僕の秘密の場所だ。ただでさえ奥まったところにあるし、そもそもこんな何もないところまでゴツゴツした山道を登ってくる物好きはそうそういなかった。

この町は、外界から閉ざされている小さな世界だ。もちろん完全に外界とのつながりが皆無かというところというわけでもなく、物資の行き来なんかも当然ある。こんな岩と水だけの環境では完全な自給自足などは到底不可能だ。それにごく稀にだけど、ジムリーダーのミクリさんに挑戦しに来るトレーナーもいる。

しかし日常生活を送っていく上で、外の世界を感じる事はほとんど無いといっていい。その程度のものだ。

僕はまだ一度もこの町から外に出たことがない。

四方を揺り鉢状の山肌に囲まれていることが、その最大の理由だ。水に潜ることができるダイビングという技を使えるポケモンを持っている人だけが、町の入り口である湖の中の洞窟を通じて外に出る事ができる。とはいえ、それができる人もごくわずかしいない。町の外に出たことが無い大人だって大勢いるのだ。

僕はよくこの場所で。この町を見渡す事ができる高い場所で、さらに高い空を見上げる。

あのまあるい空の向こうにはどんな世界があるのかな？

- プロローグ的な - (後書き)

脳内再生BGMはルネシティでお願いします
↑

- 夜道 -

でこぼこの山道を下り、家に帰る頃にはもう暗くなっていた。家々には明かりが灯り、暗い夜道をぼんやりと照らしている。

この町の夜は暗い。およそ街灯と呼ばれるものが無く、夜道を照らす光がおよそ月明かりしかないからだ。そう、外の世界には街灯というものがあるのだと、以前買ってもらった本に書いてあった。

しかし、夜を照らす明かりと引き換えにまあるい空から見える夜空は格別のものだ。

「おかえりスズ。今日は何してたの？」

「みんなと遊んでたよ。お腹すいたー。もうご飯になるの？」

「もうすぐできるからね。ちょっと待っててね」

母親が料理に戻った。

僕は嘘をついた。僕はずっといつもの場所でボーっと空を見ていたのだ。

周りの友人達は、最近みんな自分のポケモンを手にいれはじめ、見せ合ったりして遊ぶようになっていた。初めのうちは物珍しさで僕も一緒に遊んでいたのだけれど、いくら釣りをしてもポケモンをゲットする事ができないため輪の中に入れないことが多くなり、次第にみんなと距離を置くようになっていた。

どうやら僕には釣りの才能が無いらしく、ポケモンを入手する手段が限られているこの町ではそれは絶望的と言えた。

「さあ、ごはんできたよー。食べよう！」

母さんが料理をテーブルに運んできてくれた。

「いただきます」

「いただきます」

二人でテーブルを囲み、ささやかな夕食が始まった。

僕には父さんがいない。詳しい事は聞かされていないけれど、僕の小さい頃に死んでしまったらしい。

父さんは外の世界から町に物資を運び込む仕事をしていたのだが、町へ戻る途中嵐にあい、行方不明になってしまったらしい。僕が物心つく前の話だ。

周りの人たちはその事について随分気にかけてくれているようだけど、僕は父さんの事が全くといっていいほど記憶になかったので、寂しさはそれほど感じなかった。

「ごちそうさま」

「はい、ご馳走様。食器片付けたらちゃんと勉強しなさいね」

「わかってるよー」

僕は食器を台所に運び、自分の部屋へ引き上げた。

狭い家だけど、一応僕は個室を与えられていた。友達の多くは自分の部屋を持っていないようだった。これも二人暮らしのおかげかもしれないと思うと、父親がいないのも案外悪い事ばかりではない。

母さんはしつかり勉強しなさいとよく言う。この町の中にいたら、どんだん外の世界から遅れていってしまうから、と。母さんは外の世界で父さんと知り合ってこの街に来たから余計にそう思うんだ、と。

でも僕は、別にいいんじゃないかと思う。

この町での生活サイクルは今の時点で完結しているし、興味がないわけではないけど、無理して外の世界に行きたいと思うわけではないのだ。

僕はいまひとつ勉強に身が入らず、部屋の明かりを消した。

窓から差し込む月明かりの中で、僕は眠りについた。

- 友達 -

「すーずくんっ」

翌朝、僕を呼ぶ声で目が覚めた。カーテンの隙間から朝日が差し込んでいる。

友達が迎えに来てくれたようだ。そういえば今日はみんなで遊ぶって言うてたっけ。

「…ごめん、すぐ行く」

僕は眠い目をこすり布団から起き上がると、カーテンを開けた。柔らかな日差しが部屋の中を包む。

さっさと支度を済ませて外に出ると、いつもの二人が待っていた。いわゆるガキ大将タイプのノリと、ちょっとゆったりしたところのある女の子、シズク。

「ごめん、寝坊しちゃった」

僕は謝りながら二人のところに駆け寄った。と、自然に視線が下に行ってしまう。

みな、自分のポケモンを持っている。

ノリはメノクラゲ。自宅にあったという古い釣竿を使って、少し前に釣り上げた。僕は正直あまりかわいいとは思えなかったのだが、ノリはえらく気に入っていたので何も言わなかった。

シズクのポケモンはマリル。シズクの父親は町の外へ出る事のできる数少ない大人で、マリルリを所持していた。先日卵が孵り生まれたマリルの世話を、シズクが任されていた。

緩やかな階段をいくつか登り、いつもの広場に着く。二人はすぐにポケモンと一緒に遊び始めたが、自分のポケモンを持っていない僕は次第に輪に入れなくなってきた。

「ノリ、釣竿貸してよ」

「おう、いいぞ。お前も早く自分の捕まえろよ!」

僕はみんなと距離を置き、町と外とを結ぶ湖に釣竿を垂らした。しばらくそうしていたが、一向に何もかかる気配がない。水面は静かなもので、少しの波紋さえおきなかった。そもそも海に繋がっているはずなのに、なんでこんなに水面が静かなのか、僕は不思議で仕方なかった。

それにしても、大人たちが雑魚雑魚とあざ笑うコイキングすらかからない。後ろからは楽しそうな声が聞こえていた。

何で僕だけゲットできないんだろう……。早々に切り上げていつもの場所でぼんやりしていようかと思いついた頃、隣にシズクが腰掛けてきた。

「スズくん、調子はどう？」

僕は早くもボーっとし始めていたので、突然話しかけられて焦ってしまった。

「あ、え、ええと、うん。全然ダメだよ」

「あはは。釣りなんて運だから、仕方ないよね。私もお父さんにマリルもらわなかったらきつと今も捕まえられてないもん」

シズクがそれとなく慰めてくれているのがわかったが、それが余計に情けなかった。

マリルはシズクに抱きかかえられており、良く懐いているようだった。時折嬉しそうな鳴き声をあげている。

僕は深いため息をついた。

「しかし、こうも釣れないもんなのかねえ。才能ってというのがないのかな」

「……そんなことないよ。ね、私のマリル見て！昨日水鉄砲出せるようになったの！」

シズクが「マリちゃん、水鉄砲！」と指示を出すと、マリルは少量の水を水面に向けて放った。

静かだった水面に波紋が広がった。

「おおー、すごい！」

「へっへーん！」

シズクが得意げに胸を張った。

「シズク、なんだ今の！」

ノリも見えていたらしく、こちらに近付いてきた。

「水鉄砲っていう技なんだって！見せてあげるね！」

「おおー、すげえ！」

二人は再びワイワイと騒ぎ出し、僕は再び釣り糸を垂らした。

- 友達 - (後書き)

参考資料

<http://wiki.ポケモン.com/wiki/%E3%83%A1%E3%83%8E%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%82%B2>

<http://wiki.ポケモン.com/wiki/%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%83%AB>

何日かたったが、僕は相変わらずポケモンを釣り上げられないでいた。

最初のうちこそ悔しさと劣等感にさいなまれていたけど、次第にそれは薄らいでいった。そもそもこの町の中で自分のポケモンを持っている人は数少ないし、町から出たことすらない人だってたくさんいるのだ。

ノリなんかは「メノクラゲにダイビングを覚えさせて外の世界へ行ってみてえ!」、なんて言っているけど、僕は外界に興味こそあるにせよ、そこまで強く行ってみたいと思っているわけではなかった。本当はこのままで。今のままこのルネシティの中でのんびりと暮らしていくのもいいと思っているのかもしれない。

その日は友人達もみんな用事があるらしく、僕は久しぶりに秘密の場所に行こうと思った。

何にも無いあの場所だけど、頭上に広がるまあるい空をゆっくりと見ていられる時間は僕にとって必要なもののようだった。

思えば釣竿を垂らさない日もひさしぶりだ。僕の性格上釣りは嫌いではないけど、さすがに何も釣れない日々が何日も続いてしまっただけは気が滅入る。

僕は日が傾き始めた頃、でこぼこの山道を登り、秘密の場所に向かった。青く澄んだ空を仰ぐのもいいが、夕焼けもまた違った味わいをかもし出してくれる。

それほど大きくないこの町で、よく誰にも知られていないこんな場所があったと思う。あるいは知っている人もいるのかもしれないけど、ここ最近で人の立ち入ったような痕跡は見受けられなかった。その場所は、山の頂上へ続く道を横にそれた先にあった。遠くからみると行き止まりのように見えるのだけど、近付いてみるとさらに

道が大きく曲がるように続いていて、展望台のような開けた場所に出るのだ。見下ろせば町の全景が、見上げればまあるい空が見える。この町で一番素敵な場所ではないかと僕は思っていた。

いつものように山肌を登っていたのだが、少し様子が違うことに気がついた。

どこがどうと言われると言葉では説明できないのだけど、何となく感覚に訴えるものがあった。僕は違和感の正体も分からず、いつもどおり秘密の場所に足を踏み入れた瞬間、息を呑んだ。

驚いたなんてもんじゃない。僕はピクリとも動けなくなってしまうた。

そこには見たことも無いドラゴンが横たわっていたのだ。

薄暗い青い肌をしたドラゴンは僕にすぐさま気がつく、その鋭い視線をぶつけてきた。僕は余計に動く事ができなくなってしまった。今までのことが走馬灯のように僕の頭を駆け巡る。

僕はこのまま食べられてしまうのだろうか…結局一度もポケモンゲツトできないままだった…。いざ死を覚悟してみると、やりたかった事が意外とたくさんあるものだあと思った。

「あー、こら！だめだよ急に人をにらみつけたら！」

突然女の人の声がして、僕はさらに驚いた。

- 疲労 -

僕はあまりに動揺していたので、最初ドラゴンが言葉を発したのかと勘違いしたほどだったがそんな訳は無く、ドラゴンの後ろから女の人が姿を表した。

金髪で、黒い服をきた女性だ。

「ごめんね、びっくりしちゃったでしょ？」

びっくりどころか死を覚悟した僕だったけど、安堵感からへたり込んでしまった。

「ガブリアスっていうの」

金髪の女性は言った。

「それは…ずいぶん強そうな名前ですね。かつこいいなあ。僕はスズって言います」

「違う違う。ガブリアスっていうのはこのコの名前。名前と違ってかわいいわよね。私の名前はシロナ」

僕は改めて青い肌のドラゴンを見た。

ガブリアスという名前はその外見に対して決して名前負けしていない。かわいいとは思わなかったが、一応頷いておいた。世の中にはメノクラゲに愛を注ぐ人間だっているのだ。

それにかわいいとは思わなかったけど、シロナさんのガブリアスはすごく格好よかった。

「これも…ガブリアスもポケモン…なんですか？」

「そうよ。ホウエン地方には生息していないポケモンのはずだからスズ君は知らなかったのかもね」

もっとも僕はこの町から出たことすらないので、ほんの数種類のポケモンしか見た事がなかった。言ってしまうえば、コイキング、マリル（マリルリ）、メノクラゲだ。

「シロナさんはこんなところで何やってるんですか？ガブリアスを持ってるって事は、もしかして別の地方から来られたんですか？」

「そうなの…ガブちゃんて飛んできたんだけど、このコ長距離飛ぶの苦手なのよね…すごい早く飛べるんだけど、その速度で飛ばれたら私振り落とされちゃうからゆっくり飛んでもらったんだけど、余計疲れちゃったみたいで」

言われて見れば、ガブリアスは先ほどから起き上がる様子を見せない。

「ね、この町に宿泊施設ってある？できれば野宿はしたくないんだけど…」

残念ながら、この町に宿泊施設は無かった。そもそも訪れる人がほとんどいないこの町で、旅館業はなりたたない。

「あの…もし家でよかったら、たぶん大丈夫だと思うんですけど。」

母親と二人暮らしなんですけど、事情を話せば了解すると思います。この辺りは夜本当に真っ暗になってしまふので…」

このまま放っておくのは憚られたし、外の話聞いてみたいというのもあった。

それに実際、周囲は薄暗くなり始めていた。ガブリアスの薄暗い青い肌は早くも闇に溶け込み始めている。

「え、いいの？ありがとう！正直ずっと空の旅で疲れてたのよ…私もこのコも」

シロナさんはガブリアスの鼻頭を撫でた。ガブリアスは、その外見からは想像もできないほど穏やかな声を発した。

- 疲労 - (後書き)

参考資料

<http://wiki.pokemon.com/wiki/%E3%82%A3%E3%82%B9>

- 波紋 -

事情を母さんに話すと、あっけなく了承してくれた。

シロナさんにああ言った手前多少心配していたのだが、ホツとした。きつと外の世界の人と話す事は、僕にとってもいい刺激になると考えたんだと思う。

実際外界の、それも他の地方に住む人と話すのなんて初めてのことだった。

「シロナさんにはお父さんの部屋を使ってもらいましょう。いいわね？」

いいもなにも、僕は普段父さんの部屋には入らないし、実質なものに使われていない部屋だった。

父さんが使っていた部屋を、母さんが今もきれいに掃除し、そのままでの状態にしてあるのは知っていた。

シロナさんは相当疲れていたらしく、丁寧にお礼を言うと夕食も食べずに部屋に行って早々に寝てしまった。

翌朝、目が覚めるとすでにシロナさんはどこかに出かけていた。

母さんもすでに外出していた。もっとも、すでに昼近くなりかけていたので当たり前といえば当たり前ではある。

こんな小さな町に、シロナさんは一体何をしに来たんだろう。観光みたいなものだといっていただけど、普段生活しているこの何も無い町に、見るべきものがあるようにとは思えなかった。

僕は遅い朝食を済ませると、家を出た。特に何かする当てもなかった。ので、いつもどおり釣りに出かけた。

どうでもよくなりかけていた自分のポケモンを持つという目標は、シロナさんのガブリアスを見て再び輝きを取り戻していた。

僕はエサを付け、ノリから借りっぱなしの釣竿を投げた。相変わらず穏やかな水面に着水し、それは小さな波紋を作った。

意気揚々と釣りを始めたわけだが、日が暮れる頃には僕のやる気も再びしばみ始めていた。なぜこうも釣れないのだろうか。仕掛けはピクリとも動かなかった。

日は短く、一旦暗くなり始めるとあつという間に日が落ちてしまう。僕は仕掛けを回収し、家に帰った。

「ただいまー」

「お帰りなさい。ご飯の準備できてるわよ、食べよう」
「お帰りなさい」

シロナさんは母親の手伝いをしていた。母さん以外の人からお帰りなさいを言われるのは初めての経験で、なんだかむずがゆかった。

「すいませんねえ、お客様に手伝っていただいて」

「いえ、寢床をかして頂いているので…できるだけ事はさせていただきますわ」

夕食の準備が整い、僕達は食卓についた。

「いただきます」

「いただきます」

いただきますの声がいつもより一つ多い。これも久しぶりの経験だった。

母さんが張り切ったのか、シロナさんの腕がいいのか、料理はいつもよりもおいしく感じた。

「シロナさんはシンオウ地方からいらっしやったんですって？」

「出身はシンオウなんですけど、ホウエンにはジョウト地方から来ました。色々な地方を旅しているんです」

「あら、そうなんですか。私生まれはジョウトなんですよ。コガネシティってご存知かしら？」

女性同士の会話に僕の口を挟めるタイミングは中々ない。もしかしたら母さんも、外の世界の人と話せるのが嬉しいのかもしれない。僕は食事を終えると、部屋に戻った。

僕の家は棚田状になっている大地の、ちょうど真ん中ぐらいの高さにある。窓から外を見ると、真っ暗な中に家々の明かりがポツリポツリと灯っているのが見えた。

僕はふと何の気なしに町の入り口、いつも釣りをしている海底洞窟がある湖を見た。

少し驚いた。家々の明かりでぼんやり見える水面が揺れていたのだ。あれほど穏やかな水面が。

ずっと小さい頃に聞いた、町の誰かが言っていた事をふと思い出した。

「ルネと外の世界を繋ぐ洞窟……まるで何かをここから出さないように作られたみたいだわ……考えすぎかしら？」

僕は少し怖くなって、カーテンを閉めて布団を被った。

- 波紋 - (後書き)

シロナがシンオウチャンピオンになる前という設定です。

私事で恐縮ですが、w i - f i 戦200勝到達。嬉しいでう。

「おはよースズくん！」

翌日、再びモチベーションが高まった僕が釣糸を垂らしていたところに、シズクが通りかかった。

もっとも、おはようといっても昼に差しかかるうという時間帯だった。

「おはよ。シズク、大きな声で話しかけないでよ。ポケモンが驚いて逃げちゃうかもしれないだろ」

「ご、ごめんなさい…」

僕の状態が余程切羽詰っていると思っているのだろうか、僕は冗談で言ったのだがシズクには通じなかったようで、謝罪されてしまった。

僕の状態。数日間何の釣果も得る事ができない哀れな背中を見ていては、そう思われるのも已む無きことかもしれない。

「いや、冗談だよ…シズクと話せて嬉しいよ」

「あ、ありがとう…」

シズクは顔を紅くして俯いた。

これも冗談で言ったのだが、シズクには通じなかったようで、お礼を言われてしまった。

「いや、冗談だよ」

シズクの顔がますます紅くなり、頬をふくらませた。

「もう、からかわないでよ！人がせつかくかまってあげにきたのにー！」

「いや、冗談だよ。一人で釣りしてるのも中々精神力を使うから本当に助かります」

これは本心だった。

「もうお昼だよ。スズくん、お腹すいてない？私お、お弁当作ってきたんだけど、よかつたら食べない？」

「本当に？すごい助かる」

ちょうど小腹がすいてきたところだった。自宅から近いとはいえ、釣り道具を片付けるのもめんどうだと思っていたところだった。古い釣りざおとはいえ一応ノリからの借り物なので、あまり無用心な事はできない。

僕は釣竿を倒れないように置き、手ごろな岩の上に腰掛けた。

「じゃーん！」

シズクが作ってきてくれたのはサンドイッチだった。みずみずしい野菜が食欲をそそる。

「おおー、すごい。…いただきます」

「いただきます！」

「ねえ…ところでシズくん…」

「なに？」

サンドイッチをほおばりながら、僕は答える。

「その、昨日シズくんの家から金髪の女の人が出てくるのを見たんだけど…あれ、誰？親戚の人じゃない…よね？」

金髪の女性。十中八九、シロナさんの事だ。

「ああ、あの人はシロナさんって言うてね。ルネシティに観光に来たらしいんだけど、宿泊施設がないから家に泊まってもらってるんだ」

「観光？こんな町に？」

シズクが疑問に思うのも最もな話だった。僕だっぴまだに納得していないくらいなのだ。

「シンオウ地方の出身なんだって。シズク、ガブリアスって言うポケモン知ってる？すごいカッコいいドラゴンでさ、」

「…じゃあ旅行者のトレーナーさんなんだ…ふーん…」

シズクは旅行者という言葉聞いて、なにやら安心したようだった。

「…シズク、聞いている？」

「はう！？なに？聞いている！」

聞いている人の反応ではなかった。

「今度ノリも誘ってシンオウの話とか聞かせてもらおうよ。いろんな地方回ってるっていったし、面白そう」

「いいの？楽しみー！」

シズクは嬉しそうな笑顔を見せた。

「別の地方か…ね、スズくんもいつかはルネシティを出て、別の町に行きたいって思ってる？」

「え、どうしたの急に…」

問われたのは急だったが、その問い自体は僕自身時たま考えるものだった。

外の世界に興味が無いわけではない。ここ数日シロナさんの話を聞いていて、外の世界への興味はむしろ高まったぐらいだった。

しかし実際に行くかというと、また別の話だった。外の世界で生きている自分というものが全く想像できない。この閉ざされた町に流れている時間と外の世界の時間は恐らく違うだろう。そのくらいの事は僕にもわかる。結局いつも答えが出ず、その時点で思考は停止してしまうのだ。

「僕は…ごめん、ちょっとわからない。シズクはど」

「おーいシズク！広場に行ってポケモンやろうぜ！」

僕達に気がついたのか、ノリが近付いてきた。

「おうスズ、調子どうだ？」

ノリがニヤニヤしながら聞いてきた。

ちくしょう、わかってるくせに。悔しかったがごまかしようが無かったので、僕は正直に告げた。

- 弁当 - (後書き)

展開遅いですね。。。

- 料理 -

いつものように釣りに行く。何も釣れずに家に帰り、三人で夕食を食べて寝る。

同じ様な日々が2、3日続いた。

あの夜に見た水面の揺れは、良く考えてみればポケモンがはねただけだったのかもしれない。という事は、ここにはちゃんとポケモンがいるのだ。根気良くやればいつか釣れるに違いない。

そう思つて僕は釣りを続けたが、一向に釣れる気配は無かった。

ここまで釣れないと、劣等感だかが再び顔を出してくる。僕は極力それを考えないようにした。

「ただいまー」

家に帰ると、母さんが食卓に座っていた。

「おかえりなさい。すぐ夕食になるからね」

シロナさんが台所で、食材と格闘していた。

「おかえりなさい。ふふ、今日はシロナさんが今までのお礼でシンオウの料理をごちそうしてくれるそうよ。楽しみだわー」

「あまりハードルをあげられると困りますわ。それに、随分お世話になってしまいましたから、ささやかですけどそのお礼です」

台所から声が返つて来た。

「シロナさん、明日帰られるんですって」

母親が僕に耳打ちした。こんな小さな町にいつまでも滞在しているはずがないとは思っていたが、やはりがっかりした。シロナさんと別れるのは寂しかったが、とはいえ、仕方ないだろうというのが正直な気持ちだった。こんな小さな町、本来一日もあれば見て回れてしまつぐらいなのだから。

夕食は、とてもおいしかった。

いつも食べるハウエンの料理とどこことなく違和感があつたが、とても新鮮な味がした。

「とてもおいしいです」

僕は率直に言った。

「本当に？よかったー！ハウエンの人の舌に合うか不安だったの。実は料理するのって結構久しぶりだったし…」

「ふふ、料理人さんの腕がいいのかしらね」

「そ、そんなことはありませんよ」

僕達は笑いながらシンオウ料理に舌鼓を打った。

片付けが終わると、シロナさんはまるで家に初めて来た日のように、早々に部屋に戻ってしまった。

僕も特にやる事もなかったので、布団に潜り込んで眠気が訪れるのを待った。シロナさんともっと話してみたかったけど、きつと明日も早いかもしれない。またガブリアスに乗って別の町に行くのであれば、充分休息をとらなければならないだろう。

そんな事を思いながら睡魔に身を任せ始めたその時、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

- お礼 -

ノックの音に、僕の意識は再び覚醒した。

「はい…どうぞ」

と言つても、母親は部屋のドアをノックなどしない。部屋を訪ねてきたのは、十中八九シロナさんだった。

「こんばんは…もう寝ちゃった？」

ドアから顔だけ出して、問いかけられた。

「いえ…ちよつと横になってただけです。シロナさんこそもうお休みになったのかと思ってました。明日大変なんじゃないんですか？ またガブリアスで帰るんでしょう？」

「いや…さすがにもう長距離をガブちゃんに乗るのは、ねえ…」

僕の言に、シロナさんは苦笑いした。

「この町にミクリさんっているでしょ？ ジムリーダーの」

僕は頷いた。

失礼します、とシロナさんは部屋に入ってきて、僕のベッドに腰掛けた。僕は少しドキドキした。

「別に隠してたわけじゃないんだけど、言つてなかったよね。私、実はミクリさんに会いに来たの。」

ミクリさんというのはこのルネシティのジムリーダーで、水タイプのポケモンを使うトレーナーだ。ホウエン地方のジムの中でも最高峰に位置するらしい。町のみんなが誇らしそうに語っていた。

「じゃあミクリさんに挑戦しに？」

「挑戦というわけじゃないんだけど…水ポケモン使いのミクリさんに指導してもらいたい事があつて、ここ数日はジムに通つてたのよ」道理で町中でシロナさんを見かけないはずだった。ポケモンを持っていない僕は、基本的にポケモンジムとは無縁である。

「スズ君は、毎日釣りしてたよね。ジムから見えてたよ。釣り好きなの？」

「あ…はは」

今度は僕が苦笑いする番だ。と言う事は、ここ数日の釣果も全て見られていたわけだ。

「釣りが好きってわけじゃないんですけど…自分のポケモンが欲しいんです。周りの友達もみんなゲットしているのに、僕だけ全然ダメで…」

ふーん、とシロナさんは言った。

「スズ君ポケモントレーナーになりたいの？」

僕は悩んでしまった。自分のポケモンが欲しいとは漠然と考えていたけど、ポケモントレーナーになるなんて具体的な思惑があったわけじゃない。なんだか僕の頭の中には漠然とした考えしかないような気がしてきた。

「…わかりません。そこまで具体的に考えていたわけじゃないけど…ただ、みんなすごく楽しそうだなって。ポケモンという幸せそうだなって思ってたんです。だから…」

僕は力なく答えた。

「…そっかそっか。ね、ところでスズ君、私君にお礼がしたいんだ。あの日私を見つけてくれて、家に泊めてくれたでしょ。私すっごい助かったし、感謝してるの」

「あ、いえ、そんな…僕も楽しかったですし」

シロナさんの顔が急に近付いてきて、僕はドキドキした。

「それでね、君さえよければ受け取ってもらいたいものがあるんだけど…いいかな」

僕は首を縦に振った。

「じゃあ、いいって言うまで目をつぶって？絶対あけたらダメだよ！」

僕は言われるがままに目をつぶった。

- 球 -

どのくらいそうしていただろうか。随分長く感じられたが、実際はそれほどたっていないだろう。時間の流れと言うのは不思議なものだ。

「はい、目を開けていいわよ」

シロナさんの言葉に、僕は目をあけた。

目を開けると、目の前に三つの小さな球状のものが置かれていた。ポケモンを捕獲したり持ち歩いたりできるといって、いわゆるモンスターボールというやつだ。この町ではポケモンをボールに入れている人は少ないため、それほど目にする機会はなかった。

「これは…？」僕はシロナさんを見た。

「この中にはポケモンの卵が入っているわ。もしあなたがそれを望むなら、この中の一つをあなたにプレゼントする。本当は全部プレゼントしてあげたいところなんだけど、いきなり三匹育てるのは少し難しいから…どうする？」

突然の事に僕は茫然としてしまったが、すぐに我に返った。

「ほ、ほしいです！」

「よし、じゃあ君に一匹だけプレゼント！ただし約束して。絶対に大切にするって」

「はい、もちろんです！」

「よし、じゃあ選んでね」

僕はベッドの上に置かれた三つのモンスターボールを改めて眺めた。三つの球は部屋の灯りに反射して、きれいに輝いている。

「中にどんなポケモンが入ってるかわからないんですか？」

「ん？ふふー、それは秘密。でも自分で言うのもなんだけど、どの子も強くて可愛いわよ」

ガブリアスを可愛いと表現するシロナさんの言う可愛いをどこまで

鵜呑みにしていいのかはわからなかったが、しばらく悩み僕は真ん中のモンスターボールを選んだ。

「じゃあ…これにします」

「……………本当にそのコでいいのね？」

シロナさんがイタズラっぽく言った。

「う…は、はい」

「よし、今日からそのコは君のポケモンよ！孵化するのはちょっとだけ先かもしれないけど、大切に育ててあげてね！」

「はい！本当にありがとうございます」

「お礼を言いたいのは私も同じよ。もうあの時本当に疲れちゃって大変だったんだから。本当はダイビングで普通に来たかったんだけど、私の地方ではダイビングを教えられる人ほとんどいないのよねー。空から来るのはかなり高レベルの鳥ポケモンでも厳しいって聞いてたんだけど、つい強行しちゃったのよ」

我慢できなくてガブちゃんまで飛んできちゃったんだけど、それがよくなかったみたいね、と、シロナさんは舌を出して笑った。

しばらくシロナさんと談笑していたが次第に夜も更けてきた。

「じゃあまた明日。いつもみたいに昼まで寝てないでちゃんと見送りに来てね」

「はい、もちろんです！おやすみなさい」

シロナさんが出て行ったあと、僕はすぐ興奮する気持ちを抑えて部屋の明かりを消した。

明日は寝過ぎすわけにはいかないのだ。

- 球 - (後書き)

ようやくゲットしました。

- 潜水 -

翌朝、いつもより随分早く僕は目をさました。

普段昼前まで寝ているので、こんなに早い時間に目をさますのは本当に久しぶりだった。カーテンから差し込む日差しの色が違ふ気がする。窓を開けてみると、早朝独特の匂いが漂っていた。

寝巻きを着替えて居間に行ってみると、シロナさんはすでに準備を済ませていた。

「スズ、遅いわよ！シロナさんもう出発するところよ」

「遅いぞー」

「すいません、いつもより随分早く起きたんですけど…」

「冗談よ。近くの町まで長旅だから、少し早く出ようと思ってね。見送りよろしくね」

僕は急いで上着を羽織り、二人と一緒に外に出た。久しぶりに早朝の日差しを浴びた気がする。僕は大きく伸びをした。

外に出ると、ミクリさんが立っていた。どうやら見送りに来たらしい。ミクリさんに会うのは久しぶりだった。

「あ、ミクリさん…おはようございます」

「おはよう、スズ君。シロナさんにポケモンを頂いたんだって？」

「はい、大切にします！」

僕は腰につけていたモンスターボールをさわり、感触を確かめた。自然と笑みがこぼれてしまう。

「よかったね。毎日釣りをしていた甲斐があるってものだ」

ミクリさんはハハッと笑った。ミクリさんも見ていたのか…

しかし僕は昨夜のことを思い出して、なんとも嬉しい気持ちさがこみ上げてきた。

今のこの嬉しさに比べれば、苦行のような釣りを続けた日々も報われる気がした。

朝の空気の中を歩き、僕達は町の入り口、海底洞窟がある湖までやってきた。

「おばさん、ミクリさん、お世話になりました。」

「いいのよ、私も娘ができたみたいで楽しかったわ。何もない辺鄙なところだけど、またぜひ立ち寄って頂戴ね」

「君は素晴らしいトレーナーだよ。またぜひ対戦しようね」

「はい、ぜひ！」

シロナさんがぺこりと頭を下げた。

「シロナさん、あの、また空から…？」

僕はシロナさんと出会った日のことを思いだした。

ヘトヘトになっていたガブリアスの姿が頭に浮かび、僕は不憫な気持ちになった。

「もう空の旅はこりごり…私もあのコもね。ふふ、実はミクリさんに少し稽古をつけてもらってね。私のポケモン進化したのよ。…おいで、みーちゃん！」

シロナさんがモンスターボールを投げると、なんとも美しいポケモンが出現した。

ほう…と、ミクリさんが感嘆のため息をついた。

「シロナさんは本当に筋がいいよ。たった数日でここまで美しいミロカロスに進化させるのは誰にでもできることじゃない」

みーちゃん（ミロカロス）と呼ばれたポケモンが湖に着水すると、シロナさんが飛び乗った。みるみるうちに薄い膜のようなもので包まれる。

「みなさん、本当にありがとうございました。スズ君、しっかりポケモン育ててね！」

シロナさんが僕に向かってウィンクをし、次の瞬間ミロカロスは潜水を開始していた。

いつも静かな湖面が大きく波立ち、やがて小さな波紋になった。行ってしまった。

シロナさんは行ってしまった。

僕はふと、腰につけているモンスターボールに触れた。

シロナさんが僕にくれた、僕だけのポケモン。

いつかきつとシロナさんに、このコが立派に成長した姿を見てもらおう。

僕はそう誓った。

- 潜水 - (後書き)

シロナのミロカロスはこうやってゲットしたという、作者妄想話。

余談ですけど、過去作であんなに苦労して釣り上げたヒンバスが第五世代では簡単に釣り上げられてしまい、多少ショックでした。

- 孵化 -

シロナさんが行ってしまったってからというもの、僕は一日の時間の多くを布団の中で過ごした。

シロナさんが去ってしまった悲しさからではない。少しでも早く、シロナさんのくれたポケモンの姿を見たかったからだ。

安直な考え方かもしれないが、やはり卵は温めた方がいいのではと思ったのだ。シズクやノリが誘いに来ても居留守を使ったり何かと理由をつけ、僕は外に出なかった。驚かせてやろうと思い、僕は卵のことを二人には内緒にしていた。

しかしそんな生活を2、3日ほど続けたが、卵は依然として孵らなかった。

「中々孵化しないもんなんだなあ…シロナさんにどれくらいで孵るか聞いておけばよかった…」

そんな事を呟きながらも、僕は決して嫌ではなかった。夢にまで見た自分のポケモンの卵が、今手の中にあるのだ。先の見えない釣りを続けるしかなかった少し前とは大きな違いである。

卵が孵る日のことを夢見て今日も部屋の明かりを消した。

ある朝目が覚めると、僕は不思議な手触りを感じた。ふさふさとして、滑らかな短い毛に触れているようで、布団とは別のぬくもりを感じる。

まだ寝ぼけているのかな…シロナさんを見送ったあの日以来、眠くないわけではないのだがどうも早く目が覚めてしまう。

ぼやけた意識の中で目を擦りながらふと目線を落とした僕は、一気に目が覚めた。

卵が無かったのだ。

正確に言うと、卵があるはずの場所に、別の生物が寝ていた。

全身が青い毛に覆われていて、目の周りから鼻にかけて鉢巻きでも巻いているかのように黒い毛が縁取っている。

狐のような外見をしているけど、決して狐ではなかった。

これは…これはポケモンだ。

僕のお腹に寄り添うようにして寝息を立てていた。僕の心臓は高鳴った。

ふと、開いたモンスターボールの中に紙が入っていることに気がついた。手紙のようだ。

こんな所に手紙を潜ますのは他にいるはずがない。シロナさんだ。

” ”

スズ君、こんにちは。この手紙を読んでいるということは、卵は無事に孵化したようですね。

私もとても嬉しいです！

さて、このポケモンですが、シンオウ地方でも比較的最近見つかったポケモンなのでハウエン地方の図鑑にはまだ載っていないかもしれません。名前はリオルといいます。とってもかわいいわよね！

このコはとっても賢いコで、相手の感情を読み取る事ができるそうです。仲良くなれば会話できるようになっちゃうかも！…なんてね。

ちなみにタイプは格闘です。大切にしておいてね！

/ / シロナ / /

” ”

リオル。

僕に寄り添うようにしてすやすやと寝息を立てて眠る、このポケモンの名前。

僕はリオルを起こさないように、そっと抱きしめた。

- 孵化 - (後書き)

リオルかわいいよりオル。

<http://wiki.pokemon.com/wiki/%E3%83%A3%E3%82%AA%E3%83%AB>

全国図鑑が完成しました。

最初に選んだポケモン↓ポカブ。

最後にゲットしたポケモン↓ピィ。

長かった……

- 起床 -

それからしばらく、僕はリオルが目覚ますのを待った。

いくらでも待つつもりだった。待てると思った。

当ても無く釣竿を垂らしているのとは訳が違う。僕は目の前の、小さく寝息を立てているポケモンと一緒にいれるだけで幸せだった。

しばらくすると、リオルがもぞもぞと動いて目を覚まし、ずっと見つめていた僕と目が合った。

「あ、あの…僕はスズ。ええと…」

どうしたらいいかわからずにあたふたする僕を尻目に、眠そうに目を擦ったリオルは再び寝てしまった。

僕は苦笑し、リオルの頭を撫でた。

僕が焦ってどうする。落ち着かなくては。

それからしばらくして再び目を覚ましたリオルは、とろんとした目で僕と向かい合った。

「はじめまして、僕はスズ。君はリオルって言うんだよね？よろし…わっ」

言い終わらないうちに、リオルが僕に抱きついてきた。

しかし、卵から生まれ、いきなり外の世界に放り出されたばかりだ。考えてみれば無理もない反応かもしれない。

僕は再びリオルの頭を撫で、抱っこしてあげた。はやる気持ちを抑えながら居間へ向かう。

「母さん！」

台所で洗い物をしていた母さんは、振り返ると目を丸くした。

「あら！そのコモしかして…」

「シロナさんからもらった卵が孵ったんだ！リオルっていうんだっ

て！」

「そう、リオルちゃんっていうの。とってもかわいいじゃない！」
母さんはそういって、リオルの頭を撫でた。リオルは気持ちよさそう
な声を出した。

「ミクリさんに見てもらったら？あの人も楽しみにしていたわよ」

「ああ、そうだ。うん、そうする！行つてきます！」

あらあら、ごはんも食べずに…と母さんのあきれた声が聞こえたが、
構いはしない。

僕は勢い良く太陽の下に飛び出した。

家を出てふと湖を見ると、ミクリさんが湖の前にいるのが見えた。

「ミクリさん！」

ミクリさんは、町の入り口の湖の前にいた。

僕は太急ぎで湖まで駆け下り、ミクリさんの下へ向かった。

「おはようスズ君。どうした、なんだか楽しそうだね…！そのポケ
モンは！そうか、卵が孵ったんだね！」

「はい！今朝！このポケモンはリオルっていうそうです」

僕はシロナさんからの手紙を見せた。

「へえ…なるほど、僕も初めて見るポケモンだよ。そうか、格闘タ
イプか」

リオルは相変わらず僕に抱っこされたままだったが、さっきからあ
たりをキョロキョロ見回していた。始めてみる世界に興味津々なの
だろう。

「ところで、ミクリさんは何をやってるんですか？外の世界へ？」

「いや…なんだか最近湖のポケモンがえらく大人しい気がするね…
気のせいだったらいいのだけどね…」

相変わらず静かな湖面を、ミクリさんは真剣な顔で眺めていた。

普段飄々としているミクリさんの、あまり見たことない表情だった。

「そういえば、僕が釣りをしていたときも全然釣れませんでした。

…何か関係あるんでしょうか？」

ミクリさんが笑っていった。

「ははっ、それは君の実力だろう。それより、リオルを友達にも見せてあげなさい。みんな驚くと思うよ」

ミクリさんはいつものミクリさんに戻っていた。

「あ、そうですね！早速行ってきます！」

僕は走りだした。

「何もなかったらいいんだけどね……」

独り言のように呟いたミクリさんの声は、僕の記憶からすぐに消えてしまった。

- 争い -

「おーい、みんなー！」

僕とリオルはでこぼこの道を勢い良く走り、いつもみんなが集まっている円形広場へと駆け込んだ。みんなは相変わらずポケモンたちと遊んでいるようだった。

「おースズ、久しぶりじゃねえか。最近家から出てないみたいだったからもう諦めちまったのかと思ったぜ。ようやくコイキングでも釣れたか？」

ノリがからかうように言った。

「ノリくん！…スズくん、どうしたの？えと…ポケモン、釣れたの？」

僕は肩で息をしながら、言った。

「ポケモンは…釣れてない」

ノリがバカにするように笑い、シズクは困ったような顔をした。

「でも…ほら！」

僕は後ろに隠れるようにしていたリオルを横に立たせた。

「この前シロナさんにもらった卵が孵ったんだ！リオルって言うんだって！」

リオルは僕の足にくつついて、恥ずかしがっているようだった。上目遣いに二人を見上げている。

「わー、かわいい！」

シズクが近寄ってきて、頭を撫でた。多分リオルは、今日が今後の人生で一番頭を撫でられる日じゃないだろうか。

「リオルくんって言うんだー。よろしくね！私はシズク、このコはマリル」

リオルは初めは恥ずかしそうにしていたが、次第に打ち解けたようで、マリルと追いかっこしたりして遊び始めた。

「すごいよスズくん！私あんなポケモン見たことないっ！」

「なんだよ…」

ノリが呟いた。

「なんだよ、あのポケモン！全然見たこともねえぞ！図鑑に載ってるのも見たことねえ！」

「り、リオルはホウエンには住んでいないポケモンなんだよ。シンオウ地方で最近発見されたんだって」

突然大きな声を出したノリに、僕は驚いてしまった。リオルも驚いて、僕の後ろに隠れた。

「なんでそんなポケモンをお前が持ってたんだよ！大体シロナってのは誰だ！」

「誰って…」

シロナさんは本当に僕の家とジムを往復していただけらしく、ノリの目には留まっていなかったようだ。僕が卵をもらったことはともかくとして、小さな町なのでシロナさんが滞在していた事は当然みんな知っていると思っていたのだが、意外だった。

「この前シンオウから来たトレーナーの人だよ。家にしばらく泊まってたんだ。その人からもらった卵が孵ったんだよ」

「嘘付け！そいつポケモンじゃねえだろ！」

「ちよつと、やめなよノリくん！どうしたの急に」

シズクがなだめようとしたが、ノリは止まらなかった。

「俺のメノクラゲと勝負しろ！勝ったらそいつの事認めてやる！」

「何言ってるのよ！リオルくんは生まれたばかりなのに、勝負なんて無理に決まってるでしょ！」

「シズクは黙ってるよ！メノクラゲ、バブル光線！」

ノリのメノクラゲは戸惑っていたようだが、バブル光線を発射した。無数の泡がリオルめがけて襲ってきた。

「り、リオル、避けて！」

生まれたばかりのリオルだったが、僕の意味が通じたのか、光線ですんでのところでかわす。

「ちくしょう、メノクラゲまきつけ！」

体制を崩しているリオルに、メノクラゲの触手が絡みつき、締め上げた。リオルは四肢をからめとられ、苦しそうな声をあげる。

「リオル！」

僕はどうしていいかわからず、完全に混乱してしまっていた。

「ああもう！マリちゃん、アクアジェットで引き剥がして！」

シズクのマリルが目にも留まらぬスピードで二匹の間に割って入り、強引にリオルを解放した。

「！シズク、何しやる！」

「何しやるじゃないでしょ！ノリくん、どうしたの！？何が気に入らないのよ！」

しばらく立ちすくんでいたが、畜生と吐き捨てると、ノリは行ってしまった。

- 治療 -

僕は傷ついたリオルを急いで家に連れて帰り、傷薬を塗ってあげた。何箇所か擦り切れたようになっていたが大きなケガは無いようで、僕は一安心した。

リオルはすっかりしょんぼりしてしまっているようだった。

生まれたその日に訳もわからずメノクラゲに締め上げられたのだ。当然と言えば当然だろう。

「リオル…大丈夫？ノリの奴どうしたんだろう急に…口調は乱暴だけど、あんなことするヤツじゃないのに…」

みんな喜んでくれると思ってていた僕は、リオル同様しょんぼりしてしまった。

「スズくん…」

外から声が聞こえてきた。シズクだ。僕は窓を開けた。

「リオル大丈夫？怪我とか…してない？」

「うん、怪我っていう怪我は心配なさそう。上がっておいでよ」

「う、うん…じゃあお邪魔しようかな。行こう、マリちゃん」

シズクが家に入ってきた。なんだか僕の部屋にシズクが来るのも久しぶりな気がした。

シズクもノリも、小さい頃からずっと一緒に遊んでいたけど、いつ頃からか互いの家に行ったりする事は少なくなっていた。

大して広い部屋でもないのに、人間二人、ポケモン二匹で部屋にいるとさすがに少し窮屈に感じてしまう。

「さっきはありがとう。あのままだったら僕どうしていいかわからなかったよ」

僕はお礼を述べた。あのままバトルを続けていたら果たしてどうなっていただろうか。

「ううん、私もちょっと乱暴になっちゃって…ごめんね」

マリルは心配そうにリオルの顔をぺたぺたと触っている。

「それにしてもノリのやつ、どうしたんだろう…あんな乱暴なことをするやつじゃないのに」

「きつと…悔しかったんじゃないのかな」

「悔しいって…僕が珍しいポケモン捕まえたのが？」

「わからないけど…といいつつも、シズクは小さく頷いた。

「なんだよそれ…ちよつと前まであんなに得意そうにしてたくせに」
「いっそのこと勝負して勝っちゃえばいいんじゃないの？本人もああ言ってたんだし」

シズクが意外にも好戦的な事を言った。

「そんな…せつかくみんなで遊べると思ったのに…」

僕が再び肩を落としたのを見て、リオルが心配そうに覗き込んできた。

「あ…ごめんなリオル。大丈夫だよ」

生まれたばかりのリオルに心配かけてどうするんだ。

しかしそんな事言われてもなあ…こればかりはどうしようもなかった。

「私はリオルの事大好きだよ！リオル、私とも仲良くしてね！」

シズクがリオルを抱きしめた。リオルも少し落ち着いてきたのか、笑顔がこぼれた。

「ちよ、ちよつと、僕のポケモンだからね！？」

僕は慌てて言った。

- 治療 - (後書き)

r z 眩きですけど、ヤドランって進化の輝石効果なかったのですね... 0

- 特訓 -

翌日も、翌々日も、ノリは広場に顔を出さなかった。

このままでいるのもすつきりしないので家にも行ってみたのだが、どうやら家にいるというわけでもないらしい。

あいつどこで何してるんだ…僕は疑問に思ったが、それ以上は特に何もしようとは思わなかった。

別に僕が謝る筋合いもないだろうと少し意地になっていたし、それにリオルとの時間が楽しくて、ついつい一緒に遊ぶ時間が長くなっていたというのもある。

リオルは格闘タイプというだけあって、身のこなしがとても機敏だった。

また、これはシロナさんからの手紙に書いてあったのだが、すでにバレットパンチという技を覚えているのだという。

もともと勝負事にそれほど執着心の強くない僕は別にトレーナーになりたいというわけではないのだが、先日のように有無を言わず突然勝負を挑まれる可能性も無いとは言えなかった（この町にいる上では限りなくゼロに近いだろうが）。

僕はいつもの円形広場で手ごろな岩を見つけるとリオルと一緒に前に立ち、拳を突き出すそぶりを見せた。リオルは僕と岩とを交互に見ていたが、やがて意味を理解したのか拳を握り、岩に向かって突き出した。

一瞬のうちにリオルからものすごいスピードのパンチが放たれた。眼前にあった岩が削れ、破片が飛び散る。

僕の目ではほとんどその拳の軌道を見ることができなかった。

「おおー、リオルすごい！」

僕が目丸くしていると、リオルは照れたような笑顔を浮かべた。格闘タイプというだけあり、生まれながらに体の効率的な使い方を

知っているのだろうか。

「り、リオルもう一回！バレットパンチ！」

リオルは得意そうに再び拳を繰り出した。

僕達はそんな風にして、一日を過ごしていた。

僕達はどこへいくのも一緒だった。

一緒にご飯を食べ、一緒に風呂に入り、秘密の場所で一緒に空を見上げ、寝るときは一緒の布団で寄り添って寝た。

なんだか家族が一人増えたみたいね、と母さんは言った。

次第に町の人たちとも馴染みになり、リオルは毎日が楽しそうだった。

言っまでもないことだが、もちろん僕も楽しかった。

何日かが過ぎたが、ノリは相変わらずだった。

家を訪ねてみてもおらず、どこかに出かけているらしい。

小さな町なのでどこかに行っているといってもたかが知れているはずなのだが、ノリを見かけることは無かった。もしかして町の外に出ているのでは…という考えが一瞬浮かんだが、まさかノリのメノクラゲがすでにダイビングを使えるということはないだろう。

以前ミクリさんが言っていたのだが、ダイビングという技は秘伝技として位置づけられているのだという。

例えば秘伝マシンのようなものでもあれば別だが、誰の教えを乞うでもなく自力で習得するのは困難を極めるそうなのだ。

そんな技を、ポケモンを持って日の浅いノリのメノクラゲが身につけているとは思えなかった。

ある日の昼下がり、家でリオルのブラッシングをしているとシズクが神妙な面持ちで訪ねてきた。

「スズくん、ノリくんの事なんだけど…」

「うん。あいつ相変わらずどこに行ってるかわからないよね…こんな小さな町で見かけすらしいなんて、ちょっとおかしい」

「…山の湖に行ってるらしいの」

「山の湖…嘘だろ!？」

僕は思わず大きな声をあげてしてしまった。シズクも驚いたようだったが、黙って頷いた。

山の湖とは、町の入り口にある湖とは真逆に位置する山の、洞窟の中にある湖だ。ある時期から凶暴なポケモンが住み着いているという噂が流れ、出入り禁止となっている場所だった。この町で唯一、人の手がまったく届いていない場所と言ってもよかった。

シズクの聞いた話だと、釣り竿をもって山を登っていくノリの姿が

何度が目撃されていたようなのだ。

「なんでそんなところに…」

「…スズ君、本当にわからない？」

「…ごめん、わかる」

簡単な事だ。ノリは珍しいポケモンが欲しいのだ。

もしかしたらその凶暴なポケモンを手に入れて、僕を、あるいは僕達を見返したいのかもしれない。

「…やめさせないと」

僕はきっぱりと言った。

「あいつが望むなら勝負でも何でもしてやる。だからそんな危ない事は止めさせよう。もしかしたらまたあいつのメノクラゲと戦うことになっちゃうかもしれないけど…ごめんな、リオル」

リオルは力強く頷いた。

ここ数日の特訓で、僕達はある程度対戦の呼吸をつかんでいた。

… 本当にある程度だけど、同じ初心者ノリとだったらそれなりに勝負できるところまではきているだろうと思う。

「で、でも、まだ決まったわけじゃないわ」

「決まりだよ。山で釣りができるところをシズクは他に知ってるの？」

シズクは無言で俯いてしまった。

「すぐ行ってみよう。シズクはどうする？」

「も、もちろん私も行くわ！」

実際のところ、この町にそんな凶暴なポケモンが住み着いているとは僕は思えなかった。

しかし凶暴なポケモン云々が単なる噂だったにしろ、立ち入りを禁止されるにはそれなりの理由があると思っただろうが正しいだろう。

僕達は念のために家にあった傷薬を持ち、山の湖がある洞窟へと向かった。

でこぼこの山道を30分ほど登っていくと、湖のある洞窟はすぐに見えてきた。

早足で来たせいか、僕もシズクも額に汗を浮かべている。リオルもマリルも、弱音をはくことなくついてきていた。

「ねえスズ君、本当にここに…」

それほど大きな洞窟ではないと聞いていたが、山肌にぽっかりとあいているそれは、なにか不吉なものの入り口のように見えた。

「ここまで来たんだから、もう行ってみるしかないよ。中にノリがいれば説得して連れて帰るし、いなかったらメノクラゲにダイビングでも覚えさせて海底散歩でもしてるんじゃないかな」

僕は冗談交じりに言った。だって、ダイビングなどという技を覚えただのならノリはきっと自慢げに披露してくるはずだから。

「シズク、ここで待つてる？中は僕が見てくるよ…リオルを預かって貰える？」

「…うん、わかった。気をつけてね。何かあったらすぐに戻ってきてね…」

シズクが心配そうに言った。

リオルを置いて行こうと思ったのは、リオルの姿を見たノリが妙な嫉妬心にかられてしまつては面倒な事になると思つたからだ。

本当は僕も心細くてみんなと一緒に行きたかつたのだが、シズクは明らかに怖がつていた。

シズクに抱きかかえられたリオルは心配そうに僕を見ていたが、僕は決意を固めて洞窟に踏み込んだ。

といつても、それほど大きな洞窟ではない。

確かに薄暗くて不気味ではあるけれど、ところどころ空が見え光が差している場所もあったし、何より一本道で迷いようがなかった。

時々何かの羽ばたくような音がかすかに聞こえるが、ポケモンだろうか。

足元に気をつけつつ進むと次第に視界が開け、湖が見えてきた。もつとも、湖というほど大きなものではないが、ここからも海につながっているらしい。

湖の畔には、釣り竿を垂らす見知った背中があつた。ノリとメノクラゲだ。

湖は町の入り口と変わらず、揺らぎ一つなく静かだった。もつともこちらは洞窟内にあるから納得と言えば納得であるけれど。

「ノリ……」

僕は静かに友人の名前を呼んだ。

「スズか……こんなところで何してんだ？」

ノリが座ったままゆっくりと振り返る。

「そりゃこつちの台詞……ノリこそ何してるんだよ」

「俺か？見ての通りだよ。誰かさんよろしくせつせと釣りをしてるんだ。ここに住んでる凶暴なポケモン釣り上げてやろうと思ってな」

「なんでそんな危ない事……」

言ってしまった後、僕はハツとした。

「何で、だど。……くそつ、まあいいや。……お前あの青いポケモンはどうしたんだよ」

「リオルは……シズクと入り口で待ってる。ノリも早く……」

「俺は帰らないよ。ここでポケモン釣り上げるまではな」

「ノリ、いい加減に……」

「うるせえってんだよ！さっさと帰れ！畜生、変な気使いやがって！」

「みんな心配してるんだよ！お前にはメノクラゲがいるだろう！いいから早く……」

「はっ、こんなやつ珍しくも何ともねえ！俺は絶対このポケモンを捕まえてやるんだ！」

隣のメノクラゲがなんとも悲しそうな顔をしたのを僕は見逃さなか

った。

「ノリ、お前……」

「文句があるならかかってこいよ。それとも俺に負けるのが怖くてあの青いポケモン連れてこなかったのか？」

ゴボリ。

静かだった水面が突如、揺れた。

- 嫉妬 - (後書き)

私事ですが、色違いリオル生まれました。これからリオルと一緒に冒険するんだ！

突如洞窟に響いた凄まじい音に、さすがにノリも驚いたようだった。
「な、なんだ…？」

突然静かだった水面が大きく波打ち始め、激しい水しぶきをあげて巨大な何かが飛び出して来た。

洞窟の天井に届かんばかりの大きさで、それは凄まじい咆哮を轟かせた。

それだけで僕は尻餅をついてしまった。天を仰ぐようにして声の主を見る。

「ギャ、ギャラドス…」

同じく腰を抜かしたノリが呟いた。

ルネ近海でギャラドスの目撃例は確かに無いではなかったがほんの数えるほどであり、町の人たちは大して危機感は抱いていなかったし、にわかに信じていない部分さえあった。

「う、うわ…」

圧倒的な威圧感にノリが後ずさる。こうなってしまうてはもう捕まえるどころの話ではなかった。

「ノリ、逃げよう。どうしようもないよ…」

「…うるせえ…俺は捕まえるんだ…メノクラゲ！」

「ダメだ、逃げなきゃ…僕らの力じゃどうしようもない事ぐらいわかるだろ！」

「メノクラゲ、超音波！」

メノクラゲがなにやら怪音波を発した。

相手を混乱させる技だと聞いたことがあるが、どうやら相手には効かなかったようだ。僕達は完全に飲まれていた。

「メノクラゲ！…ちくしょう！」

「いい加減にしろ！」

再びギャラドスが大きく吼え、こちらに向かってきた。

メノクラゲが僕達を庇うように前に立ちふさがり、ギャラドスに吹き飛ばされる。

「メノクラゲ！」

メノクラゲは吹き飛ばされ、壁に叩きつけられて苦しそうな声を上げた。

「……」

ノリは無言でメノクラゲをボールに戻す。

「……ごめんな、スズ」

「こんな状況で謝られても……無事に帰れたらメノクラゲにもちゃんと謝れよ……」

「……うん」

とはいえ、とてもなんとかできる状況ではなかった。シロナさんのガブリアスと初めて遭遇した時のような感覚が僕を襲っていた。

曲がりくねった洞窟の道まで戻れば何とかなるかもしれないけど、たどり着くまでには簡単に追いつかれてしまうだろう。

ギャラドスが咆哮をあげ、僕達に襲い掛かってきた。

ああ……もうだめだ……と思った。

「マリル、濁流！」

突然声が聞こえ、ギャラドスを水流が襲った。

虚をつかれたらしいギャラドスは怯んだのか、体を後退させた。

「早く！早く戻ってきて！」

シズクだ。ギャラドスの咆哮を聞いて助けに来てくれたのだろうか。僕達は弾かれたように走りだした。

しかしすぐにギャラドスは体制を建て直し、再び襲い掛かってきた。鋭い牙を僕達に食い込ませようと噛み付いてきたが、紙一重のところで攻撃が外れた。自分の心臓がものすごい速さで鼓動しているのを感じる。

「……リオル、だめっ！」

シズクの声で前を見ると、リオルがこちらに向かって走ってくるのが見えた。

「リオル！僕達ならすぐ行くから大丈夫だ！」

そうは言ったもののあと20mほどの距離があり、ギャラドスはすぐ後ろにまで迫っていた。

濁流で目をやられたのかギャラドスは攻撃が定まらないようだったが、運よく外れ続けるといってもいい。こうなったら一か八かだ。

僕は走ってくるリオルに向かって叫んだ。

「リオル、バレットパンチ！」

ここ数日練習していた技をリオルは走ってきた勢いそのまま、ギャラドスの顔面に叩き込んだ。

「リオル、もう一回！」

パン、パンツと小気味よい音が響き、ギャラドスが再び湖に後退した。

倒すことは出来なくても、リオルの素早い攻撃は時間を稼ぐぐらいはできるだろう。

「今よ、早く！」

「リオル、行くよっ！」

僕は、何故かたった今攻撃したギャラドスをじつと見つめているリオルを抱え上げ、曲がりくねった洞窟の小道に飛び込んだ。

- 凶悪 - (後書き)

bw発売当初、バスラオはてっきりコイキング的ポジションだと思
ってました。

- 脱出 -

ギヤラドスの咆哮を背中に受けながら薄暗い狭い通路を必死で駆け抜け洞窟から飛び出した僕達は、背後を確認するとへなへなと座り込んでしまった。みんな肩で荒い息をついていた。

「ああ……死ぬかと……思った……」

ノリが息も絶え絶え仰向けに倒れる。

「……ほんとだよ！バカ！ノリのバカ！スズのバカ！もうあんなところ絶対行かないでよっ！」

荒い息をつきながら、シズクは泣き出してしまった。

僕までバカ呼ばわりされるのは心外な気もしたが、甘んじて受け入れた。

「……二人とも、ごめんな」

か細い声で、ノリが謝った。

「いや、もういいよ……でも……その、メノクラゲにもちゃんと……」

「わかってる。怪我が治ったらちゃんと謝る」

しばらく三人ともでこぼこの山肌に腰を下ろして呼吸を整えていたが、シズクも泣き止み次第に余裕が出てきた。洞窟から出た後の太陽光の安心感といったらなかった。

「シズク、ありがとう。あのときでくれなければきっと今頃やられてた。リオルもマリルもありがとう」

僕は率直にお礼を言い、リオルの頭を撫でた。リオルは誇らしさと照れくささの入り混じった笑顔を見せた。

「スズくんが洞窟に入ってしばらく経った後、急にリオルが洞窟に駆け込んでいったの。追いかけてようと思ったらあのものすごい鳴き声が聞こえたから、きつと何かあったんだと思って……」

「リオルが……？」

どうしてリオルが僕達の危機を察知したのかは分からなかったが、おかげで助けられたのは確かだった。

「まさかギャラドスが住んでたなんて思わなかったわ。本当に無事でよかった…」

それは本当に僕も驚いた。凶暴なポケモンが住んでいるなんて噂は信じていなかったが、おかげで命を落とすところだった。

いつの間にか日が落ちかけていた。

真っ暗になる前にみんなで山を下り、僕達は解散した。

ノリはメノクラゲの手当てをしなくてはいけなかったし、何よりあんな事の後で、みんなとても疲れていた。

僕はリオルと手を繋いで家路についた。

「リオル、本当にありがとう」

僕は再びリオルにお礼を言った。

リオルは嬉しそうな顔で僕を見上げた。

「でもどうして僕達の危機がわかったんだろう。シズクの話だと、ギャラドスの咆哮が聞こえる前にすでにリオルは察知してたみたいだった…」

僕は一人独り言ちたが、考えてわかることはなかった。あるいはシロナさんなら何か知っているのかもしれないけど、シロナさんはもう行ってしまったのだ。

「まあ、いっかー」

僕は結局そう思った。

今生きている。死を覚悟したあの瞬間の事を思うと、多くのことはどうしてもよく感じられてしまうのだった。

「それよりさ、リオル。さっきのバレットパンチ、きれいに決まったよね！あんなでっかいギャラドスがリオルのパンチで後退したもんなー」

リオルもテンションが上がっているのか、僕の前で飛び跳ねていた。僕達は興奮状態で家に帰り、夕食を食べて早々に寝てしまった。

こうして僕達の初めての实战は幕を閉じたのだった。

ごぼり。

月光に照らされた湖に大きな波紋が揺らぎ、何事もなかったかのよう
に止まった。

- 脱出 - (後書き)

次回、新展開つ！
↑

- 異変 -

ギャラドスと戦った日（正確に言うと逃げ延びた日）から、数週間が経った。

僕達は無事に仲直りし、以前のように三人で遊ぶようになっていた。共に危機を乗り越えたという一体感もあつてか、僕達の仲は以前よりさらに深くなっているような気さえする。

「母さん、行つてきます！」

僕は靴を履きながら言った。

「はい、行つてらっしゃい。またノリくんと勝負？」

「そう、今日こそあいつに勝ち越してやるんだ！」

ふふ、と母さんは笑つていった。

「がんばつてね。リオルちゃんも怪我しないようにね」

リオルはすでに外に出て僕を催促していた。

いつものように母さんに見送ってもらい、僕も大急ぎで外に出て走り出した。

「遅いぞ、スズ。逃げたのかと思つたぜ」

太陽が丸い空の真ん中まで登ったとき、いつもの円形広場で僕達は対峙した。

「別に遅れてないだろ。なに、ノリもしかして焦つてるの？今日こそ勝ち越させてもらうよ」

「でかい口たたくな。んじゃま、始めるかね。いくぞメノクラゲ！」

ごぼり。

ごぼり。ごぼりごぼり。

湖に小さな揺らぎが生まれる。

このときすでにそれは起っていたのだが、僕達は気付いてはいなかった。

「リオル、発勁！」

リオルの拳が光を纏いメノクラゲを捉えようとしたとき、リオルの動きが急に止まった。

「……………」

「リオル、前！」

何かに気を取られたリオルを、メノクラゲの水の波動が吹き飛ばし、決着はついた。

「リオル！」

僕は駆け寄った。岩肌に叩きつけられたリオルは気を失っているようだったが、やがて意識が戻った。

「……………」

意識が戻ったりリオルは急に走り出し、展望台のようにひらけている広場の崖から町を見下ろしていた。

「リオルどうしたの？……………大丈夫？」

僕は様子がおかしいリオルのところに行き、その目線の先を見た。

町が広がっており、その先には町への出入り口である湖が広がっている。

普段は静かなその湖が、激しく揺れ動いていた。

「おい、どうした？……………なんだ、あれ」

不審に思っただけについてきたノリも、湖を凝視した。

湖に大きな影が現れたかと思うと水柱と共に巨大な生物が数匹、姿を現した。

「あれは…ホエルオー？あんなでかいの初めて見たぜ。なんでこんなところに……………」

ホエルオーのダイビングが解除されると、灰色の服を着た人々が次々と町に降りてきた。

素早い動きで斜面を登り、家々に飛び込む。

「な、なんだあいつら……………あいつら俺の家に！くそっ、シズクの家

も……」

言うが早いか、ノリは駆け出していた。

「ノリっ！ちょっと待って、もう少し様子を見たほうが……」

男達がホエルオーから降りてきて10分もたっていないだろうか。町は完全に占領されていた。

「ミクリ！」

ジムの外側から、男達の一人が叫んだ。

「出て来い。抵抗したら町の人々を傷付けざるをえない。出てこなくても同じだ」

ミクリさんは無言でジムから出てきた。

「よし、ポケモンを奪え」

男達が出したポケモンが、町の人々を威嚇している。モンスターボールを手渡すミクリさんが見えた。

- 異変 - (後書き)

10000PVを超えました。ありがとうございますー。

男達が使っているのは図鑑でも見たこと無いようなポケモンだった。なんだあれは…シロナさんのガブリアスのような、別の地方のポケモンなのだろうか。

僕達が息を殺している間に、瞬く間に町は制圧されてしまった。

「諸君、おとなしくしていれば我々は何もしない。特にミクリ。ポケモンを取られては何もできないだろうが、余計な事は考えない事だ」

「気安く呼ばないでくれるかい。僕には君達みたいな知り合いはいないんだよ。……要求はなんだい」

ミクリさんが静かに言った。

「別に、要求するものは何もない。我々の滞在している間、ただ大人しくしてもらいたいだけだ。もちろん普段の生活に対してある程度の制限はさせてもらうが、仕方ないと割り切って頂きたい。ああ、そうだな。強いて言うなら、諸君らに要求することはただ大人しくしてもらいたいだけだ。我々は決して積極的に危害を加えないもちろん、君達が大人しくしてしてくれるのであれば、だ。くどいようだがもう一度言う」

男は一呼吸おいて言った。

「君達に要求するのは、ただ大人しくしてもらいたいという一点だけだ」

町の人々はいまだに何が起きているのか判断しかねる様子で、不安そうに顔を見合わせあっている。ミクリさんだけが唇をかみ締めていた。

「ど、どうする…」

僕の出した情けない声に、しばらく考えてノリは答えた。

「俺達だけじゃどうしようもない……。けど」

「けど、ミクリさんが自由になれば、あいつら何とかできるかもしれない。どうにかできねえかな…」

突然巻き起こった非日常的な出来事に、僕は完全に思考停止状態に陥っていた。

「幸い俺達はまだ見つかってないみたいだからな…なんとかして」

「お前らも今の話聞こえてただろ？ 暴れなければ何もしない。少しの間我慢してくれるだけでいいんだ。変な事考えないで俺と来い」突然背後で聞こえた第三者の声に、僕達は慌てて振り返った。

灰色の服を着て、明らかに敵の一味と思われる男が立っている。男は二足歩行する亀のような外見で鎧のように甲羅をまとっているポケモンを連れていた。

声の主はゆっくりと近付いてくる。

「くそ…見つかったか」

「ど、ど、どうしよう…」

「どうしようもこうしようもねえだろ…くそ。俺達の勝負はひとまずお預けだな…スズ、逃げるぞ」

ノリが小声で話しかけてきた。

「う、うん…」

僕は少し意外だった。ノリの性格だったらバトルを選ぶのではないかと思ったからだ。ノリは僕なんかよりずっと冷静なようだ。

「俺達だけであんな強そうなポケモンに敵うとは思えない…この場はなんとか逃げ延びて、チャンスを待とう…ミクリさんさえ解放できればきつとなんとかなる」

「う、うん…わかった」

「同時に両側から逃げよう…行くぞ！」

僕とノリは円形広場の岩肌に沿って走り出した。

「ガキが…まあいい。片方だけでも捕まえるぞ。…うつ、」

男が僕の方を向いたその時、突如男めがけて泡が勢いよく発射された。男のポケモンが立ちふさがり、それを防ぐ。

「バブル光線…」

「ノリ！」

「いいから早くいけつて。どのみちこいつなんとかしないと身動きとれねえ」

「……………！」

僕とリオルは全力で走り、円形広場を抜けた。

「お前ポケモントレーナーか？そのメノクラゲで俺のアバゴーラとやろうつてか。…抵抗する場合は安全の保障はしないって、お前ちゃんとして聞いてたよな？」

男がにたあと笑った。

「楽しませてくれよ」

- 野宿 -

夜になった。

まあるい夜空に星が瞬いている。

町とは対照的に、夜空はいつもと変わりなくその美しさを存分に披露していた。

「……」

僕だけの秘密の場所で、僕は膝を抱えて震えていた。寒い季節ではないのに、なぜだか震えは止まらない。

いつまでも震えているわけにはいかないのはわかっていた。

ここは確かに見つかりにくい場所だと思うけれど、いつ見つかってしまうとも限らない。

町の明かりが眼下に見える。騒動などは起っていないのか、静かな夜だった。

朝いつものように家を出た時は、まさかこんな事になるなんて思いもしなかった。

ノリはどうしただろうか。あの男のポケモンはいかにも強そうだった。それにシズクや母さんは無事なのだろうか。

「……」

リオルが心配そうに僕の顔を覗き込んできた。

「ごめんな…大丈夫…大丈夫…」

僕は溢れそうな涙をリオルを抱きしめてごまかし、星明りの下で夜を明かした。

翌朝、リオルに揺り起こされるようにして目が覚めた。

リオルが崖の下を指さしている。

慌てて行ってみると、数人の男達が山道を登つてくるところだった。まだだいぶ下の方ではあるが、いずれここまで登つてくるであろう事は明白だった。

「うう…どうしよう…」

この場所が見つからない可能性もあったが、ここは袋小路になっているため万が一見つかってしまった時に逃げ場がない。かといってここを離れたところで、どんどん上へ追い込まれていくだけだった。僕の動揺が伝わったのか、リオルも不安そうな顔をしている。

あいつらは大人しくしていれば何もしいと言っていた。ならばいつその事素直に投降してしまうのも手ではないだろうか。

…我ながら虫のいい考えだと思った。そんなはずはない。

何もしいのなら、そもそもこんな閉ざされた島まで（おそらく別の地方から）はるばる来るはずがないのだ。あいつらは、何か目的があつて、この島に来ている。そしてその目的は、おそらく人々の賛同を得られないと考えているのだろう。

このまま何もしいでいても、事態が好転するはずがない事はわかっていた。

わかっていても、僕にはどうする事もできない。この町から外に出る事は僕だけではできないし、あの人数相手に戦って勝てると思えなかった。

「ちくしょう…どうすれば…どうすれば…」

突然、リオルが僕の手を引いて走り出した。

「り、リオル！？どうしたの？」

山を少し下り、半ば強引に引きずられるようにしてたどり着いた先は、洞窟の入り口だった。

数週間前、僕達がギャラドスと遭遇して死ぬ思いをしたあの洞窟だ。ここに逃げ込もうというのだろうか。

僕はためらったが、どうにでもなれという半ばやけくそな思いで洞窟に飛び込んだ。

- 偵察 -

どうせどこにいても見つかってしまうのだ。

そんな思いで洞窟に飛び込んだわけだが、やはり進む足取りは重かった。

洞窟内の薄暗さのためだけではない。この奥の湖は、ギャラドスの棲み処なのだ。

僕の脳裏に数ヶ月前のことが甦り、思わず身震いした。

結局最奥まで進む勇氣はとも起らず、洞窟の中腹で息を潜める事にした。

さつき男達がいた場所を考えると、この洞窟を見つけるのにはあまり時間はかからないだろう。なんとかスルーしてくれないだろうか。洞窟の中から外の音は全く聞こえない。僕は男達がどのあたりにいるのかわからず、しばらく薄暗闇の中でリオルと息を潜めていた。

どのくらい時間がたっただろうか。10分？15分？それともまだ5分も経っていただろうか。

ふと何かの気配を感じた。

薄暗い天井付近から視線を感じる。以前来た時はズバットでも飛んでいるのかと思ったが、それとはまた別の感覚だった。

僕が視線を上に向けたとき、突然何かが飛び掛ってきた。僕は焦ってそれを払いのけると、羽ばたきながら洞窟を出て行った。

まもなく足音が聞こえてきた。座っていたリオルが立ち上がって入り口の方角をにらむ。間違いなく誰かがこちらに向かってくるようだ。

「コロモリ達が見つけたみたいだ、確認してみよう」

「やれやれ…どうせ現地のポケモンかなんだろ」

かすかに声が聞こえた。男達は洞窟に入ってきたようだった。

僕の心臓は早鐘のように鳴り出した。

「くそっ…まずい…まずいよ…」

洞窟は一本道で、薄暗いとはいえ隠れるようなところなど何処にもない。

僕達は次第に奥へ奥へと追い詰められていった。

「おい、誰がいるぞ！」

湖へと続く最後のカーブで、僕達はついに見つかってしまった。

「くそっ…これ以上先に行ったら…」

ギャラドスの咆哮が再び耳に甦って来た。しかしもうどうしようもない。

僕はついに洞窟の最深部へと足を踏み入れてしまった。湖面は、穏やかだった。

「なんだガキか…おい、どうせ逃げられないぞ。早くこっちへこい」
二人組みの男達はニヤニヤと笑いながら近付いてきた。

ちくしょう…何なんだこいつら…何が面白いんだ…

湖を背にし、僕は歯を食いしばった。

「リオル…やるしかない…リオル？」

後ろを振り返ると、リオルは水際にしゃがみこみ、なにやら必死に念じているようだった。

「リオル！何やって…え？」

突如、湖が激しく波打ち始めた。

僕は数週間前の事を思い出していた。

この波は…。

- 決死 -

「リオル、湖から離れろ！」

僕の呼びかけが聞こえないのか、リオルは水際から動かなかった。

「な、なんだ？」

明らかにおかしい湖の様子を見て、男達が動揺し始めた次の瞬間、水面から巨大な影が伸びた。

周囲を威圧する咆哮が洞窟内に響き渡る。

見間違いようも無い。数週間前に見た、ギャラドスだった。

「う、うわ……」

僕は後ずさった。後ろには男達がいたが、このままここにいたら本当に食べられてしまうかもしれない。前の時はみんながいたから何とかなかったけど、今回はそうはいかない。

ここで食べられてしまうぐらいなら、まだ男達に捕まる方がマシだと、リオルが突如僕の腕を掴み、水辺まで走りだした。

「リオル！何を……」

波打ち際にたどり着くと、リオルはギャラドスの目を見て何かを念じ続けているようだった。

ギャラドスの咆哮が響き渡り、男達がじりじりと距離をとる。

僕はその間に挟まれて完全に混乱していた。

「リオル、逃げよう。このままじゃ……」

リオルは僕を見た。リオルの目は不思議な輝きに満ちていた。その目を見ているうちに、僕は不思議と気持ちが落ち着いていることに気がついた。

「リオル……わかった。お前に任せるよ」

その言葉を聞くが早いか、リオルは僕の腕を掴んだまま水面に向かって飛び込んだ。

「……」

さすがに驚いたが、恐怖はなかった。

水上に出ていたギャラドスの顔が再び湖の中に戻り、僕達に向かって迫ってくるのがぼんやりと見える。

あー…これからどうなるんだろう。町のみんなは大丈夫だろうか。そんな場合ではないはずなのに、みんなの事が頭に浮かんた。これは走馬灯というやつだろうか？そういうえばシロナさんのガブリアスを初めて見たときも似たような感覚だったなあ。

ギャラドスの長い胴体が僕達に巻きつき始めたところで、僕は気を失った。

「おい、あいつら飛び込んだぞ！」

「追い詰められて錯乱したんだろ。あんなとこに飛び込んだじゃ生きちゃいないだろ…！しかしまさかギャラドスが出てくるとは思わなかったな。焦った焦った」

男達二人が湖を出ようとしたところ、後ろから来た誰かと鉢合わせた。

「すごい鳴き声が聞こえたけど、君達何をやってるの？」

「あ…」

「はい、子供が一人ここに逃げ込んだんですが、観念したのか湖に飛び込みまして…この湖はギャラドスの棲み処みたいなので、恐らく生きてはいないと思います」

後から来た男は、まだ少年だった。年齢的には恐らくスズたちとそれほど変わらないだろうか。少年は少しの間考えていたようだったが、

「…君達はその子供の死体を捜して。万が一にもこの町の事が外に漏れては困るからね。君達の言うとおり恐らく生きてはいないと思うけど…一応急ぎの任務ということで取り掛かってくれるかい？」

「は、はい…」

男達が洞窟を出て行った後も、少年はいまだ激しく波打っている水

面と洞窟内を観察していた。

ギャラドスが棲んでいるにしては、周囲に被害がなさすぎる…。少年は一抹の不安を感じたが、やがて洞窟を後にした。

- 決死 - (後書き)

これにて第一章終了。次話から第二章です。
読んでくださってる方、本当にありがとうございます。

- 目覚めると -

ぞあ…ぞあ…

寄せては返す波の音が近い。

僕はゆっくりと目を開けた。

僕を覗き込む青い顔と、見知らぬ天井が目に入ってきた。

「り…おる…」

僕が上半身を起こすと、リオルが首つ玉に抱きついてきた。

「ここは…」

僕はリオルの頭を撫でながら周りを見渡す。

どうやらどこかの家のベッドのようだった。

あれ…僕は…どうしたんだっけ？

捕まってしまったのだろうか…

いや…いや…湖に飛び込んで、ギャラドスに…

ここはどこだ？

僕はゆっくりと身を起こした。

体に不自由なところはない。特に怪我はしていないようだった。

「リオルは…大丈夫か？」

リオルは笑顔で頷いた。

ここはどこだろう？ルネシティにこんな家あっただろうか…

僕はベッドから立ち上がり、警戒しながらドアを開けた。

「うわっ」

ドアを開けたところに、中年の男性が立っていた。

「あ、ああ…びっくりした。君、目が覚めたのかい、大丈夫？」

見たことの無い人だったが、あの男達の仲間ではないようだった。

あの男達は、みな一様に同じ服を着ていた。

「あ…はい。あの…」

「大丈夫？怪我とかない？」

「はい、大丈夫そうです。あの、ここは…」

「ああ、うん。君は浜辺で…」

中年の男は何か言いかけたが

「ここで立ち話するのもなんだから、下に行こうか。何か飲み物を淹れてあげる」

ここは二階のようだった。僕は、助けてもらったと思しきおじさんについて、部屋を出た。

階段の踊り場に窓があり、僕は何の気なしに窓の外を見た。そして驚いた。

そこには水平線が広がっていたのである。

ルネシティでは水平線は見えない。町の入り口は湖の底だし、町は掘り鉢上の山に囲まれていたからだ。

階下に下りていくと、開け放しになっていた玄関から、広がる砂浜が見えた。

「え…え？」

僕は混乱しながら、おじさんの勧めてくれた椅子に座った。

「君達は浜辺で倒れていたんだよ」

僕は無言だった。何を言っているのかわからない。

「今朝私が散歩しているときに見つけたんだけど、びっくりしたよ！。水死体かと思った」

おじさんは笑った。

浜辺…まさか…

「すみません、おじさん…」

「ん、なんだい？」

僕はおじさんの笑いをさえぎるように言った。

「あの、ここはどこですか？」

「ん、ここ？ここは私が経営してる旅館で、」

「すみません」

そうじゃなくて

「この町の、名前は、何ですか？」

「ああ、町の名前か。変な事聞くね。ここはね」

僕の心臓は高鳴った。

「ミナモシティだよ」

- ・ 目覚めると
- ・ (後書き)

二章スタートです。

- 青空と水平線 -

テレビのニュースでは、忍び込んだ泥棒をポケモンがやつつけたなんていうニュースをやっていた。

「いいねえ…いや、泥棒自体は全然よくないけどさ。ウチもボディ―ガードにポケモン育てようかなあ。たまに変なお客さん来るんだよね…あ、そういえば君のそれポケモンでしょ？あんまり見たこと無いけど、名前なんていうの？」

おじさんは話し好きらしく、喋り続けていたが僕は上の空だった。ミナモシティ。おじさんはミナモシティと言った。

僕はいつのまにか、ルネシティの外に出ていたのだ。

「すいません、あの…」

「あ、私モナミっていうんだよ。ミナモシティのモナミ。ふふつ。それで、どうしたの？」

「すいません、ご挨拶遅れました。僕はスズといいます。…あの、ちょっと外の空気を吸いたいんですけど…」

モナミさんの話があまり頭に入ってこなかった。外に出てみたい。

「ああ、どうぞ。今日は良い天気だよー」

僕は外に出て見た。

民宿は海に面しており、視界が開けていて水平線が見渡せる。

モナミさんの言うとおり、いい天気だ。

町を囲う山など何処にも見当たらなかった。

ここは外の世界…。

僕とリオルはしばらくの間突っ立って海を眺めていた。

「スズ君、どうしたの？そんなに海が珍しいの？」

僕はハッと我に返った。

「す、すいません、なんでもないです」僕は民宿に戻った。

「もう元気そうだね。よかったよかった。ところで君、どこから来たの？」

「僕は…ルネシティから…」

自分で言いかけて、今更ながら疑問が浮かんだ。

僕はどうやってここまでたどり着いたのだろうか。

泳いでたどり着ける距離ではないし、それはリオルも同じだろう。

それになにより、僕達はギャラドスに襲われたはずだった。あのまま生き残れるとは思えない。

「あ、それでね、倒れてた君の隣でコイキングがはねてたよ。これ君のポケモンでしょ？捕まえといたから」

そう言つて、おじさんはモンスターボールを差し出した。

「…コイキング？いえ、これは僕のポケモンでは…」

コイキングはルネシティで釣りをしていた時でさえ釣り上げた事はなかった。

「あ、そうなの？でも僕もコイキングはいらないからなあ…スズ君にあげるよ」

「そ、そうですか…ありがとうございます」

「ていうか、ルネシティから来たの！めずらしいなあ。僕結構長く民宿やってるけど、あそこに住んでる人ひとりしか知らないんだよねえ。ここ数年みかけないんだけど、元気にしてるのかなあ。その人いつもギャラドスに乗つてここまできてたんだよ」

「いえ、そもそも町の外に出る人が少ないですから。……ギャラドス？」

「うん、そう。珍しいよね。まあ、ちょっと昔の話だからね。ところでスズ君、その様子だと初めてこの町に来たんでしょ？少し外歩いてくれば。デパートなんかはこの町にしかないから、行ってみると面白いかもよ」

「は、はい、ありがとうございます」

「満足したら戻つておいでー。今はお客さんいないから、特別に夕御飯ご馳走してあげるよ」

僕はお礼を言つて民宿を出た。

- 青空と水平線 -
(後書き)

コイキングゲットW

- デパート -

ミナモシティに来るのはもちろん初めてだった。

僕とリオルは海風を受けながら歩く。なんだかルネシティとは空気そのものが違うような気がする。

これが外の世界…僕の心臓は高鳴っていた。

ところで外に出てすぐ気付いたのだが、考えてみればデパートと言われてもどこにあるのかさっぱり分らない。

果たして右も左も分らないこの町でたどり着けるのだろうか。一旦戻ってモナミさんに聞いたほうがいいだろうかなどと不安に思っていたのだが、杞憂に終わった。

デパートは町のどこにいても見えるような大きな建造物で、小高い丘の上に建っていた。迷う余地など全くなかったと言っている。僕達はすぐにデパートにたどり着く事ができた。

「うわ………大きい建物………」

リオルも空を仰ぐようにしてデパートを見上げている。

遠めに見ても大きな建造物だったが、近くで見るとまた格別だった。僕達は石段を登り、入り口と思われるドアから中に入った。

なんというか、近代的な建物だった。僕はキョロキョロしていた。

「リオル…すごいね…」

「…」

ガヤガヤと、群集が発する特有の音がデパート内に満ちている。

どうやら一階はエントランスになっているようだった。僕達は階段へ向かった。

二階から順番に回る。僕達は最初は何だか気後れしてしまい、大人しく回っていたのだが、次第に面白さが勝ったようだ。リオルも僕の手を引いてあちこち回っていた。

デパートは、ルネシティの小さなショップでは考えられないほど多くのモノで溢れていた。

ルネシティにも売っていたような傷薬などから、ポケモンの縫いぐるみや写真。技を覚えさせるための技マシンなどというものも販売していた。もっとも僕は着の身着のままルネシティを飛び出してきたと言っている状態だったので、何かを購入するほどの余裕なんてないんだけど。

一通り見て回ったあとで、僕たちは屋上のベンチで一休みすることにした。リオルもはしゃぎすぎたのか、少し疲れた様子だった。

僕は屋上にあった自動販売機でサイソーダを買い、リオルと半分こした。炭酸の爽快な喉越しが広がる。

デパートにはたくさんの人達がいて、皆楽しそうだった。

買い物というのは、基本的には未来へと向かう行為だ。よりよい未来へたどり着くため、対価を払って欲しい物を得る。この場所には人々のそんな前向きなエネルギーが集まっているのかもしれない。しかし、僕はとてもそんな気分にはなれなかった。

デパートの屋上からは広く海が見渡せた。いつの間にか雲行きが怪しくなってきたいて、今にも雨が降り出しそうだった。

今頃ルネシティはどうなっているのだろうか。僕は海の彼方に目を凝らしてみたが、ここからルネシティを確認することはどんなにがんばっても不可能だった。

- デパート - (後書き)

そういえば、攻略本の袋とじをあけてみました。ミズゴロウさんで
した。

し
め
り
け

- 灰色の追っ手 -

サイコソーダを飲み終わると、僕とリオルはデパートを出た。

デパートはとても楽しかったが今後のために有用な情報が見つかりそうには無かった。それに、思わずはしゃいでしまったが観光などしている場合では少しもなかった。

空はどんよりと曇っていた。

日が落ちかけてきたせいもあるだろうが、今にも雨が降ってきそうだった。

外の世界で右も左も分からない僕は、ひとまず世話をしてくれた民宿に帰ろうと思った。モナミさんは夕御飯をごちそうしてくれると言っていたし、もし部屋が空いていたら一晩だけでも借りれないだろうかなどと多少都合のいい事を考えながら。

旅館に戻ると、モナミさんはフロントにいないようだった。

夕食を作ってくれているのだろうか、どこからともなくいい匂いが漂っている。

とたんに僕は激しい空腹を感じた。

思えばルネシティを出たあの日から何も口にしていない。当然といえば当然だ。

ひとまず僕は先ほどまで寝かせてもらっていた部屋に戻ろうと思った。

階段を登り、部屋のドアを開ける。

と、異様な光景が飛び込んできた。

部屋の椅子にモナミさんが縛りつけられていたのである。こめかみから一筋、血が流れている。

ぐったりとしていて、動く様子がない。

「……!?ど、どうしたんですか!」

無用心に駆け寄る僕の後ろで、部屋の扉が閉まった。

「やっぱりここにいたか。おっさん、こいつの知り合いかなんか？」
突然後ろで声がして、僕は驚いて振り返った。

ドアの前に灰色の服を着た男が立っていた。

夕飯の事で一杯になっていた僕の脳内が、再び現実に取り戻される。
「まさか生きてるとはな…どうやってギャラドスから逃げのびたんだ？…まあそんなことはいいや。お前が生きてることと、こうして見つけれられたって事実だけあれば充分だ。おい、どうすべきかわかるな？さっさと俺と来い」

男は一人で喋り続けていたが、僕はすっかり動転していた。

追っ手…色々なことが急に起りすぎて考えも及ばなかったが、考えてみれば至極当然の事と思われた。

男達にとって、ルネシティでのことが外に漏れるのは非常に都合が悪いのだろう。

モナミさんは気を失っているのか、相変わらず動く様子が無い。

「それにしてもあのおっさんもいい根性だな。昨日今日初めて会ったガキ匿ってやがったのか。………何かコイツから聞いたと考える方が自然か？…おいガキ、ちょっと待ってる。逃げたらルネの人間一人ぶつ殺すぞ」

ぶつ殺す。

突然飛び出した非日常的単語に僕は仰天した。単語自体は日常的に使われているが、それが意味を伴うとなると話は別次元だった。

「ちょ、何言って…それに、モナミさんに何する気…この人はただ海辺で倒れてた僕を助けてくれただけで、僕は別に何も話して」

「あー、いい。しゃべらないでいい。どの道お前の言葉を信頼する理由なんかないから。あのおっさんにしたってそうだ。可能性があるなら俺はそれを潰すのが仕事だ」

- はじめての -

なんだこれは。まさかこんな事になってしまうなんて、考えもしなかった。

でも、だけど。

モナミさんを殺させるわけにはいかなかった。

「ま、待て！」

僕は精一杯大きな声を出し虚勢を張ったが、男には僕の弱気が見透かされているようだった。

「…なれないことはやめとけ。わざわざ痛い思いする事はないよ。昨日今日会っただけの民宿のジジイを見捨てるだけでいいんだよ。お前に何の関係も無いだろうが。それともそのちっこい青い奴で俺と勝負する気か？」

「う、うるさい！早く表へ出る！…」

男は面倒くさそうにため息をついた。

「まあ俺は別に構わん。それより、俺がポケモン出すの待っててくれるのか？」

「…だって、そういうルールじゃないか」

「おまえなあ、ルール守って大事なものの守れなかったらどうしようもないだろうが。まあ、こんなこと俺が言う事じゃないけどな。…ダストダス！」

見たことも無いポケモンが出現するとともに、ものすごい悪臭が鼻をついた。無数のゴミのようなものがいたるところに付着している。ダストダスと呼ばれたポケモンが僕とリオルを無造作に掴むと、窓に向かって放り投げた。

「う、うわ…！」

窓ガラスが割れ、僕たちは外へと放り出された。

リオルが空中で身を翻し、僕のクッションになってくれた。

「ご、ごめんリオル…」

灰色達も後を追うように窓から飛び出してくる。ダストダスが着地すると、砂浜の砂が舞い上がった。

「あんな狭い部屋で戦って、巻き込まれるのはごめんだからな。じやあ、やりますか」

僕は唇をかみ締めた。

「リオル、発勁！」

僕に様子を見ている余裕はなかった。知識と経験で圧倒的に劣る僕には、初めて見るポケモン相手に取るべき手段といったら先制攻撃ぐらいのものだ。

リオルの拳が淡い光を帯び、両手で掌打のようにしてダストダスの顔面に打ち込む。

もろに受けたダストダスだったが、2、3歩後退しただけでほとんど効いていない様子だった。ダストダスを纏っていたゴミがいくつか周囲に散乱し、さらに臭いを撒き散らす。

ダストダスはそのまま宙に浮いていたリオルを掴み、砂浜に叩きつけた。

「！」

リオルの顔が苦痛に歪んだ。

「リオル！」

ダストダスは攻撃の手を緩めなかった。リオルを再び掴み上げ、その指先からなにやら液体のようなものを噴射した。

「ダストダス、返してやれ」

男が不敵に指示すると、ダストダスはリオルを無造作に放り投げた。今度は僕がリオルのクッションになった。衝撃で砂浜に倒れる。

「リオル…大丈夫か？」

リオルは肩で荒い息をついていた。きれいな青色だった毛並みは首から顔面にかけて紫色に染まっている。リオルの苦しみ方が尋常ではない事に気づいた。

「ダストダスの毒をもろにくらったんだ。早くしないと危ないぜ」
男の声が聞こえる。腕の中で苦しそうに息をするリオルの姿からも、

それは容易に想像できた。

「お前もう詰んでるよ。自分のポケモンにそんな辛い思いさせていいのか？さっさと諦めろよ」

悪いようにはしないから、と、男は諭すように言った。

しかし男が僕の言葉を信用しないように、僕も男の言葉を全く信用していなかった。

だけど、僕には打つ手がない事も事実だった。頼りのリオルは消耗してしまっているし、コイキングを出したところでどうにかなる相手でもない。

「…ちくしょう…ちくしょう！」

僕は男に向かって突進したが、あっけなくダストダスに捕まってしまった。ものすごい悪臭が鼻を突く。それだけで気が遠くなりそうだった。

「本当にめんどくさいなあ…お前もくらってみるか？きつと毒で死ぬのは苦しいぞ」

男は心底どうでもよさそうに言い、ダストダスは右手を僕の顔面に向けて照準を合わせた。

”…ろ…”

何かが頭の中で聞こえた気がした。

”やめろ！”

今度ははっきりと聞こえた。この声は…？

僕は精一杯首を傾けて後ろを振り返った。

リオルが光に包まれている。

・ はじめての ・ (後書き)

20000PVを超えました。ありがとうございます。

- ハガネ -

ぼたり ぼたり

水滴が肌をぬらしたかと思うと、突然バケツをひっくり返したような雨が降り始めた。

猛毒で紫色に染まったりオルの毛並みが、美しい青色を取り戻していく。

光に包まれたリオルは先ほどのダメージが嘘のように立ち上がった。

体つきそのものが大きくなり、力強さに満ち溢れているように見えた。

「進化だと…っ」

男が舌打ちするのが聞こえる。

「ダストダス！」

僕はリオルのほうに放り投げられた。

今度はリオルが僕を受け止めてくれた。

「リオル…？えと…」

”ルカリオ”

「えっ？」

頭の中に声が聞こえる。

”僕はルカリオ。スズ、僕は進化した。君のおかげだよ。ありがとう”

切れ切れで多少分かりにくいが、頭の中に聞こえる声はリオル…いや、ルカリオの声で間違いないようだった。

”スズといっぱい話したいけど、とりあえずこの場をなんとかしよう”

言うが早いか、ルカリオはダストダスめがけて走り出した。

「ダストダス、ヘドロ爆弾！」

重量感たつぷりなヘドロの塊がルカリオめがけて発射された。ルカリオは無造作にそれを払いのける。

「！こいつ、鋼か！」

ルカリオはダストダスの懷に飛び込むと、連続して拳を叩き込んだ。数発叩き込んだ時点で、ダストダスは膝をついた。

「ダストダス！…地面技か…くそっ」

男は吐き捨てるように言うと、ポケモンを戻した。

「毒に鋼じゃ分が悪すぎるな…ガキ、お前の勝ちだよ」

突然の事に何が起ったのかいまひとつ掴めていない僕だったが、男がポケモンを戻したのを見て、へたへたとその場に座り込んでしまった。

”スズ、どうする？”

「…え？どうするって…？」

”あの男”

「おいガキ、今回は引いてやる。だがお前に制約を課す。ルネシテイのことを誰にも喋らないことだ。もつとも、喋ったらどうなるかわかるよな？あのおっさんの姿を見ただろう？」

ぶっ殺す。

灰色が使った言葉が頭の中で反芻された。

「…」

「…何を偉そうに…。ぼ、僕がお前をここで捕まえておけば、そんな制約課される事もないだろう」

「どうかな。お前、もう少し自分のポケモンのこと労わってやった方がいいんじゃないか？」

どさっ

背後で砂浜に重い何かが落ちるような音がした。

驚いて振り返ると、リオル…いや、ルカリオが倒れている。

「…！」

「さっさと治療してやった方がいいんじゃないか？進化したからってダメージが消えるわけじゃない。それに、民宿のおっさんも今頃どうしてるだろうなあ」

男が余裕たっぷりに言った。

僕は歯を噛み締めて灰色を睨んだ。

「ルネの事を知った奴は処分しなければならない。俺達が地の果てまで追いかけてやるから、そう思え」

灰色の声を背中に受けながら、僕は倒れてしまったルカリオを抱えて急いで民宿へ引き返した。

「周囲の人間の事を思うなら、さっさとルネへ戻ってくる事だな」

- ハガネ - (後書き)

インフルくらっ たんでちょっと更新おくれますorz

倒れてしまったりオルを担ぎ、僕は一目散に民宿に戻った。

リオルをベッドに寝かせ、モナミさんを解放する。モナミさんは意識を取り戻していた。

僕は何度も何度も謝ったが、モナミさんは気にしていないようだった。

「あー痛かった…いや、スズ君が悪いんじゃないよ…君を助けたのだって、僕が勝手にやった事だし…ああもう面倒くさいなあ、そんなに頭下げると怒るよ！」

とりあえずシャワーでも浴びてきなよ、とモナミさんは言ってくれた。

食事同様、灰色がルネシティに侵攻してきて以来風呂にも入っていなかった。

僕はモナミさんの言葉に甘え、シャワーを借りる事にした。

民宿だけあって、浴場はそれなりの広さだった。僕の家部屋を全部足したよりも、まだ広いだろう。

こんな広い風呂場など見たことがなかったが、とてもはしゃぐ気にはなれない。

僕は蛇口を捻ると、頭から流水を浴びた。

次第に温まっていく水が、浜辺の砂と共に疲れも流してくれているような気がする。

これからどうしよう…ルネシティに戻るわけにはいかない。かといって、モナミさんのような無関係の人を巻き込むわけにもいかない…僕はしばらくそのままの姿勢でシャワーを浴び続けた。

「それにしても、あいつなんなの？酷い事するよ本当に…スズ君の

知り合いじゃないんでしょ？」

シャワーから戻った僕に、モナミさんは暖かい飲み物を淹れてくれた。

「……」

知り合いなんてとんでもなかった。

しかし僕はモナミさんに打ち明ける事をためらった。灰色が言っていた事が頭をよぎる。少しでも関わった可能性があるというだけで殺そうとする連中なのだ。すでに巻き込んでしまったとはいえ、これ以上モナミさんを引きずり込むのは憚られた。

「……いや、いいんだよ。言いたくなかったら無理には聞かないけどね。ところでもしかして君、タイガさんって知らない？」

「え……？」

意外な名前が出て、僕は耳を疑った。

「タイガは僕の……父ですけど」

「やつぱり！どことなく似てると思ってたんだよ。いや、どこかで見たことあるなあと思ってたんだけど、そうか、やつぱりタイガさんの息子さんかぁー！」

おじさんは一人でうんうんと嬉しそうに頷いていた。

「タイガさん向こうとこつち行き来してたでしょ？昔よくウチに泊まりに来てくれてたんだよー。ここ数年見なくなっちゃったなあ。もう引退しちゃったの？そんな歳でもないでしょ？」

「いえ、父はその……」

死にました、と、僕は短く伝えた。

「ええっ！嘘でしょ、あのタイガさんが……」

「すごい腕のいいダイビング使いだったんだけどなあ……タイガさんとギャラドスはこら辺では結構有名だったんだよ？」

「……ギャラドス？父はギャラドスに乗っていたんですか？」

「そうだよ、知らなかったの？」

そのとき、がさごそと背後のベッドで衣擦れの音がした。

- 名を -

「リオル…じゃなくて…ルカリオ？」

「うん、スズ。僕はルカリオ」

リオル、いやルカリオはベッドから上半身だけ起こして言った。

なんだかここ数日の間の出来事は濃密すぎる。僕はそろそろ肉体的にも精神的にも疲労のピークに達していた。

「進化…？」

「うん、進化」

リオルの体は一回り、いや二回りも大きくなり、雄々しさを増したような印象を受ける。

「そ、そうなの…ところで…その…普通に喋ってるんだけど…いや、喋ってるというか…」

そうなのだ。会話している訳ではないのだけど、頭の中に直接声が聞こえるような感覚がある。

浜辺で初めて聞こえたときは途切れ途切れな感覚だったが、今はスラスラと聞こえていた。

「僕が進化できたのはスズのおかげなんだよ。僕たちは相手の心とか、感情とか、気質とか、そういったものを読み取る事ができるんだ。本当に深く読み取るには相手の事を本当に理解しないとイケないんだけどね。この力は波動って呼ばれてるんだけど。スズの気持ちがたくさん入ってきたから、僕は進化の力を得る事ができたんだよ」

「リオル…いや、ルカリオか。ずっとリオルって呼んでたから、なんかルカリオっていうの慣れないや」

「今までどおりリオルのままでもいいよ」

「でも、考えてみればリオルっていうのは種族の名前だよね……今更だけど、名前をつけないと」

「名前？」

「うん。リオルは僕の事、”人間”じゃなくて”スズ”って呼んでるでしょ？そういうもの」

”……………うん、つけて！僕に名前を！”

言っでは見たものの、名前を考えると言うのは難しいものだ。確かシロナさんはミロカロスのことをみーちゃんと呼んでいた。シズクはマリルのことをマリちゃんと呼んでいた。ノリのメノクラゲは…特に名前付けてなかったんだっけか。うーん、なんだかみんな結構適当なような。

「うーん…リオル…リオル……」

名前を決めるといっのは中々難しい。和名、洋名…うーん。

「リオル…ルカリオル…る……………む、ルークなんてどうだろう」

”るーく？”

「うん。ルカリオの頭文字をとって、ルーク。気に入らなかったらもつと考えるけど…」

自分で言うのもなんだけど、ルカリオの頭文字を残しつつ、ルカリオのかっこいい外見にマッチしているような気がする。

”ううん…”

ルカリオは大きく首を振った。

”とっても気に入った！ありがとうスズ！”

ルカリオ、いや、ルークはにっこりと笑った。

- 名を - (後書き)

今更ながら名前が決まりました。

- 今後のこと - (前書き)

ポケモンに名前がついたので、キャラ紹介を。

ルカリオ↓ルーク

- 今後のこと -

「…君達さつきから見つめあっちゃってどうしたの？」

モナミさんが不思議そうに声をかけてきた。

僕はハッとした。そうか、僕達の会話は僕とルーク以外の人には聞こえないのか。

「い、いえ、何でもないです。」

「君のポケモン大丈夫みたいだね、よかったよかった。ところで、君達これからどうするの？」

問われて、僕は返答に困ってしまった。ルネシティから外の世界にいきなり放り出され、正直こっちが聞きたいぐらいだった。とにかく灰色に見つかってしまった以上、ミナモシティからは早く出て行かなければならないだろう。

「モナミさん…こんな事言われても困るとは思いますが……しばらくミナモシティを離れた方がいいと思います……」

「…詮索はしないけど、さっきの男が普通の奴じゃないってことぐらひは私にもわかるよ。うーん、そうか……まだ今のシーズンだったら民宿閉めてもそれほど痛手にはならないかなあ……わかった、しばらくどこかに身を隠すよ。スズ君はどうするの？」

僕は…。

「僕は…すぐにこの町を出て行きます」

「町を出て、それから？」

それから。僕は黙り込んでしまった。

「…私には状況がよくわからないけど…」

モナミさんは前置きして言った。

「もしどこにも頼る当てが無かったら、ジムリーダーの人を訪ねてみるのはどうだろう？この地方を代表するポケモントレーナーの人たちなら、何か力になってくれるかもしれないよ」

ジムリーダー…今まで考えすらしなかったが、確かに一つの手段だ

と思った。ジムリーダーの人たちだったらミクリさんの事も知っているだろうし、話を聞いてもらいやすいかもしれない。それにあの時は戦うことも出来ずに捕まってしまったとはいえ、ミクリさんの方を並べるジムリーダー達が実力的に灰色達に遅れを取るようなことがあるとは思えなかった。都合のいい考えだが、ルネシティを取り戻すのには協力してくれるかもしれない。

「モナミさん…ありがとうございます。僕、ジムリーダーの人たちと会って見ます！」

「そう？何か参考になったならよかった。じゃあどうする？今夜はとりあえず休んで、明日の朝早く出発しようか」

「い、いえ、これ以上迷惑かけるわけには…」

「今更だよ。それに、外はすごい雨だよ？今日はここで休んでいきなよ。ウチはなんたって民宿なんだからさ」

僕はまたもや言葉に詰まってしまった。故郷があんな事になり、右も左もわからない世界の中で、モナミさんの暖かい言葉が本当に嬉しかったのだ。

「…ありがとうございます…ほんとうにありがとうございます…」

- ごちそう - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ(ルーク)
コイキング(未定)

モナミさんの作ってくれた夕食は、本当においしかった。

「急ごしらえだから、大したもの作れないよー」なんて本人は言っていたけど、この料理が大したものじゃないなんてとても思えない。僕もルークも無言になり、ひたすら食事を口に運んだ。

「すごい食欲だねえ…」

モナミさんは少々驚いていたようだ。

それもそのはずだ。料理がおいしいという事ももちろんだが、ルネを出てから初めて食べるまともな食事である。僕達はあつという間に食事をたいらげてしまった。

「ご馳走様でした…めっちゃくちゃおいしかったです！」

「そ、そう？これでも料理には多少自信あるんだよねえ。今度ちゃんとした料理作ってあげるから、楽しみにしててよ！…ああ、君達疲れてるだろうから、先に寝ちゃってて。私は片付けてから寝るから」

正直なところ、僕もルークも披露困憊だった。短期間に色々な事がありすぎた。

モナミさんの言葉に甘えることにして、僕とルークは寝室へ向かった。

ザアザア…

外は大雨のようだ。僕は暗闇の中、布団でその雨音を聞くとともにしに聞いていた。

”スズ”

ルークだ。

「ん？」

”モナミさんの料理、すごくおいしかったね。スズのお母さんの料理もおいしかったけど、また違ったおいしさだね”

「そう？母さんの料理より全然おいしかったよ」

僕は苦笑した。

母さん。ルネシティのみんな。今ごろどうしているのだろうか。心配しているだろうな…

”モナミさん…すごくいい人だよ。あの人の近くにいと、すごく暖かい気持ちの流れてくるんだ。僕達の事本当に心配してくれてる”
「うん…本当に嬉しかった。」

もし世の中あんな人ばかりだったなら…僕はそんな事を思った。それにしても、灰色達の目的は一体何なのだろうか。どれだけ考えてみても、ルネシティを占領するメリットなんて思い浮かばなかった。それとも目的はルネシティそのものではなく、単にルネシティの閉鎖的な環境が重要だったのだろうか。

どれだけ考えても答えは出るはずも無かった。僕達にはあまりに情報が少なすぎる。

わかっていていること、推測できる事は

- 男達は一様に灰色の服を着ている

- 恐らく別の地方から来ている

この程度である。そして恐らく。

- 目的のためには手段を選ばない事。

人殺しをこつとも簡単に行なおうとする人間がいる事を、僕は身をもつて知った。

ぶつ殺す。灰色の言葉を思い出し、僕は身震いした。

”スズ、大丈夫だよ。僕がついてる。それに、コイキングも”

「…ははっ、そうだね！なんだか大変な事になっちゃったけど、これからもよろしくね！ああ、そうだ。コイキングにも名前をつけてあげないと…でも…」

僕はあくびをした。

それはまた明日。とにかく、僕は眠気のピークを迎えていた。

「明日の朝一番で出発しよう…おやすみ、ルーク」

”おやすみ、スズ”

雨音は一層激しくなっていたが、僕はいつの間にか眠りに落ちていった。

- 出発 - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ(ルーク)
コイキング(未定)

- 出発 -

「……………くん…スズくん！」

誰かが僕を揺さぶっている。僕は寝ぼけながら目を開けた。見上げる天井が自分の部屋と違うのには相変わらず違和感を感じた。

僕を揺さぶっていたのはモナミさんだった。

昨日の出来事が脳裏をよぎる。

「……………あ！」

僕は飛び起きた。

隣を見ると、ルークもすでに起床していた。

「スズくん、君のポケモンも準備できてるみたいだよ。早く支度しないと…」

「は、はい、すみません！」

僕は慌ててベッドから起き上がった。

”スズ、荷物はまとめてあるからすぐに出発できるよ”

「あ、ありがとう…」

”スズはこんな時でも絶対寝坊すると思ったから。なんだか頼もしいや”

ルークがクスクスと笑う。

「からかわないですよ…」

僕はモナミさんから借りていた寝巻きを大急ぎで脱ぎ、自分の服に着替えた。

「朝ごはん用意してあるから、ちやちやっと済ましちやおうよ」

「す、すみません…」

モナミさんはすでに朝食の支度まで済ませてくれていたようだ。それに引き換え自分ときたら…。

僕はなんだか情けなくなりつつ大急ぎで支度をして、階下へ降りていった。まだ外は薄暗いようだ。どうやら雨は止んでいるみたいだ。静かな早朝だった。

それほど寝坊したわけではないようだが、二人に比べたら寝坊には
違いない。

僕は太急ぎでテーブルについた。

「ここからだが一番近いのはヒワマキシティのジムだよ。スズ君は
ヒワマキに行くの初めて？」

モナミさんがサンドイッチをほおばりながら言った。

「はい。というか、ルネシティから出るの自体初めての事なので…」
まさかこんな形で外の世界を見る事になるとは思わなかった。

「そうかい。私もそんなに頻繁に行くわけじゃないけど、あそこは
何というかちよつと変わった町だよ。まあ行ってみればすぐわかる
と思うけどね」

ルネシティも中々変わった町だったと思うけど、僕は頷いた。ヒワ
マキシティ…どんな町なのだろうか。

まだ見ぬ町を漠然と想像しながら、僕も朝食を平らげた。

「じゃあ、行こうか」

モナミさんがドアを開けた。

「はい。…え？」

「私もヒワマキに行きたいから、どうせなら一緒に行こうよ」
「…！」

正直、助かった。ルネシティから一步も外に出た事がなかった僕は、
あまりに物事を知らなさ過ぎる。

僕は心の中でモナミさんに感謝しながら外に出た。

水平線から太陽が登ってきた。日の出の瞬間を見るのも初めてだっ
た。ルネシティを出てから数日しか経っていないのに、僕の見る世
界は様々な初めてで満ちていた。

「まずは121番道路だね。それから120番道路に抜けて、ヒワ
マキシティ。私も随分前に行ったきりだからあんまり道覚えてない
んだけど、たぶん大丈夫でしょ。よし、じゃあ出発！」

行ってきます。

僕は海の向こうにあるルネシティに向かって、心の中で呟いた。

- 出発 - (後書き)

30'000アクセスこえました。ありがとうございますm
m (――)

ウォッシュロトム流行りすぎじゃないですか…

- こなゆき - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ(ルーク)
コイキング(未定)

ルネシティに住んでいた身としては、町と町を移動するというのが
そもそも不思議な感覚だった。

ルネにいた頃は、道路は町と町ではなく家と家を結ぶものだった。
僕は今広い世界の中にいるんだなあと、改めて実感した。

昨夜の大雨は嘘のように止み、昇る太陽が世界を力強く照らし始め
る。

僕は海風を受けながら、121番道路を120番道路へ抜けた。
120番道路は僕が今まで僕が見た事がないような道路だった。
昨日の大雨でいたるところに水溜りが出来ていて、青空と流れる雲
を映し出している。

それは普通なのだが、異常に成長した背の高い植物がつつそうと茂
っていた。

「…すごいや。外の世界の植物ってこんなに成長するんだ…」

「いやいや、ここの道路は特別みたいだよ。この辺りは特別雨が多
いからか、植物が他の地域より大きく育っちゃうんだって。ふふ、
ヒワマキに行けばもっとすごいものが見られると思うよ」

モナミさんはなにやら含みを持たせた。

「こ、これよりすごいんですか？なんだかこわいなあ…」

”木の幹をくりぬいて住んでるとかね”

ルークが冗談ぽく言った。

「まさか…いくらなんでもそんな町さすがにないでしょ」

ルネシティみたいな町も他にあまり無いだろうが、僕は自分の故郷
を棚に上げて笑った。

「じゃあ、ちよつと草むらの中を通ろうか。はぐれないようについ
て来てねー」

言うが早いか、モナミさんは小さなジャングルに突入していった。

あつという間に姿が隠される。

僕も慌てて後を追った。

それにしても、岩肌だらけのルネシティとは大きな違いだ。いたるところに生命の気配が満ち溢れている。

僕とルークは草を掻き分けながら必死で歩いた。

草を掻き分ける作業に汗をかいていた時、ふいに冷氣がおそった。

「さむっ……………ゆ、雪！？なんでこんな季節に…！」

上を見上げた僕は驚いた。相変わらず空は晴れているのに、雪がちらついている。

” ゆき…？ ”

「ああ、ルークは雪初めてだね。雪っていうのはええと…気温が低いと、雨が凍って雪になるんだよ。こんなに暖かったら本来降るものじゃないはずなんだけど…」

” へえ…真っ白ですごくきれいだ ”

ルークは鼻頭に落ちた雪を手で擦りながら言った。

「うわ、なにこれ、雪じゃない！？」

前の方でモナミさんの声が上がる。

外の世界は本当に不思議なことだらけなのだなぁと改めて思ったが、モナミさんの反応を見る限りどうやらこれは外の世界でも普通の事ではないらしい。

僕の常識はここまで通用しないのかと思って一瞬不安になったが、少し安心した。

そうこうしているうちに、雪はすぐ止んでしまった。

「なんだっ たんだろっうねー、さっきの雪」

草むらを抜けたモナミさんが言った。

「さあ…見当もつかないです…」

「うーん…まあいいか。すぐ止んだしね。それよりほら、ヒワマキ

シティが見えてきたよ
」

- ヒワマキシティ - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ(ルーク)
コイキング(未定)

- ヒワマキシティ -

ルネシティに住んでいる僕が言えたものではないかもしれないけど、ヒワマキは不思議な町だった。

建物の木の上に建っている。それに、こんなに緑に囲まれた空間は初めてだった。なんだか町に活力が満ちているような気がする。

僕は上を見上げながらモナミさんについて歩いた。

「私はちよつと知り合いのところに行ってくるから、スズ君しばらく町を見て回ってくれば」

僕は頷いて、町を回り始めた。

ヒワマキのポケモンジムはどこだろう。モナミさんは見て回ってくればと言ってくれたが、ミナモシティでの事を考えるとあまりそうも言っていない。また灰色達が襲ってきては面倒な事になってしまうし、関係の無い人を巻き込んでしまうかもしれない。僕はジムを探して歩いた。

とりあえず手近にあった梯子に登って町を見下ろして見ると、この町の大きさがよくわかった。大きさというか、高さというか。家と家はつり橋のようなもので繋がっており、木々で隔てられている建物へはそれを渡らないとたどり着けないようだった。

”すごい高さだ。ね、スズ？”

「うん…」

実際に登ってみると、見た目以上に高く感じる。

慣れてしまえばどうってことないのかもしれないけど、この上で生活するというのはちよつと僕にはできそうにない。

”スズ、あの建物は他とちよつと違うよ”

ルークの指差す方向を見ると、確かに他とは少し違った建造物が建っていた。木の上に作られているほかの家とは違い、近代的な建物に見える。

「本当だ。とりあえず向かってみようか…ん？」

上から見下ろして見たところ、どうやら目的の建物まではつり橋を渡らないとたどり着けないようだ。

「これを渡るのか…」

”スズ早くー”

声のした方を見ると、ルークはすでにつり橋の中腹にいた。

「う、うん…すぐ行く…」

僕は下を見ないように意識し、おっかなびくり足を踏み出した。

”スズ遅いよ。もしかして高いところが怖いのか？”

こういうのを高所恐怖症というんだっけか。これまで高いところに登った事なんてなかったから気づかなかったけど、そうか、僕はどうやら高所恐怖症というやつらしい。そういえばシロナさんはルネシティまでガブリアスで飛んできたと言っていたけど、僕にはとても同じ事はできそうになかった。

目的の建物の前まで着くだけでなんだか消耗してしまったが、どうやらこれはジムで間違いなさそうだ。

ミクリさんのルネジムと、ほとんど同じ外観をしていた。

「ちゃんと話聞いてくれるかな…入ってみよう、ルーク」

僕達は緊張しながらヒワマキジムの門をくぐった。

ジムの中は独特な熱気に包まれていた。僕は入り口近くにいたトレーナーと思しき人に声をかけた。

「すみません、あの、ジムリーダーの方は…」

「おつ、君トレーナー？挑戦者なんて久しぶりだな」

「え？いえ、ジムリーダーの方に…」

僕は戸惑いながら言ったが、どうやら相手には届かなかったようだ。「いきなりジムリーダーと戦えると思ってるの？まずはこのジムのトレーナー全員倒してからだ！すでにポケモン出して、やる気満々って感じか…受けて立とう。華麗な鳥ポケモンの戦いを見せてやるぜっ！」

「いや、あの、ちよっ」

- お手伝い - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ(ルーク)
コイキング(未定)

- お手伝い -

数十分後、僕とルークはジムから離れたところにあったベンチに腰掛けていた。木漏れ日が優しく照らしてくれている。

”ごめん、スズ…”

落ち込んだ様子でルークが言った。

「気にする事ないって。何にも準備してなかったし、いきなり戦い挑まれたんだから…」

負けてしまった。

そもそも戦いに来たわけではないはずだったが、取り付く島も無かった。

しかし、これからどうすればいいのだろう。あの様子では再び顔を出しても同じ事だろう。

「ルカリオじゃないですか。珍しいポケモンを連れてきますね」

さてどうしたものかと考えこんでいると、ふいに声をかけられた。顔を上げると、女の人が立っていた。

この女性はルカリオを知っているようだ。

ホウエンではあまり知られていないポケモンだと思っていたが、知っている人もいるようだだった。

「はい、そうです。この地方ではあまり知っている人はいないと思っ
ていたんですけど、お詳しいですね」

「ポケモン好きなんですよ」

クスクスと女の人は笑った。

「ジムに挑戦ですか？ルカリオではタイプの的に中々厳しいと思いま
すが…」

その通りだった。ルークは鳥ポケモンに有効な技を覚えておらず、最初のトレーナーこそ倒せたもののすぐに息切れしてしまった。残

る僕の手持ちは、コイキングしかない。

「いえ、ジムリーダーの方にお話したい事があつたんですけど……どうやらトレーナーの人に勝たないとたどり着けないみたいで」

僕は苦笑いした。

「では、ジムに挑戦しに来たわけではないのですか」

女の人は少し考えていたようだったが、やがて言った。

「私これから用事があるのですが……もしよろしければ手伝っていただけませんか？ 一人では少々骨が折れそうなもので……もし無事に用事が済みましたら、ジムリーダーと話が出来るよう計らう事もできます。力を貸していただけませんか？」

突然の提案に驚いたが、途方に暮れていた僕達にとっては願っても無い話だった。

このままでいても埒が明かない。少し不安も感じたが、女性に協力することにした。

「僕達で力になれるかどうか分かりませんが、ぜひお手伝いさせてください。僕はスズといいます。こっちはルカリオのリーグ」

僕達はぺこりと頭を下げた。

「あらあら、ご丁寧に。助かります。それでは申し訳ないんですが、早速出かけましょうか。まず119番道路にある天気研究所に行きましょう。……あ、失礼しました」

女性はすたすたと歩き出したが、ふいに後ろを振り向いた。

「私はナギと申します。スズさん、よろしく願いしますね」

- お手伝い - (後書き)

* * w a r n i n g * *

作者はアニメ版をあまり見ていないので、アニメ版には準拠していない部分が多々あります。ので、アニメを見ている方は違和感を感じることがあるかと思います(すいません)。

- 天気研究所 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
コイキング(未定)

- 天気研究所 -

「雪？」

「ええ、雪です。最近このあたりで突発的な降雪が観測されているのです」

” ゆき…ねえスズ。それってこの前の…”

僕は頷いた。

「僕もヒワマキに来る途中、120番道路で雪を見ました。すぐに止んだんですけれども…」

前を歩いていたナギさんは、振り返っていった。

「まさにそれです。その原因を突き止めるのですよ。ヒワマキは自然とともに生きる町ですが、あの冷気は異常です。そもそもこの地方の気候は温暖で、冬でもあまり雪なんて降りませんからね…一部冷気でやられてしまった植物もあるようです」

ナギさんは深刻な顔で言った。

「ナギさん、天気研究所というのは…」

「その名の通り、天気について研究している施設です。この施設から調査のお話を頂いたのですよ」

119番道路をしばらく川に沿って進むと、小さな橋が見えてきた。その橋を渡った先に研究所はあった。

僕達は研究所の門をくぐった。

「こんにちは」

僕はナギさんの後に続いて研究所へ入った。

「ああ、ナギさん。すいませんわざわざ…」

奥からいかにも研究員といった風情の白衣の若い男の人が出てきた。「いえ、こちらとしても何か対策を練らないといけないと思っていました。早速お話を聞かせていただきたいのですが…」

「はい…あの、こちらの少年は？」

「ああ、すみません。紹介していませんでした。こちらはスズさん

といいます。私だけでは大変な場面もあるかもしれませんが、今回の件をお手伝いしてくれることになりました」

「よろしくおねがいします」

僕は頭を下げた。

「僕はアマツ。こちらこそ、よろしくね。では二階へどうぞ」

最新の研究をするのだから当たり前といえば当たり前かもしれないけど、天気研究所は近代的な建物だった。多くの書籍や端末が設置されている。僕はしばらくキョロキョロしていたが、やがてアマツさんがやってきた。

「早速ですが、突発的な降雪について伺います。実は私はまだ実際に遭遇した事はないのですが…天泣のようなものとはまた別なのですよね？」

ナギさんが話を振った。

「少なくとも、自然現象ではないと思います。説明つかないところが多すぎますし、そもそもこの地域で雪が降るということ自体あまり考えられません」

「す、すいません、てんきゅうってなんですか？」

僕は話についていけずに言った。

「ああ、ごめんね。天泣っていうのは、いわゆる天気雨のことだよ」
アマツさんが説明してくれた。

「天気雨ですか…僕がこの前雪を見たときは完全に空は晴れていて、近くに雪を降らしているような雲は無かったと思いました。それに、すごく暖かかったし…」

「なるほどね…やっぱりこれは自然現象ではなさそうです。ヒワマキー帯は豪雨地帯ではあるものの、肝心の氷点下以下の気温という降雪の条件を満たしていないですからね。人工的に雪を降らせるなんていう技術はこの研究所でも開発されていませんし…」

「そうですか…となると、やはりこれはポケモンの仕業と考えた方が…」

ナギさんが呟いた。

” スズ、外みて！ ”

突然ルークが語りかけてきた。僕は窓の外に目をやった。

「！ナギさん、アマツさん！」

窓の向こう側で、しんしんと雪が降っていた。

- 天気研究所 - (後書き)

花粉辛い…

- 吹雪 - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ(ルーク)
コイキング(未定)

- 吹雪 -

僕達は外に飛び出した。

降雪はそう広くない範囲で発生しており、徐々にヒワマキシティの方へ移動していった。

ついさつき僕達が渡ってきた橋の上を、雪が渡っていく。

”スズ、上！”

上を見上げた。雪間に何か小さい物体が浮遊しているのがかるうじて見え隠れしている。あれは…ポケモン？

「やはりポケモンの仕業だったみたいですね。イタズラ…にしては随分と気合が入っているような…ちょっと様子を見てきます。オオスバメ！」

ナギさんはポケモンに？まると、上空に上っていった。

「ルーク…何か見えない？」

”ちょっと待つて……途切れ途切れでよく聞こえないけど、この感情は………恐怖……？”

「…恐怖？」

突如ナギさんを猛吹雪が襲った。オオスバメは身を翻して吹雪をかわし、再び地上に降りてきた。

「ナギさん！大丈夫ですか！？」

「……ユキメノコです。なんでこんなところに……まずい、刺激してしまつたようです。こつちに来る！」

ナギさんはオオスバメをモンスターボールに戻して言った。

吹雪の中心が僕達の方に向かってきた。雪間からちらりとユキメノコの姿が見えた。小さい頃絵本で読んだ雪女のイメージと、それは一致した。

僕達は橋の真ん中で、吹雪の塊と向かい合った。

”こわい………怖がつてる？”

「まずいですね…私のポケモンは氷に滅法弱い。しかもこの火力、

少々規格外です…エアームド！」

ナギさんは、まるで鋼のような羽を持ったポケモンを出した。吹雪なのに火力なんてなんだかおかしい表現だなあと思ったけど、そんな事を考えている場合ではなかった。

”！危ない”

再び吹雪が僕達めがけて襲い掛かってくる。ルークとエアームドが僕達の前に立ち、吹雪を防いでくれた。

「ルーク！」

”大丈夫……でも、このままじゃいずれ押し切られる…”

ルークのおかげで僕達には直接は当たっていないけれど、冷氣自体を遮断できるわけではない。このままでは次第に体の熱を奪い取られてしまうだろう。ルークの体力だって無限ではない。

「ルーク！何とかあのユキメノコに話しかけられないかな…」

”さつきからやってみてるんだけど、うまく波長が合わせられないんだ。相当錯乱状態みたい…”

錯乱状態…一体何に怯えているのだろうか。

びゅお！

一層激しさを増した吹雪が僕達を襲い、僕の腰につけていたモンスターボールが数メートル先に吹き飛んだ。吹雪にあおられて、橋の上をコロコロと転がっていく。

「あっ！」

衝撃でコイキングが姿を現した。吹雪の中で、ぴちぴちとはねている。

まずい。典型的には氷に耐性こそあるが、なんといってもコイキングである。

これほどの吹雪にさらされ続けたら、あっという間に凍死してしまうだろう。

「くそっ！」

僕はルークの後ろから出て、コイキングに向かって走り出した。
と、ふいに吹雪が止んだ。

猛烈な冷気にさらされる事を覚悟してルークの後ろから飛び出したのだが、想像していた感覚は襲ってこなかった。冷気ですでに皮膚感覚が馬鹿になってしまっているのだろうか。

とにかく僕はコイキングの元へと走った。

すうー、小さな影がコイキングの前に舞い降りた。

僕は驚いて足を止めた。先ほどまで強烈な吹雪を放っていたユキメノコが、コイキングの前にいる。

雪に隠れていたさつきまでとは違い、完全にその姿を見せている。

”……いい”

「えっ？」

”かわいい……だって”

僕は思わずルークを振り返った。かわ……いい？

再びコイキングのほうに目をやると、ユキメノコがコイキングを抱きしめていた。

「……かわいいって、まさかコイキングが？」

”……そうみたい”

僕はなんとなく、メノクラゲをかわいがっていた故郷の友人を思い出した。

- はぐれユキメノコ - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
コイキング（未定）

- はぐれユキメノコ -

さつきまでの吹雪が嘘のようだった。

冷え切った体も次第に温かみを取り戻していく。

”ええとね…”

ルークはユキメノコと話したことを僕に伝えてくれた。

ユキメノコはずっと遠くからやってきたらしい。ふよふよと漂っているうちに、どこからきたのかわからなくなってしまったそうだ。

見知らぬ土地で気候も体に合わず、心を許せる仲間もない。心細さから暴走してしまっていた。

二人の会話を要約すると、こんな感じだった。

「ふむ…まあ、異変の原因を突き止められたので、ひとまずよしとしましょう。しかし、このユキメノコはどうしましょう。このままではまたいずれ…」

ユキメノコはコイキングを抱きかかえて、嬉しそうにしている。

”スズ、スズ、ちょっと”

「ん？」

ルークとユキメノコが近付いてきた。

”スズ…このコの名前、なんていうの”

突如頭の中に声が聞こえた。ルークのものではない。

”ごめん、びっくりした？僕を介してユキメノコと話してもらってるんだ”

僕は驚いた。こんな事もできるのか。では先ほど聞こえた声はユキメノコの声ということだろう。

名前…そういえばまだ決めていなかった。

「名前…名前か………うーん」

コイキング。今でこそコイキングでしかないけど、いずれギャラドスになる存在である。未来を視野に入れた名前をつけるべきだろうか。

ギヤ…ぎゅ…ギョ…突然名前を決めるといふのは中々難しいものである。

ギヤ…ギイ…ギイ……！

「このコの名前はギイっていうんだよ」

勢いで決めてしまった。

”ギイっていうの…”

コイキングって…かわいいのだろうか。世の中にはやはり色んな感覚の持ち主がいるもんだなあ。

”スズ、わたしも一緒に連れて行ってほしい。もう寂しいのいやだ”

”ユキメノコは寂しさで我を忘れてしまっていたみたいなんだ。もしできたら、一緒に…”

僕は少し考えたが言った。

「ナギさん…このユキメノコ、僕が引き取ってもいいですか？」

「もちろんですよ。あなたのコイキングを随分と気に入ったみたいですね。私が引き取ってもいいのですが、ヒワマキの気候はきつとそのコには少々厳しいでしょう」

「わかりました。じゃあ、僕達と一緒に行こう！」

”ありがとう。スズ、わたしにも名前をつけてほしい”

ユキメノコはコイキングを抱いたまま、じつと僕を見つめていた。

「名前か…うん、わかった。そうだな…ユキメノコ…ユキメノコ…

ユキ…キメノ…メメ…」

一日に二つも名前を考える事があるなんて思いもしなかった。

「よし、君の名前はメメ！」

”めめ…ありがとうスズ”

ユキメノコは嬉しそうにコロコロと笑った。

「ナギさん！」

ヒワマキの方から、アマツさんが走ってきた。後ろに何人か人を連れている。

どうやらヒワマキから応援を呼んできてくれたらしい。

「大丈夫ですか！？おや、そのポケモンは…」

アマツさんがメメを見ると、メメは僕の後ろに隠れた。

「異変の原因はユキメノコだったようです。どうやら迷子になってしまつて、寂しさから暴走してしまつていたようです。解決したので、もう大丈夫ですよ。雪が降ることはないでしょう」

「それはよかった…いやーしかし無事で何よりだ。我らがジムリーダーの身に何かあつたら大変だ」

「ふふ、私もそんなにヤワではありませんよ。…今回はスズさんがいなかったら危なかったですけれどね」

ナギさんは駆けつけてきたトレーナー達と笑つた。

………ん？ジムリーダー？

「さて、異変も解決した事ですしヒワマキシティに戻りましょうか」

「ナギさん……あの……もしかしてナギさんって…」

ナギさんにはっこり笑つて言つた。

「お手伝いいただきありがとうございます。今度はヒワマキシムのリーダーとして、スズさんのお話をお伺いしましょう」

- 各地の実力者達 - (前書き)

主人公の所持ポケモン

ルカリオ(ルーク)

コイキング(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

- 各地の実力者達 -

「正体不明の灰色の組織ですか…」

再びヒワマキシティに戻った僕は、ナギさんにジムの奥へ案内してもらった。

ナギさんが出してくれたコーヒーを飲みひと息ついたところで、僕は早速ナギさんにルネシティの状況とここ数日で起った事を説明した。ナギさんは真剣に聞いてくれていた。

一通り説明し終えたところで、ナギさんが口を開いた。

「すみません、私はその組織の事はわかりません。スズさんの話を聞く限り、私も他の地方の者達ではないかと思えます。その話が事実ならば見過ごしてはおけない状況のようですね」

「じゃあ…」

「はい。ヒワマキシムリーダーのナギ、スズさんに協力させていただきます」

「…！ありがとうございます！」

僕は立ち上がって頭を下げた。

「しかし、その組織は用意を周到に行なっているようです。ミクリさんほどのトレーナーが身動きできない状況にさせられるほどに私達だけで動くのは少々危険かもしれません」

ナギさんはしばらく考えて言った。

「他のジムのリーダーにも協力を仰ぎましょう。話を聞く限りルネシティの人たちの安全はとりあえず保障されているようですし、こちらも万全の体制で望むべきでしょう。やはり町を一つを支配下に置くという行為は尋常ではありませんから」

僕は頷く。

この地図を見てください、とナギさんは言った。

「スズさんはその様子だと、ヒワマキが初めて立ち寄られたジムですね？私はまずトクサネジムに向かいます」

ナギさんがヒワマキ・トクサネを指でなぞった。

トクサネシティには、確か宇宙センターなる施設があると聞いたことがあった。つい最近ルネシティから出たばかりの僕は、今いる場所ですら広大で、宇宙の事を考えるとなんだか目眩がしそうだった。「私はその後、ムロ・トウカ・カナズミへと向かい、ジムリーダーへこのことをお伝えし、協力を仰ごうと思います。スズさんはフエントウンとキンセツシティへ向かい、ジムリーダーにこの事を伝えてください。私は先ほどの順番で町を回ります。最終的にカイナシティで合流しましょう」

「この地図の上半分の町は僕が回るような形になりますね…はい、わかりました」

今までの足跡から考えると、ホウエン地方を半周するような形になる。

「今日はもう遅いですから、明日出発しましょう。明日の朝またこちらにいらしてください」

僕はお礼を言っただけでジムを出た。

外はもう薄暗くなり始めている。

「ナギさん、話聞いてくれてよかったね」
隣にいたルークが僕を見て言った。

「スズとルークの故郷、たいへんなことになっているのね…」
ギイを抱いたまま、メメが心配そうに言う。

「うん…でも、ナギさんが話を聞いてくれて本当によかった。これで僕のできることもはっきりしたし…」

次の目的地はキンセツシティ。ついさっき立ち寄った天気研究所がある119番道路をさらに進み、118番道路を抜けた先にあるようだ。

「おい、スズくん！」

振り返ると、モナミさんだった。

「あれ、新しいポケモン捕まえたの？」

「はい、ユキメノコのメメです」

僕の後ろに隠れるようにしてモナミさんを窺っているメメを紹介した。

「ふーん、すごいじゃない。それで、どうだった、ジムは？」

「はい、協力してくださるそうです！」

「そう！よかった！…それで、問題は解決しそうなの？」

「いえ…ナギさんと話し合っただんですけど、今度はキンセツシティのジムリーダーの方にも協力をお願いすることになりました」

「ええ、そうなの！？なんだか本当に大事みたいだね…」

モナミさんは驚いたような声をあげた。確かに、各地のジムリーダーに協力を要請するというのは中々に大層な出来事だろう。

「とりあえず私部屋を借りられたからさ、そこに行って話そうか。お腹も減ったでしょ？」

- 次の町へ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
コイキング(ギイ)
ユキメノコ(メメ)

- 次の町へ -

モナミさんに案内されて入った部屋は、木の匂いに包まれていた。さして広くは無いが、生活していくのに不自由はない広さだった。モナミさんはすぐに料理を運んできてくれた。

人から指摘されたりおいしそうな匂いをかいだりして初めて空腹に気づくという事があるが、僕はまさにその状態だったようだ。モナミさんが運んできてくれた夕食を見た瞬間、僕のお腹は悲鳴を上げ始めた。

”おいしそう……”

メメもじいっとお皿に盛られた料理を注視していた。

「実はヒワマキシティには昔の友人が住んでいてね。使ってない部屋があるから安く貸してくれることになったんだよ」

僕は今日あった事を説明し、ナギさんの協力を得られた事を伝えた。

「じゃあスズくんはキンセツシティに向かうの？」

「はい。明日にでも出発しようと思います」

料理を口に運びながら僕は答える。簡単なものしかできないけど……なんて言っていたけど、モナミさんの料理は相変わらずおいしい。

「……そうかい。私はここでしばらく隠れている事にするよ。民宿の事もあるから、そう遠くに離れるわけにはいかないし……。スズくんさえよければここにいてもらっても全然よかったんだけど、どうやらそういう訳にはいかないみたいだね」

本当にありがたい申し出だったが、受け入れるわけにはいかなかった。進展こそしたものの、問題が解決したわけではないのだ。

「すいません……そう言っていただけるのは本当に嬉しいです」

「気をつけてね……そうだ、私は使わないから、この地図持って行つてよ」

モナミさんがヒワマキシティに来るときに使っていたものだった。「いいんですか、本当に助かります。何から何まで本当にありがと

「うございます」

「いや、このくらいしか力になってあげられなくて申し訳ない…そうだ、おいしいジュースを貰ったんだよ。トロピウスっていうポケモンに生る木の実のジュースだって。飲んでみようよ。スズくんはまだお酒は飲めないだろうから、ささやかだけどこれで壮行会しよう！」

モナミさんは笑顔で言ってくれた。

翌日、僕は朝早く起きた。

外はまだ薄暗いようだ。こんな時間に起きる事ができたのはいつ以来だろうか。

モナミさんはまだ寝ているようだったので、僕はそっとツリーハウスを後にした。

ジムに向かうと、ナギさんはすでに外に出て準備をしていた。

「おはようございます、ナギさん」

「おはようございます。スズさん、準備はできていますか？」

僕は頷く。

僕の返事を確認すると、ナギさんはモンスターボールを放った。

大きな葉っぱのような羽を持った、首長竜のようなポケモンが姿を現す。

トロピウスというのだと、ナギさんは教えてくれた。トロピウスは優しいような目をしていた。

昨夜飲んだジュースはこのポケモンが元になっているのかと、僕はしげしげと眺めた。

「スズさん、これを渡しておきます」

そう言うと、ナギさんは懐から封書のようなものを出した。

「これは？」

「私の書いた書状のようなものですよ。ジムリーダーの皆さんにあなたの身分を証明することの手助けになると思います。…もっともジムリーダーには癖のある人が多いので、それを見せたからといっ

てとんとん拍子に話が進むかは保証できませんが」

「いえ、充分です。ありがとうございます」

「では、私はそろそろ行きます。道中大変な事もあるでしょうが、お互い無事でカイナシティで会いましょう!」

そう言うとなぎさんはトロピウスの背に飛び乗り、朝焼けの空へ飛び立っていった。

「…僕たちも行こうか」

僕はなぎさんを見送り、ヒワマキシティを後にした。

- 次の町へ - (後書き)

地震の被害にあわれた皆様及び他府県で見守っていらっしやるご関係者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

小雨の地域は震度6弱でした。まだ余震が続いております。直接的な大きな被害はほとんどありませんでしたが多少バタバタとしておりますので、しばらくの間今までのペースでの投稿は少し難しいかもしれません。

楽しみにしてくださっている方、申し訳ありません。

40,000アクセス越えました。本当にありがとうございます。

「まず、あなた方の人数を把握させていただく。親しい者同士でひとかたまりになっていただけないか」

私達は従った。何か脅しの文句を言われたわけではない。しかし、男達の言葉には有無を言わせない力が込められていた。私はお父さんとお母さんと一緒に組んだ。

「よろしい。ご協力感謝する。今から、あなた方に番号を付けさせていただく。今後はそれで呼び合ってもらいたい」

私には23番と書かれたプレートが渡された。お父さんとお母さんは22番と24番だった。

「それでは、これよりグループ分けを行なう」

町の人たちの間にどよめきがおこった。

「今渡された番号から、なるべく離れた番号の者2・3人とグループを作ってもらふ。あなた方にはこれからそのグループで生活していただく」

今度はどよめきが怒声に変わった。

どうということだ！

話が違うじゃないか！

今考えれば、私達は随分甘い考えだったのだなあと思う。

ぼんやりと続く平和というのは人間の頭を鈍くする。危機感知能力を奪い取っていく。

灰色の男は特に感情を抱かぬ声で言った。

「私は言ったな？ 普段の生活に対してある程度の制限はさせてもらうが、決して積極的に危害は加えないと。君達はそれに同意した。違うか？」

ある程度というのはつまり、彼らのさじ加減ということだろう。私達は黙ってしまった。

「文句がないようなので話を続ける。この町は湖によって三つのブ

ロックに分けられているようだ。これから君達の居住ブロックを指定する。日常生活はその範囲内で済ますように。君達はこれだけ守っていればよい」

いつのまにやら男達の私達に対する呼称は、「君達」に変わっていた。

いつものように、太陽が昇ってくる。

私はカーテンを開けた。

部屋を出て、居間に向かう。

「おはようございます」

「おはよう、スズクちゃん」

「あの…番号で呼んだ方が…」

「あら…そうだったわね。ごめんね、まだ慣れなくて…」

スズくんのお母さんは苦笑いを浮かべた。胸には「3」と刻まれたプレートが付けられていた。

私は今、スズくんのお母さんと暮らしている。

あの日。灰色の男達がルネシティを占拠したあの日。

スズくんとリオルは帰ってこなかった。

おばさんは何も言わないけれど。悲しみの言葉は吐かないけれど。その様子は見ていて胸が締め付けられるような気分になる。

私の大好きだったスズくん。こんな事になるなんて思いもしなかった。

ルネシティでの平穏な日々が、ただただ続いていくと思っていた。

私が町を散歩していると、顔にガーゼを当て、腕を吊ったノリくんが円形広場にいるのが見えた。私とノリくんは同じブロックに住んでいて、同じブロックに住んでいる者どうしであれば会話することも許されている。灰色達があちこちに配備されていて、あまり好き勝手にしゃべれるというわけではないんだけれど。

「ノリくん… 8 番くん、おはよう」

「シズク… いや、2 3 番だっけか。うん、おはよう」

ノリくんは、何故だかバツが悪そうに挨拶を返した。

「何してるの？」

「いや…」

ノリくんは少し迷ったようだったが、話始めた。

「ここは、あいつと最後に別れた場所なんだよ」

あいつというのが誰だか、聞くまでもなかった。

「あの時はスズを逃がして少しでも灰色を足止めできればと思ったんだけどな… 余計なことだったんじゃないかって、さ。もしあそこで、俺達が抵抗せずに捕まっていたら…」

私は何も言えなかった。

「俺は、簡単にやられたよ。アバゴーラって言ってたっけか、あのポケモン。さすがに勝てるとは思わなかったけど、逃げる事に徹すればなんとかなるんじゃないかって思ったんだ」

「でも、ダメだった。あいつ等は素人じゃない。こんなことやろうってんだから、当たり前だよな。なぶられて、それで終わりだった」
「どうしても頭に浮かんで… 俺があんなこと言わずに大人しく捕まっていれば、スズは少なくとも死なずに済んだんじゃないかって…」
ノリくんの声は震えていた。ノリくんの目から雫が流れ落ち、包帯に染み込んでいくのが見えた。

私には、かける言葉が見つからなかった。

あの日。

灰色の男達がルネシティを占拠したあの日。

帰ってきたのはボロボロになったノリくんだけだった。

男達は、スズくんは湖に落ちて死んだとだけ言っていた。私達に真偽を確かめる方法はなかった。

私がスズくと最後に話したのはどんなことだっただろう。

ノリくんの横に座り、私は静かに泣いた。

灰色達の意図がすぐにはわからなかったのは、私が比較的気心の知れたスズくんのお母さんと組んだからだったと思う。

他の住人達は住み慣れない家、気心の知れないパートナーと長時間一緒にいることに大きなストレスを感じてしまい、次第に元気を失っていった。小さな町とはいえ全員が全員知り合いというわけでもないし、波長が合う合わないは言わずもなだろう。

そういった抗議を、男達は徹底して撥ね退けた。

「我々はある程度の制限はさせてもらうと事前に要求したはずである。諸君らはそれを受け入れたから今があるのではないか？我々に抗議するのは筋違いだ」

おかしいな理屈だと思った。そもそも私達に選択肢などなかったじゃないの。

私たち町民は男達に対して、無力だった。

「シズクちゃん晩ごはんできたわよ、食べましょう」

スズくんのお母さんだ。私達は料理当番を交代でこなしていた。今日は私は休みだった。

「おいしいです！おばさん本当に料理上手…私もいつかこんなふうに料理できるようになりたいなあ…」

「あらあら、お世辞なんて言わなくていいのよ。お口に合わないかもしれないけど、好き嫌いしちゃうだめよ。スズなんて…」

言いかけてハツとしたように、スズくんのお母さんは黙ってしまっ
た。

「…本当においしいですよ！私自分の料理ふるまうのが恥ずかしい
です！」

私はそう言つて、オムライスにかぶりついた。それは本当においし
くて、なんだか涙がこみ上げてきてしまった。

- 海峡 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
コイキング(ギイ)
ユキメノコ(メメ)

天気研究所を訪れたときは119番道路は比較的整備された道だと感じたが、研究所を越えた辺りから再び背の高い草が目立ち始めた。すぐに僕たちは道を完全に多い尽くすほどの鬱蒼とした草の森にぶち当たった。

「またこの草の中を行くのか…」

120番道路ではモナミさんが掻き分けてくれた後をついていくだけだったが、今回は自ら進んでいけないといけないだろう。

”スズ、がんばろう！”

ルークが右腕を振り回しながら草むらに突入した。

”メメモがんばる”

そういう言つと、ギイを抱きかかえたメメモルークの後に続く。

そうだ、こんな事で弱音を吐いている時じゃない。僕も慌てて後に続いた。

「うわっ、何か絡んだよ」

”ぜんぜん前がみえない…”

”スズ、足元気をつけて”

どのくらい草の中を進んだらうか、草の森から脱出すると、再び整備された道路に出た。

「潮の香りがする！」

必死で草の中を進んでいた時は気がつかなかったが、海が近いようだ。

タウンマップを確認すると、どうやら内陸部を回り込んで再び海沿いに出てきたようだった。

しばらく進むと、海にぶつかった。

「ええと、ここはもう118番道路になるのかな。ここまでくればキンセツシティは間もなくのはずだよ。もうちょっとがんばって歩こう！」

道中ずっとメメに抱かれたままのギイも久方ぶりの潮の匂いを懐かしがっているのか、ぴちぴちとせわしく動いていた。

僕たちは浜辺に沿って歩いたが、やがて歩みを止めることになった。

「あれ…道が途切れてる」

浜辺は途中で途切れており、対岸に小さく街並みが見える。地図上では特に記載されていないが、どうやら118番道路は海峡を挟んで隔てられているようだった。

「まいったな…まさかギイにつかまって渡るわけにもいかないし…」
僕はメメに抱きかかえられたままのギイを見た。ギイは相変わらずぴちぴちと動いていた。

そう遠くない距離とはいえ、泳いで渡れるとはとても思えない。

「おー。お疲れ、随分待ったわ。君、中々立ち回りうまいじゃないか。仲間から通信で聞いたよ、まさかジムリーダー味方につけるとは思わなかった」

驚いて振り返ると、ここ最近でずいぶん見慣れてしまった色が出現していた。

「ここで待つてればいつか君と会えると思っていたんだよ。118番道路はこの海峡で東西に隔てられているから、この先へ進むには海を渡るしかない。君の持つてるポケモンはルカリオだけだろう？」

”メメとギイもいる”

メメが僕の後ろから顔を出した。

「…ん、それはユキメノコか。へえ、ルカリオといいどっちもこの地方に生息していないポケモンじゃないか。君珍しいポケモンに好かれる術でも知ってるの？」

ギイがカウントされていなかったのはこの際気にすまい。後ろは海。前は灰色。逃げ場は無かった。

「君達この先どうする？君の手持ちポケモンじゃこの海峡を渡る事はできない。まさかコイキングで進むわけにもいかないよな？」

灰色の言うとおりだった。

「そこでだ、俺とちよつとポケモン勝負して遊ばないか？俺に勝てたらあそこにある船貸してやるよ。俺はヒマなんだ、ゲームしよう」灰色の視線を追うと、確かに小船があった。長距離は難しいだろうが、この海峡ぐらいなら渡る事ができるだろう。

「あの船は…」

「あれは対岸にいた釣り人が持ってた船をちよつと借りたんだよ。あの船があれば君を釣りやすくなるだろうと思ってな。君が勝てば船を手に入れて海峡を渡る事が出来る。且つ、船を奪われた哀れな釣り人に船を返すことも出来る。一石二鳥だ」

”スズ、やろう”

「ルーク、でも…」

ぼくは唇を噛んだ。まさかこんなに早く見つかってしまうとは思っていなかった。あわよくばこのまま遭遇せずに町を回れないかとさえ考えていたのだが、さすがに考えが甘すぎたようだ。

”大丈夫、必ず勝つよ”

ルークが力強く頷く。僕も覚悟を決めた。

「…あんたの話に乗るわけじゃないけど、確かにこのままじゃどうしようもない。いいよ、やろう」

「そうこなくっちゃ。待ってた甲斐がありましたわな。キリキザン！」

灰色がボールを放ると、見るからに攻撃的な外見をしたポケモンが姿を現した。腹部、腕、頭部にいかにも凶悪な刃が耀いている。まるで全身が凶器で覆われているかのようなだった。

ルークより少し上背があるようで、その分力も強そうに見えた。

”スズ…多分あいつも鋼だ”

「鋼…」

男の使うポケモンは、相変わらず初めて見る種族だった。しかし鋼であれば、ルークとは戦闘の相性がかみ合うはずである。

「ルーク…気をつけて」

”
うん!
”

- VS キリキザン - (前書き)

主人公の所持ポケモン

ルカリオ(ルーク)

コイキング(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

- VS キリキザン -

ルークとキリキザンは浜辺で対峙した。

「オマエ、カ。コンカイのテキは」

ルークとキリキザンの会話が頭に流れ込んでくる。

「そうみたいだよ。いくぞ！」

「タノシマせてクレ」

ルークは砂浜を蹴って一気に距離を詰め、接近戦を仕掛けた。拳が闘気を帯び、徐々に輝き始める。

鋼と鋼同士であるので、ルークの格闘タイプはプラスに作用するであろうと思われた。

キリキザンは軽くバックステップし、迎撃体制に入る。

ルークの発勁がキリキザンと激突しようかというとき、キリキザンの前の砂浜が突如盛り上がり、巨大な何かが姿を現した。ルークより二周りは大きいだろうか。ボシウウウと、ルークの拳の衝撃が逃げていくような音がする。

”！”

「な、なんだあれ！」

それはまるでロボットのような……いや、実際僕はロボットだと思っただ。それほどに突然現れたそれは、ロボットのイメージにそぐっていた。

「おいおい、一対一なんて言った覚えは無いぜ。君達まだ頭の中が少々平和みたいだな。俺達は一般的に言うところの、まあ悪党だ。……今の君みたいな顔見る瞬間が……くふふ、楽しくてしょうがないよ」灰色は耳障りな声をたてて笑った。聞いてもいないのに、ペラペラと喋り続ける。

「あれはゴルグって古代に作られたポケモンだ。ただの力任せの攻撃は中々通さないよ。あいつは本来生命を守るように戒律を定められてたらしいんだが、うちのボスがブラックボックスを書き換え

てくれてね。今ではご覧の通りだ」

ゴルグはそのままルークの腕を掴むと、無造作に放り投げた。ゴルグがさらに地面に拳を突き立てると、ルークめがけて地割れが走る。

ルークは空中で体勢を立て直して着地したが、地割れの衝撃が直撃し吹き飛ばされてしまった。

すかさずゴルグが追撃にかかる。

「ルーク、前！」

ゴルグが拳を組み、ハンマーのように振り下ろしてきた。

”う…”

”オット、ウゴクなヨ”

いつの間にかキリキザンがルークの背後に姿を現し、回避しようとしたルークを押さえつけた。

ゴルグは動きこそ鈍かったが、その分いかにも攻撃に重さを感じる。

「ルーク！」

びゅお！

僕が叫ぶのとほぼ同時だった。追撃にかかるゴルグを集約された猛吹雪が襲い、動きを一気に鈍らせた。

”スズ、ギイをもつて”

ルークはその隙にキリキザンのいましめを解き、再び距離を取った。

”メメもたたかう”

しんしんと雪が降り始める。メメがルークの前に舞い降りた。

- VS キリキザン - (後書き)

どう見ても口ボ。

50,000アクセス越えました。感謝してもしきれません。

- 遠距離攻撃 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ（ルーク）
コイキング（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

- 遠距離攻撃 -

「メメ、ゴルグの相手をしてくれ、ルークは隙を見て後ろのキリキザンを」

頷くと、ルークとメメはそれぞれ飛び出した。

ゴルグが掌に黒い影の塊を生成し、メメに向けて放ってきた。

「まけない」

メメも目の前に黒色の球体を創造すると、迫ってくる黒玉に向けてぶつけた。

二つの玉は正面から衝突ししばらくの間せめぎ合っていたが、やがてメメの玉がゴルグのそれに打ち勝ち、そのままゴルグの胸を直撃した。方膝をついたゴルグの肩を踏み切ってルークが跳躍し、そのままキリキザンに向かってとび膝蹴りを見舞う。

「グッウ、オモイ ナ」

かろうじて受け止めたキリキザンはルークの足を掴むと、後方へ放り投げた。

それは攻撃ではなく単に放り投げただけのようであり、ルークは難なく着地する。

キリキザンはルークを放り投げると同時にメメの方に向かって走り出した。

「！」

メメは慌てて雪間に隠れようとしたが、キリキザンの方が一手早かった。吹雪の中にその凶悪な手を突っ込む。

「ツカマエタ、フフ」

「メメ！」

メメが雪の中から引きずり出された。吹雪が止んでしまう。

「スズ…くるしい…」

キリキザンが嬉しそうな笑みを浮かべた。

「一対一ダナンテ キメタ オボエハ ナイ」

キリキザンはメメの首を掴んで高く掲げ、そのまま凶器のようなもう一方の手をさらに研ぎ澄ませた。

”メメ！”

ルークの声が頭に響く。

”ソナトコロカラ ジャ マニアワイヨ。…フフ、バイバイ”

キリキザンの手刀がメメを切り刻まんとしたその時、キリキザンの体が大きく吹き飛んだ。

”ガアッ！イ、イタイ…ナニ…”

ルークの両掌に青白い光が灯っていた。両手で光を包み込むようにして球をつくり、再びキリキザンに向かって打ち出す。

青白い球体がキリキザンを直撃し、キリキザンは動かなくなった。

「メメ、大丈夫か！」

僕はケホケホと咳き込んでいるメメに駆け寄った。

”勝ったよ、スズ”

ルークが戻ってくる。

「ああ…勝った…よかった…」

僕はほとんど見ていただけだったが、安堵感から脱力してしまった。
「…ルーク…さっきの技は？」

”メメのさっきの技を見て閃いたんだよ。あの要領で闘気をとばせるんじゃないかって”

「それは…成功してよかった。メメ、危ないところだったね」

”たすかった。ありがとうルーク”

「二人とも本当にお疲れ様。僕はその…なんにもできなくてごめん

…」

二人が戦っている間に僕が出来た事といえば、精々悲鳴を上げることぐらいのものだった。

”そんなことない”

ルークが頷く。

”スズが後ろで見てくれるから、僕達は安心して戦えるんだよ”

僕の腕の中で、ギィがぴちぴちと動いていた。

- 遠距離攻撃 -
(後書き)

波動弾？波導弾？

- 海を渡る - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
コイキング(ギイ)
ユキメノコ(メメ)

- 海を渡る -

「あーあ、負けちまったか」

大して残念でもなさそうな灰色の声が聞こえた。僕は再び引き締める。

「結構やるもんだな。君トレーナーの才能あるんじゃないの？」

灰色にそんな事を言われても全く嬉しくなかった。それに僕はほとんど見ていただけた。

「まあ、ともあれ君の勝ちだ、おめでとう。君これから別のジム回るの？」

「…そんな事お前達に教えるわけないだろ」

「ははっ、そりやそうだな。まあ、精々用心することだね。俺なんかは下っ端だが、俺達の中にもそれなりの実力者はいる。ジムリーダーだって余裕こいていられないぜ、多分。ヒワマキのジムリーダーが無事だといいな」

灰色がニヤニヤと笑って言った。

「…僕なんかがナギさんの心配したって仕方ない。今は先に進む事だけ考えるよ」

「くく、言葉とは裏腹に、君随分心配そうな顔してるぜ。さて約束だ、あの船乗っていきなよ。俺はさっさと退散するから…あ、なんだ。ゴル―グ完全にやられちまってるな。エネルギーだだ漏れじゃないか。こりやもう使い物にならない…どうやって帰るかな…まあいいか。キリキザン、行くぞ」

ブツブツ呟いていたが、キリキザンを連れて灰色は行ってしまった。随分とあっさり行ってしまった。

ヒワマキのジムリーダーが無事だといいな…灰色の残した言葉は少なからず僕の心に不安の影を落としたが、さっき灰色に言ったとおりだった。僕がナギさんの心配をしても仕方が無い。

「あいつ…ゴルグ置いて行っちゃったけど…」

僕は浜辺で膝を突いたまま黒い煙を上げ続けているポケモンを見た。これもポケモンなのか…なんだかポケモンのイメージを覆すような感じた。

これは…体は土で作られているのかな？

僕たちは恐る恐る近寄って見るが、動く様子は無い。

”……………タ……………スク”

「え？」

ふいに頭の中に声が聞こえた。今まで聞いたことの無い声だった。ゴルグの声という事だろうか。

”アス……………リ……………スク……………を……………守……………”

……………アスタリスク？

ゴルグから出ていた黒い煙が途切れ、完全に活動音がしなくなった。

”スズ、あすたりすくって？”

「僕も聞いたことないよ…」

最後ゴルグはなんと言ったのだろうか。守ってと聞こえたような気もしたけど。

しかし心当たりが無いものを守れと言われてもどうしようもなかった。

「…海を渡ろう。キンセツシティはすぐだよ」

僕達は灰色が置いていった小船に乗り込んだ。

…ナギさんは大丈夫だろうか。やっぱり僕は心配で、なんとなく空を見上げた。

- 海を渡る - (後書き)

いつの間にか50話。

- 或る空域での出来事 -

「まったく…あの二人はどこで何をしているのでしょうか…」
ため息まじりにナギが呟いた。

大きな葉っぱのような翼を羽ばたかせ、風を受けながらナギとトロピウスが飛んでいる。

ヒワマキシティを飛び立つてから程なくナギはトクサネシティを訪ねたのだが、トクサネジムのジムリーダーは不在だった。

「リーダーのお二人は、たまにふらつと出かけることがあるんですよ…申し訳ありません、私達にも行き先はちよつと…ナギさんが訪ねてこられた事はお伝えしておきますので…」

ジムのトレーナー達に聞いてみたが、どうやら行き先に心当たりは無いようだった。

仕方なくナギは手紙を残してトクサネシティを飛び立ったのだった。

トクサネシティのジムリーダー…フウとランに会うことができなかったナギは、トクサネシティを飛び立ち、126番水道の上空を飛行していた。

ナギの頭に、ふとよぎる。本当にルネシティは、あの少年が言っていたような状況に置かれているのだろうか。

必死の形相で故郷の事を話してくれたスズの事を疑っているわけではない。信用していないわけではない。

しかし、ルネシティにはミクリというジムリーダーがいる。どのような状況だったかは詳しくはわからないがしかし、ミクリの実力を身をもって知っているナギとしては、ミクリほどのトレーナーが何も出来ず捕らえられてしまったという事態がにわかに信じ難くもあった。

ここからならルネシティはそう遠くない。上空から様子を窺うことぐらいはできるのではないだろうか。ナギはそう考えた。ナギレベ

ルの鳥ポケモンの使い手なら、ルネシティを囲む外壁を飛び越える事も容易だった。

「トロピウス…少し進路を変更しましょう。西へ…ルネシティへ向かって飛んでください」

トロピウスは小さく鳴き、進路を微調整した。

そのまましばらく飛行し、ルネシティが目視できる程度の距離になった時だった。ふいに鳥の鳴き声が聞こえた。

目を凝らすと、ルネシティの方角から一羽の鳥が飛んでくるのが見える。

「あれは…バルジーナ！？なぜハウエンに…」

口に出したナギは、すぐに答えにたどり着く。あれはおそらくあの少年の言っていた灰色達のポケモンなのだろうと。ということは、侵略者達はイツシュ地方から…？

考えている時間はあまり無かった。バルジーナはまっすぐナギとトロピウスに向かって飛んでくる。

「トロピウス、この空域から離脱しましょう。まだ相手と事を構えたくありません。この距離であれば振り切れるはず」

トロピウスは即座に急旋回し、バルジーナの縄張りから離脱を試みた。と、その時バルジーナが大きな翼を羽ばたかせ、ものすごい突風を巻き起こした。方向転換仕掛けたところを強風に煽られ、トロピウスが大きくバランスを崩す。

「トロピウス…！大丈夫ですか！」

気を取られた一瞬だった。ナギはすぐに一手ミスをしたことに気がついた。

一手のミスであるが、大きなミス。

ナギたちのいる高度よりさらなる上空から、独特の風切り音が一気に接近してくる。

「……この風切り音は……まずい！」

遙か上空からトロピウスめがけて急降下してくる影を目の端で捕らえた時にはもう遅かった。

急降下してきた影がそのままの勢いで直撃し、トロピウスの片翼がもがれてしまう。

影はそのまま滑空し、鋭く鳴いた。

「ブレイブバード……ウオーグル……ですか……くっ」

片方の翼を失ったトロピウスは小さく声あげ、羽ばたく事を止めてしまう。万有引力の法則に従い、二人は落下を始めた。

「トロピウス……ごめんなさい……」

ナギはトロピウスをモンスターボールに戻すと、静かに大海原へ落下していった。

- 雷撃 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
コイキング(ギイ)
ユキメノコ(メメ)

「ああっ、テッセンさんあの船です！私のだ！」

「うわっはははは、わざわざ犯行現場に戻ってきよったか！手加減はしてやるからありがたく思っくんじゃぞ！ライボルト、10万ボルトじゃ！」

「う、うーん……」

僕は目を覚ました。

……目を覚ました？僕は眠ってたんだっけ？
ここは……

「ああっ、目を覚ました！よかった……」

僕はゆっくりと起き上がる。どうやらベッドに寝ていたようだった。声の聞こえた方を見ると、見るからに釣り人といった身なりの男性が安心したように胸をなでおろしていた。

「……………あれ。確か僕は海を渡っていて……それで……」
なんだか記憶が曖昧だった。

「……うん……あー……」

釣り人の話によると、こうだ。

いつものように砂浜で釣り糸を垂らしていると、突然灰色の服を着た男に暴行され、船を奪われてしまった。

こんな暴力行為が許されてなるものか。次第に恐怖が薄れると怒りの感情が膨らみ、ジムリーダーのテッセンさんに話をし、船を取り返してくれるように頼んだ。

犯人は犯行現場に戻るという言葉を鑑みて、釣りをしていた砂浜に二人でやってた所、対岸から奪われた船に乗った僕がやってきたの

だと言っ。

まさか犯人以外が乗っているとは思わなかったのだろう。

しかし加減した電撃とはいえ、恐ろしい話だ。テッセンさんという人は随分と攻撃的な性格なのだろうか。

僕はなんとなくしり込みしてしまう。

「ん…そういえば、ここは…」

「キンセツシティのジムだよ」

「あの、テッセンさんは…実は僕、テッセンさんにお話があつて来たんですが…」

「そうだったのかい？それがあの人急に用事ができたとかで、君をベッドに寝かせてすぐにハジツゲタウンに向かったんだよ。

2・3日は帰らないかもしれないなあ」

君にくれぐれも謝っておいてくれと言っていたよ、と釣り人のおじさんは言った。

もう少し休んでいけばとおじさんは行ってくれたが、僕はお礼を言つてジムを出た。

痛い思いはしたけれど、船を持ち主の下に返すことが出来てとりあえずはよかった。

「あ、スズ！」

ジムの外に出ると、ルーク達が待っていた。

「みんな！大丈夫だった？」

「僕は大丈夫だよ」

「メメモ。すごくびりびりしたけど……ギイはまだしびれてるみたい」

メメの腕の中で、ギイはピクピクしている。……生きていてよかった。

「ま、まあとりあえずみんな無事でよかった。それで、これからの事なんだけど…ジムリーダーのテッセンさんが留守にしているみた

いだから、先にフエンタウンを回ろうと思うんだ」

僕は地図を出して、キンセツ・フエン間を指でなぞった。

「テッセンさんはハジツゲタウンにいるみたいだから、もし順調に事が進んだらそのままハジツゲに向かおうと思うんだけど……いいかな？」

”もちろん”

”メメもいいとおもう”

「ありがとう。あまり時間を無駄にできないから……早速出かけようか」

僕達は町の北の出口を出て、１１１番道路に向かった。

- ロープウェイ - (前書き)

主人公^{スズ}の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

- ロープウェイ -

111番道路は今まで通ってきた道路と違って随分と歩きやすいつと感じていたのだが、次第にゴツゴツとした岩肌が目立つようになってきた。道もそれほど急ではないが、多少勾配を感じる。なんとなく故郷のルネシティを思い出した。

聞けば、このあたりも火山地帯なのだという。やはりルネシティと共通点があるのかもしれない。

それはそうと、フエントウンは少し標高の高いところにある小さな町であり、ロープウェイという乗り物に乗らなければ行けないらしい。

キンセツシティを出るときに、釣り人のおじさんが教えてくれた。ありがとうございますと言って町を出たが、ロープウェイとは一体どのような乗り物なのだろうか。縄の道…？

未知の乗り物になんとなくワクワクしていた僕だったが、徐々にその姿が見えてくるにつれ、暗い気持ちになっていった。

「これに…乗るの？」

ロープウェイって不思議なネーミングだなあと思っていたけど、何のことはないそのままの意味だ。

ロープにぶら下がっているあの小さな箱に乗って、頂上まで運んでもらうというのだろう。

冗談じゃない、僕達の命を支えているのはあの小さなロープだけじゃないか。

張られているロープの先を目で追っていくにつれ、僕は完全に腰が引けてしまった。

ルーク達はさつさと乗り込んでしまったが、僕は中々一步を踏み出す勇気が出せなかった。

ヒワマキシティのツリーハウスの比じゃないよ、これ。

”スズ、あんまり時間ムダにできないんでしょ？”

ルークが意地悪そうに言う。

”スズはやく”

メメは初めて乗る乗り物に興奮気味のような。
僕は覚悟を決めて一歩踏み出した。

ガタンと揺れロープウェイは動き出したが、僕はそれだけで尻込みしてしまっただ。

徐々に足場が不安定になっていくのを感じる。

高度が上がるにつれルーク達は外を見て歓声をあげたりしていたけど、僕は座席から微動だにせず、硬く拳を握り目を閉じていた。

”スズあそこ、町が見えるよ!”

ルークが下を見て嬉しそうに言ったが、精神を集中させていた僕は最後まで下を見ることはなかった。

”面白かった!”

”またのりたい”

ルークやメメはまた乗りたいなんて言っているけど、僕は二度と乗りたくなかった。

ロープウェイを降りた時にはなんだか膝が笑っていて、地面に転がってしまっただ。

「…うわっ、なんだこの地面…」

僕が無様に転がってしまったのは膝が笑っていただけではないようだ。

踏み出した大地は予想以上に沈み込んだのだ。

「なんだこれ……これは、灰?’

特有の臭いが鼻を突く。

”スズ、灰だらけだよ”

今転んだせいで、僕の体中に灰がついていた。少し吸い込んでしまったのか、なんだか喉に違和感がある。

「うわ……とりあえずフエントウンに行こう。町には温泉が湧いて

るって聞いたよ」

僕は咳き込みながら言った。

ロープウェイで登ってきた山を今度は若干下りつつ歩き、僕達はフエントウンに到着した。

フエントウンはヒワマキシティやキンセツシティと違い、小さい町だった。山間の集落といってもよさそうな規模だ。なんだかのどかな雰囲気だった。

「ごめん、ちよっと早速温泉に……」

僕は太急ぎで温泉に向かった。温泉は無料で開放されているらしく、内心とてもホッとしていた。

看板に従って進み、木造の建物にたどり着く。僕は勢いよくドアを開けた。

「きゃっ……ちよ、ちよっと！」

「え……うわわっ、ご、ごめんなさい！」

勢いよく飛び込んだ脱衣場には、真っ赤な髪をした女の人の姿があった。

・ ロープウェイ ・ (後書き)

高いところあい。

- 温泉 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
コイキング(ギイ)
ユキメノコ(メメ)

- 温泉 -

「別には、は、はだ、裸を見られるくらいなんという事はないのだが、つい防衛本能で手が出てしまったのだ」

「は、はあ… すいません」

僕はヒリヒリするほつぺたを触りながら、すぐ隣で温泉に浸かっている赤い髪の人を今一度謝った。

叩かれた箇所が火照っているのか単に温泉にのぼせているのかわからないが、なんだかほつぺたは熱を持っているような感じがする。

結局僕は温泉に入った。もちろん僕は先を譲ったのだが、今は混浴の時間帯であるし油断していた私が悪いなどと言って、僕の提案は却下されてしまった。

多少リラックスできる事を期待して温泉に浸かったんだけど、なんだか変に緊張してしまう。

しかし温泉というものに初めて入ったのだけど中々、いや随分と気持ちがいい。旅の疲れが溶けていくようだ。ゆっくり入浴するなんていつぶりになるだろう。

こういう形態の風呂はいわゆる露天風呂というやつだろうか。屋外で湯に浸かるというのはなんだかそれだけで解放的な気分になれる。両足を伸ばしてお風呂に入るなんて初めてかもしれない。

これだけ気持ちいいと、なんだか外で待っていてくれるルーク達に申し訳ない気持ちになってしまう。

「どうだ、中々気持ちのいい露天風呂だろう」

赤髪の女の人が声をかけてきた。

「はい、とても気持ちいいです。露天風呂なんて初めて入るので…」

「そうなのか。住人の身で言うのもなんだが、ここの露天風呂はホウエンーだと思っぞ」

言うだけあると思う。

「そっいえば君はポケモントレーナーか？それとも旅行者？」

「は、はい、一応トレーナー……です。旅行者……ではないと思います、多分」

なんだか自分の身分が上手く表現できなかった。トレーナーになったつもりはないが手持ちポケモンはいつの間にか増えていたし、旅行しているつもりはないが各地を回っている事には違いない。

「なんだはつきりしないな。トレーナーということは、この町のポケモンジムに挑戦しに来たと言う事か」

「いえ、そういうわけでは……ジムリーダーの方にお話したい事がありました」

「ほう。なんだ話と言うのは」

「いえ、ジムリーダーの方に直接」

あまりの気持ちよさに精神までふやけそうになってしまっていたが、僕は気を引き締めた。迂闊に無関係の人に話すわけにはいかないのだ。

しかしそれでも女性には引かなかった。

「だから、なんだと言っているのだ」

「え」

「まだるっこしい奴だな君は。リーダーに用事があるくせに相手の顔も知らないのか？ フェンジムリーダー、アスナは私だ」

- 温泉 - (後書き)

アスナさんがタオルを巻いているかどうかはご想像にお任せします。

- アスナ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
コイキング(ギイ)
ユキメノコ(メメ)

- アスナ -

ジムリーダーの顔どころか考えてみれば名前すら知らなかった僕は、驚いて思わず立ち上がった。

「す、すいません！お話があります！」

「だから、さっきからなんだと聞いているだろうが…きゃ、ちょっと、君、した、下半身」

「す、すいません」

僕は慌てて湯に浸かる。

「それで何なのだ、私に話と言うのは」

「はい。あ、すいません、僕はルネシティのスズといいます。実は…」

僕はルネシティで起った事を話し、ナギさんに協力してもらっている事を話した。

ざっとではあるが、フエントウンに至るまでを一通り話し終える頃にはすっかりのぼせてしまっていた。

「ふむ…なるほど」

しばらくアスナさんは考え込むようにしていたが、やがて僕の方を向いた。

「わかった、私も協力しよう」

「ほ、本当ですか！」

「うむ、本当だ。ナギちゃん…いや、ナギも協力していると聞いては黙っていられないしな」

「ありがとうございます！」

「いや、ちょっと、まって、だからあんまりこっちに近付かないです、す、すいません」

僕は思わず身を乗り出してしまったが、慌てて元のポジションに戻る。

「こんなところで話すのもなんだから、詳しい話はジムに戻ってからしっかりと聞かせてもらおう。私は先に上がっているぞ」

ひとまず、良かった：

僕は鼻まで湯につかり、ホッと安堵した。

脱衣所で着替えて外に出ると、ルーク達が出迎えてくれた。

時折感じる風が火照った体に心地いい。

”スズ、ずいぶん長く入ってたね。そんなに気持ちよかった？”

「うん、めちゃくちゃ気持ちよかった。なんだかみんなに申し訳ないなあ」

”スズいいな。ね、ギイ”

メメが腕の中のギイに話しかける。

「それでね、なんとフエンジムのジムリーダーさんが入浴してたんだよ。話聞いてもらえちゃった。今からジムに向かう」

”もしかして髪の毛の赤い女の人？さっき入り口から出てきたけど、僕らをちらつと見て行っちゃった”

あっちの方、とルークが指差した。

「赤い髪だったら間違いないと思うよ。早速ジムに行ってみよう」
火照った体をゆっくり冷ましたいという気もしたが、僕達は急いでジムに向かった。

- アスナ - (後書き)

アスナ参考資料

http://wiki.ポケモン.com/wiki/%E3%82%A2%E3%83%A

- フェンジム - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

コイキング(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

- フェンジム -

ポケモンジムはやはり他の町と似たような形状をしていて、すぐにわかった。

ジムの門をくぐると、トレーナーが出迎えてくれた。後について歩きながら、ヒワマキジムに初めて入った時とは随分違うなあなんて思っていたらすぐにアスナさんの部屋に通された。

「きたか、スズ」

「すみません、遅くなりました」

僕はアスナさんが勧めてくれた椅子に腰掛けた。冷たい飲み物が用意されていたので、僕はそれをひと息に飲み干した。

「ただのコーヒー牛乳だが美味いだろ。風呂上りは自分で思っている以上に水分が失われているから、余計においしく感じる」

アスナさんも向かい側に腰掛けると、ひと息にコーヒー牛乳を飲んだ。

「さて、早速だが先ほど聞いた話をまとめさせてもらおうぞ。ルネシティは謎の組織によって占拠。ミクリは捕らわれ町の人に抵抗する術はない。お前だけが運良く脱出し、各地のジムを回って助けを求めている、と」

現状ルネシティがどうなっているのかは全くわからないが、ルネシティの大まかな状況を飲み込んでくれているようだ。

「はい、そうです。ヒワマキシティではナギさんの協力を得る事ができました。ナギさんにはトクサネシティからムロ・トウカ・カナズミのジムを回ってもらって、最終的にはカイナシティで落ち合う予定です」

僕はナギさんに書状をもらっていた事を思い出し、アスナさんに渡した。

一通り目を通してからアスナさんは言った。

「ふむ、なるほどな。ではスズが残りのジムを回るといふことか。

…キンセツシティのテッセンさんの協力は得る事ができたのか？」

「いえ、実はテッセンさんはちょうどハジツゲタウンに出かけているらしくて…」

「そうか。では君はハジツゲタウンに向かうといい。私はキンセツシティで待機し、もし君がハジツゲタウンでテッセンさんと入れ違いになったら私がキンセツで事情を説明しよう。もしハジツゲでテッセンさんと会えなくても君はそのまま114番道路を通ってカナズミシティに向かうといい。私はキンセツシティに戻ってきたテッセンさんとカイナシティに向かう」

「わかりました。では僕はこのままハジツゲタウンに向かおうと思います」

「気持ちはわかるが、まあそう焦るな。ハジツゲには炎の抜け道という洞窟を通らなければ行けないのだが、山道含め夜では危険だ。焦る気持ちはわかるが、今日はここに泊まって明日出かけるといい。」

怪我をってしまったては元も子も無いからなと、アスナさんは言うてくれた。

「ところで、スズの手持ちポケモンはその三体か」

「はい。ルーク…ルカリオ、ユキメノコ、コイキングです」

そうか、とアスナさんは言い、一つの提案をした。

「スズ、一つ私と模擬戦をしてみないか」

- 脳内バトル - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ（ルーク）
コイキング（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

- 脳内バトル -

突然の申し出に戸惑っている僕にアスナさんは続けた。

「いや、実際に戦わなくてもいい。ゲーム感覚でやってみよう。お互いのポケモンのライフは3ポイント。効果抜群の技を受けた場合は-2ポイント。等倍ダメージの場合は-1ポイント。半減ダメージの場合は-0.5ポイント。行動順は素早さ依存。状態異常については都度説明しよう。もちろん先に相手のライフをゼロにした方が勝ちだ。さて、私はギャロップを出す。君はどうする？」

始まってしまった脳内での戦いに戸惑いながらも、僕も慌てて考える。

「ええと…僕はルカリオを出します」

「ふむ。私の一手目はフレアドライブだ。君の一手目は？」

「僕の一手目は…とび膝蹴りです」

「0点だ」

即座にアスナさんは言った。厳しい採点だ。

「フレアドライブはルカリオのライフを-2。とび膝蹴りはギャロップのライフを-1。普通に戦ったのではルカリオに勝ち目は無い。いいか、ルカリオは強力なポケモンだ。しかし、ギャロップが相手では相性が悪いのだ。ユキメノコも相性は良くないが、基本的にはユキメノコはギャロップより早い。一回先に動く事ができるわけだから、何か手段を講じる余地がある。これはあくまで例えばの話だが、ユキメノコが電磁波でギャロップの素早さを奪う事ができればルカリオのとび膝蹴りを先に当てる事ができる。これでギャロップのライフは2ポイントは削れる。最もこれはあくまでルールの存在する一般的なポケモンバトルの話であって、今まで君が体験してきた戦いとは少々違う。しかし一手のミスが勝敗を決する事があるポケモンバトルではこのような考え方を元に立ち回りを考える事は重要だと思う。」

担当直入に言つて、とアスナさんは続ける。

「君のポケモン達は炎に対して無策すぎる。君は灰色の男達を何回か撃退しているようだが、運がよかっただけだ。勘違いするな、君のポケモンたちが弱いと言っているわけではない。ポケモン同士の戦いでは、相性が重要なのだ。種族としてのタイプと、使用する技のタイプだ。君が撃退した男達の使っていたポケモンはなんだった？」

「…キリキザン、ゴルーク、ダストダスです」

僕は灰色達が呼んでいたポケモンの名前を覚えていた。

「キリキザンは鋼＋悪。ゴルークは地面＋ゴースト。ダストダスは毒だ」

アスナさんは言う。

「対する君のポケモンはというと、ルカリオは鋼＋格闘。ユキメノコは氷＋ゴーストだ。…コイキングは水だが、とりあえず置いておこう。」

確かに、ルークはゴルークには危ないところまで追い込まれてしまったが、キリキザンは圧倒する事ができた。メメはその逆で、ルークが助けに入るのが一歩遅ければキリキザンの刃の餌食になってしまっていただろう。

「逆に、ルカリオがダストダスに勝てたのは何故だ？ダストダスのタイプは毒だ。格闘タイプの攻撃は半減されたはずだ。ルカリオの鋼の体は毒を通さないとはいえ、簡単には勝てなかっただろう」

「それは…」

あの時は確か。

「あの時は、ボーンラッシュという地面タイプの技を使っただけです。地面の力を拳に込めていたのだと、戦いの後ルークが教えてくれた。アスナさんは頷いた。ポケモンバトルの理論中では役割破壊というのだが、と前置きして、アスナさんは続ける。

「私が言いたいのはそれだ。自分のタイプではない技を使っても威力が充分に出るとは言いがたい。しかし、それで突破口が開けるこ

とも往々にしてある。特に今の君の置かれている状況では、敵に対して全く歯が立たないというのは非常に危険だ。ボーンラッシュは相手に接近する必要があるから、遠距離から炎を放つ事ができるポケモンを相手取るには少々危険だ。余計なお世話かもしれないが、炎タイプに対する策を練ることをお勧めする」

- 夜の篝火 - (前書き)

主人公^{スズ}の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

- 夜の篝火 -

宿に泊まるなどと水臭い事は言わずにここに泊まっていけとアスナさんは言ってくれた。

僕はアスナさんの言葉に甘える事にして、用意してくれた布団に早々ともぐりこんだ。

温泉でいい感じに体がほぐれたのか、やたらと布団が気持ちよく感じる。

布団が足りないというので、ルーク達にはモンスターボールの中で休んでもらっていた。考えてみると、一人で過ごす夜というものなんだか久しぶりな気がした。

窓から外を見ると、周囲はすでに夜に包まれていた。家々の明かりがぼつぼつと点いており、さっき入った温泉の周囲には一際大きく篝火が炊かれている。もしかしたら夜間の入浴も可能なのかもしれない。

この町にもどうやら街灯と言えるような街灯は無いようで、光源の少ない独特の暗闇も何となくルネシティを連想させた。

僕は布団に仰向けになって、アスナさんが言っていた事を思い返した。

とても勉強になった。ジムリーダー直々に指導してもらえたというのは、なんとももったいない話だ。

アスナさんが言っていた通り、今までの戦いはルークやメメの力が強力だったから乗り越えられたに過ぎない。実際僕が指示した事なんてごくわずかだし、運も良かったのだろう。

ポケモンバトルにおいては運も重要な要素だよとアスナさんは言ってくれたけど、それだけでこれからも乗り越えていけるとは思わなかった。

今まで右も左も分からないままに故郷の外に放り出されてがむしゃ

らに進んできたけど、それじゃ駄目なんだ。僕は負けたりいけない。そこで道は途絶えてしまうのだ。

僕はもつと考えなければいけない。僕の力不足が原因で、ルーク達に苦しい思いばかりさせるわけにはいかない。

勝つために。先へ進むために。

ぼんやりと考え事をしている間に、次第に眠気が押し寄せてきた。眠るという行為は不思議なもので、意識するほど眠れないのに、放っておいても眠るときは眠ってしまう。もしかしたら呼吸や内臓の活動と同じで、人間が意識しないのでできる行動の一つなのかもなと思う。

窓の外を見ると、いつの間にか家々の明かりは消え、温泉の周囲を照らす篝火だけが暗闇の中に浮き上がって見えた。

ルネシティのみんなはどうしているのかな…

いつの間にか僕は眠りに落ちていった。

ルネシティの夜は足が早い。日が落ちたかと思うと、辺りはすぐに暗くなってしまう。

単純に灯りが少ないからだ。しかし長年住んでいると、そんなことは全く気にならなかった。

今は灰色達によって松明のような物に灯がともされており、平時のルネシティより明るいくらいだった。

実は私はもつと小さい頃、一度だけお父さんに連れられてルネシティの外に出たことがあった。

初めて見る別の町は夜でもとても明るくて、なんだか別世界のようなだった。

それまで私の世界はルネシティが全てだったけど、突然見たことの無い人たちや見た事の無い建物を目の当たりにしてなんだか酷く混乱したのを覚えている。

世界は、広いのだ。この町の中にとそんなことさえ実感を持つて感じる事は少ない。

「ねえシズクちゃん」

「はい、なんですか？」

おばさんは相変わらず私を名前で呼んだ。

番号で呼び合っていない事を男達に知られたらどんな目に合わされるのかわからない。ちよつと怖かったけどしかし、名前で呼ばれるのはなんだか嬉しかった。

「おばさんはもうおばさんになっちゃったけど、シズクちゃんぐらいの歳の頃はとても毎日が長く感じたわ」

ランプの灯りの中で、おばさんは編み物をしながら話してくれた。

そうは言っても現役でこの年齢の私は毎日の長さを比べる指標が無

い。だけど、おばさんの言っていることは何となくわかるような気がした。

「一日の中で動き回っている時間は今の方が全然長いのにね。シズクちゃんぐらいの歳の頃は、笑っちゃうかもしれないけど私9時には寝ていたのよ。見たいテレビアニメが終わったら、そこで一日は終了。歯を磨いて布団に入って、夢を見ながら次の日を待つのに、ちよつと寝るの早すぎよねえと、おばさんは笑った。

「私はその頃コガネシティっていう町に住んでいたの。ジョウト地方ね」

私は相槌を打つ。コガネシティは随分発展した町だと、本で読んだことがある。

「結婚してからルネシティに越してきたの。最初はこんな刺激も何もない町で生きていけるのかしらと心配だったけど、今ではコガネシティに戻りたいとは思わないわ。父さんも母さんも、もういないし」

懐かしく思わないわけじゃないのだけどね、とおばさんは言った。なんだか自分の故郷が誉められているようで、私は少し嬉しかった。スズくんのお父さんと私のお父さんは、ポケモンのダイビングという技を使って外部からルネシティへ物資を運ぶ仕事をしていた。スズくんのお父さんは私達がまだ小さい頃に事故で死んでしまったと聞かされていたけど、とてもすごい使い手だったと聞いた事があった。

「コガネシティには何でもあつたけど、絶対に手に入らないものもあつた。例えばルネシティで見える星空。夜でも煌々と電気が点いているコガネシティでは絶対に見る事なんてできない」

私達はふと窓から星空を眺めた。いつもと変わらない夜空に星が瞬いている。そういえば以前本で読んだんだけど、あの星の光が十年何百年前に発せられたものだなんて、なんだかよくわからない。言っていることはわかるけど、全く実感が伴わなかった。

私達は星空をしばらく眺めていた。

「あら、もうこんな時間。ごめんね、そろそろ寝ましようか。…夜なんて特に短くなっちゃったみたい。小さい頃は夜がいつまでも続くような気がしていたけど、今では夜明けが来るのが随分早く感じるようになったわ」

おばさんがランプの灯を消し、明かりはわずかに差し込む月明かりだけになった。

「シズクちゃん、おやすみなさい」

「おやすみなさい、おばさん」

- 下山 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
コイキング(ギイ)
ユキメノコ(メメ)

- 下山 -

ロープウェイで登ってきた山を、今度はひたすら降りる。かなり急な斜面だったが、僕達は注意深く降りていった。

メメなんかはふよふよと浮いているから別に大変ではないのだろうが、僕とルークは足元に気をつけながら下山しなければならなかった。

言うが早いか、僕は飛び出している突起に足を取られてつんのめり、膝をすりむいてしまった。

「あいたた……」

”スズ、大丈夫？”

先行していたルークが戻ってきた。

「うん……なんとか」

”ロープウェイつかえばいいのに”

メメが残念そうに言った。メメはロープウェイが気に入っていたようで、下りも乗って帰るものだと思っていたらしい。

そうはいかない。あんな恐ろしい乗り物になど二度と乗るものか。アスナさんもロープウェイを勧めてくれたのだが、僕は修行のためですとか何とか言って強引に徒歩での下山を選んだのだ。

例え傷だらけになったとしても、この選択は後悔するものか。

もう一日ぐらいゆっくりしていったらどうだとアスナさんは言ってくれたが、さすがにそういうわけにはいかなかった。

もう一回ぐらいあの温泉に浸かりたかったというのも本音であったが、アスナさんも察してくれたのかそれ以上勧めようとはしなかった。

「まあ、別にこれでもう二度とフエンに来ないというわけでもあるまい。また全て片付いたら入りにくればいいよ。そうだ、スズこれを持っていけ」

アスナさんはそういうと、小さな布袋を僕に渡してくれた。

「これは…なんですか？」

僕は布袋を掲げてみた。

「それはフエンタウンに伝わる漢方薬だ」

「かんぽうやく？」

聞いたことのない響きだった。

「知らないか？まあ、薬のようなものだ。これは状態異常によく効く薬だ。なにかの役に立つだろうから、少ないがプレゼントだ。ただ…」

「ありがとうございます…え、ただ何です？」

にやりと笑ってアスナさんは言った。

「すごく苦い」

カバンの中の漢方薬を思い出した。

僕ももう薬が苦くて飲めないような年齢ではない。アスナさんも大袈裟にいったのだろう。

何はともあれ薬をもらえたのはありがたかった。

そうこうしているうちに山道を下りきり、ロープウェイのある麓まで戻ってきた。

「ええと…ハジツゲタウンには炎の抜け道を通るのか。ロープウェイのすぐ近くにあるみたいだけど…」

”スズあれじゃない？”

辺りを見回していたルークが指差す先には、洞窟の入り口のようなものが口を開けていた。

「うん、たぶんあれだ。そんなに大きな洞窟じゃないみたいだし、さっさと抜けちゃおう」

憎きロープウェイを横目に、僕達は炎の抜け道に足を踏み入れた。

・ 下山 ・ (後書き)

ぬのぶくろなのかほていなのか。

ほていがぬのぶくろなのかぬのぶくろがほていなのか。

- ほのお - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
コイキング(ギイ)
ユキメノコ(メメ)

- ほのお -

炎の抜け道に足を踏み入れるなり、猛烈な熱気を感じた。

「うわ…なんだこの暑さ」

洞窟の中には熱気が閉じ込められているようだった。

吸い込む空気が熱く、汗がじわりと滲み出してくる。

火山の影響だろうか、あちらこちらでボコボコと泡のようなものが湧いては消えていた。

「みんな大丈夫？」

” あつい…”

氷タイプのメメには余計に堪えるのだろうか、相当にきつそうだった。

” 僕もちよつと…早く抜けちゃおう、スズ”

僕達は言葉少なに、洞窟を進んだ。

薄暗くてはつきりとわからないが、地面が砂地なのだろうか。足をとられてしまい、進むのに余計に体力を使う。

そうしてどのくらい進んだだろうか。洞窟の明るさが増したように感じた。

「出口が近いのかな…」

思わず足早になった僕達に、ふいに声が聞こえた。

「やっときたわね。この洞窟、暑くて参ったわよ」

声が聞こえた途端、周囲の温度が一際上がったような気がした。

洞窟の角を曲がったとき、光の差し込む出口が見えた。

出口と共に、そこに立ちはだかる人影も。

もう洞窟内の暗さに目が慣れていたため、はつきりわかる。女は灰色の服を着ていた。

「あなたは…」

聞かなくてもわかっていたが、思わず口に出してしまった。

「聞かなくてももうわかってるでしょ。あんたを捕まえにきましたあ」

んふふ、と女は笑った。

僕達は身構えて距離を取った。出口まではあと少しの距離だったが、女が立ちふさがっている以上素通りできる訳はなかった。

「くそつ、やるしかない…」

「あら、随分好戦的なコね。話とちよつと違うじゃない。それとも洞窟の暑さで参ってるのかしら？まあ逃げられるより面倒がなくていいわ…シャンデラ、おいでっ！」

女が手をかざすと、洞窟の天井から何かが降下してきた。

なんだか洞窟の温度がさらに上昇したような気がする。

”スズ、あいつのポケモン…！”

僕は無言で頷いた。暑さで出たものとは違う、嫌な汗が頬を伝う。

「間違いない、炎タイプだ」

”あつい…”

メメが呟いた。

- 炎の抜け道の戦い - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ（ルーク）
コイキング（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

- 炎の抜け道の戦い -

「ほらほら、ぼーっとしてると火傷しちゃうわよ！」

シャンデラと呼ばれたポケモンは炎を纏い、こちらに向けて放射してきた。

標的になったのはメメだ。

”メメ！”

暑さで朦朧としていたメメを、ルークが横っ飛びにさらう。

”みんな下がって、僕がやる！”

ルークが飛び出していった。

まずい。炎タイプはまずい。

くそっ、アスナさんに忠告されたばかりだったのに！

悔やんでいても仕方なかった。

「ルーク、近付くのは危険だ！波導弾で遠くから…」

”だめだよ、スズ”

頭の中で声が聞こえる。

”あいつ多分ゴーストだ。波導弾じゃ炎はかき消せてもダメージを与える事はできない。それにアイツの火力、尋常じゃない。今の僕の力じゃきつと打ち負ける”

シャンデラの炎を紙一重でかわし、ルークが洞窟の地面に拳を叩き付けた。砂煙が舞い上がって目くらましとなり、薄暗い洞窟の中でルークの姿が隠される。

「小賢しいわね…シャンデラ、オーバーヒート！」

シャンデラを包んでいた炎が一気に膨れ上がり、目前まで迫っていたルークを襲った。直撃こそかわしたものの、その炎は片腕を包んだ。

”…っうつっ！”

ルークが右腕を押さえて歩みを止めてしまう。

「シャンデラ、押し戻してあげなさいな」

以前メメやゴルーグが使っていた黒色の球体を生成し、ルークにぶつけた。

”……！！”

かわす事のできなかったルークはそれを正面から受け止めた。

”ぐううう……ああっ！”

ルークがそれをかき消す頃には、こちらまで押し戻されてしまっていた。

「ルーク！」

”スズ…あいつの力…半端じゃ……”

ルークの肩が苦しそうに上下している。

「ほらほら、休んでる場合じゃないわよ！」

シャンデラの炎が再びこちらに向けて放たれた。

”くそっ……！”

ルークが両掌で球体をつくり、波導弾を放つ。シャンデラの炎と空中でぶつかり、双方のエネルギーは消滅した。

「んゝ、さすがにオーバーヒートは消耗が激しいわねえ…まあいいわ。あんたのポケモン、もう息も絶え絶えって感じだし」

波導弾を放ったルークは、膝から崩れ落ちてしまった。

見ると、炎に包まれた右腕が酷い火傷を負っていた。

「これでとどめよ！」

シャンデラが再びシャドーボールを生成し、ルークに向けて打ち出した。

”……！”

「ルーク！」

と、横から飛んできたもう一つの黒球がシャンデラのそれに当たり、軌道を逸らした。

もう一つのシャドーボールが飛んできた方を見ると、メメがゼエゼエと苦しそうにしていた。

”スズ、ルーク…だいじょうぶ……？”

「メメ！」

僕はメメに駆け寄った。洞窟内の高温のせい、メメも随分と消耗しているようだった。

「ああんもう、面倒臭いわね！あんたたち歯ごたえなさすぎ。それでよく他の奴らを退けられたものだわ…もう飽きちゃったから、まとめて終わりにしてあげる。なるべく生かして連れ帰るようについて言われてたけど、まあ不幸な事故よね…うふふ」

打つ手がない。シャンデラの火力は圧倒的だった。

僕はルークたちを庇うように前に立った。

”スズ！”

「ごめんな。僕の力が及ばないせいで…」

”スズ、だめ”

「あんた、バカじゃないの？人間がポケモン庇ってどうすんのよ。生身でシャンデラの炎受けたらどうなると思ってるの？こいつの炎は魂まで燃やし尽くすわよ」

「…」

「ふふ、まあいいわ。死体はしっかり処理してあげるから安心なさいな。じゃあね、まあここまでよくがんばったわよ」

シャンデラが再び業火を纏い始め、僕は思わず目をつぶった。

”…るな”

「…ん？」

聞き覚えのない声が頭の中に聞こえた気がした。

”メメ姉ちゃんにひどいことすんな！”

今度ははっきりと聞こえた。

思わず後ろを振り向くと、メメの腕の中のギイが激しい光を発していた。

- 炎の抜け道の戦い - (後書き)

ランダムマッチ1000勝達成しました。
トレーナーカードがかつこよくなった…！

- オーバーヒート - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ（ルーク）
コイキング（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

- オーバーヒート -

一瞬だった。

巨大な竜の胴体が僕達を守るように巻きつき、シャンデラの炎を受け止めていた。

シャンデラの炎を受け流し、直後に鼓膜をつんざくような咆哮が洞窟内に響いた。

この鳴き声はルネシティで聞いたことがあった。あの時は絶望を感じたが、今はなんと力強く響く事か。

ギャラドスの威嚇の咆哮。そうか、ギイがギャラドスに…。

「ギ、ギャラドス…嘘でしょ!？」

”…………”

メメが目を丸くしてギイを見上げていた。

改めて見ると、やはりギャラドスは大きい。ギイだとわかっていても、たじろいしてしまう迫力があつた。

”スズ、あいつが戸惑ってるうちに片をつけるぞ。おいらはまだこの姿になつたばかりで、大した事はできないんだ”

ギイの声が頭に響く。

「わかった。ルーク、メメ、もうひと踏ん張り力をかしてくれ!」

ルークが力を振り絞り立ち上がる。

「くつ、冗談じゃないわよ…! シャンデラ! オーバーヒート!」

シャンデラが再び業火を纏い、一気に爆発させた。

「二人ともっ!」

”メメ、いくぞっ!”

”うん!”

メメとルークが最後の力を振り絞り、エネルギーを放った。

ルークの掌から放たれた波導弾が襲い来るシャンデラの炎とぶつかり、それを相殺する。無防備となつたシャンデラに、メメの放った漆黒のシャドーボールが直撃した。

シャンデラに灯っていた炎が急激に弱くなっていくのが目に見えてわかる。

「シャンデラ！シャンデラ！……くそっ、こんなやつらにっ！」

灰色は地面に倒れているシャンデラをモンスターボールに戻すと、一目散に洞窟の外に走り去っていた。

「か、勝った…勝ったよみんな…」

「なん…と…か…」

苦しそうにルークは笑うと、その場に倒れてしまった。

「ルーク！…急いで洞窟を抜けよう。ハジツゲタウンまでもうひとふんばり…あ、あれ…なんかおかしい…」

目の前がなんだか歪んで見える。気がついたら僕は地面に倒れていた。

「なんだ…これ…もうちょっとで出口…う」

「…ズ！…！」

「…た…」

ルークが意識を失いかけているからだろうか、メメたちの声が途切れ途切れになって聞こえてきた。

くそ、どうしたんだ。早くハジツゲタウンに行かないといけないのに…

思いとは裏腹に、僕の意識は急激に失われていった。

- オーバーヒート - (後書き)

3 対1 は卑怯とか言わないように
↑

- On the other hand 4 - (前書き)

8 番 : ノリ

2 3 番 : シズク

「23番：このままじゃ駄目だと思うんだ」

いつもの円形広場で私達は話していた。

「8くん：それどういうこと？」

番号で呼び合うのも何だか慣れてきたような気がする。少しも嬉しくはないけれど。

「このまま黙って過ごしていても事態は何一つ良くはならないだろうって事だよ」

「だけど………そんなのわからないよ」

「そうか？23番：この事態の結末はどうなると思う？」

私は少し考えていたが、ノリくんが続けた。

「有りうるレベルで最も楽観的なパターンは：そうだな、あいつらは目的達成できず、いやーすいませんとか言って素直にこの町を出て行くことかな」

私は想像してみた。ノリくんは続ける。

「最も悲観的なパターンは：あいつらは当初の目的を達成。用済みとなった俺達を虐殺。あいつらが引き上げた後にはルネシティには誰もいなくなるって感じが。まだ生ぬるいかな…」

「…やめて」

どちらかというと後者の方が想像しやすいような気がして、私は思わず身震いした。

「23番、俺達は当事者だ。このまま待っていても何も解決はしない。解決したとしても、それを時間に任せていたらどんな形になっても文句は言えないんだぜ」

「でも…でも…」

「ルネシティは平和過ぎたんだ。この町には暴力の影が余りに薄い。もちろんそれはいい事だと思うけど、こんな事態になってしまったら話は別だ。みんな自分がまさか死ぬはずないと思ってる。こうで

あつてほしいという楽観的な考えに流されていく。今思えば、あいつらが攻めてきた時ミクリさんだけが今の状況を懸念していたんだ」「でも…今私達は生かされているじゃない？ルネシティは大して大きな町じゃないけど、こんな風に統治しているぐらいなんだから私達の存在は邪魔なはずでしょう？いつそ殺してしまうほうが楽なはずなのに…」

うーんとノリくんは唸った。

「そうなんだよな…あいつらもさすがに大量殺人には抵抗があるのか、あるいはもっと別の理由があるのか…」

できれば前者であつてほしいけどなど、ノリくんは肩をすくめた。

「23番のマリルはどうしてる？」

「マリちゃん…昼間は湖に隠れているように言つてあるよ」

町の人々のポケモンは灰色達が町を占拠したときに取り上げられてしまつていたが、私はこっそりマリルを湖に逃がす事ができた。町の唯一の出入り口である湖にも灰色達が見張りに立つているので昼間は会うことが出来ないが、夜の闇にまぎれてだったらこっそりと会う事ができた。

ポケモンを逃がされたのではなく取り上げられたという事は、いずれ返してくれるということだろうと以前ノリくんに言つてみたのだけど、そういう希望をぶら下げて見せているだけかもしれないとバツサリ切られた。絶望と希望を程よくブレンドして見せて、私達を大人しくさせておきたいだけだろう、と。

言われてみると、全くその通りな気もした（事実私は指摘されたとおりの感情を持っていたのだから）。それに、もしかしたら逃がしたポケモンが持ち主の下に帰ってきてしまつのを懸念しての事かもしれない。

「うーん…どうにかして…」

ノリくんは何やら考え込んでいるようだった。

- ハジツゲタウン - (前書き)

主人公^{スズ}の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

- ハジツゲタウン -

「ぎゃ、ギャラドスだ！なんでこんな山奥の町に…！」

「うわっはっは、大丈夫じゃ！ワシとライボルトに任せろ！ライボルト、10万ボルト……ん？あれは……」

「う、うーん……」

僕は目を覚ました。

……目を覚ました？僕は眠ってたんだっけ？
ここは……

「ああっ、目を覚ました！よかった……」

白衣の男の人が僕を見下ろしていた。

なんだか前にも似たようなことがあったような気がするなあと思いながら、僕はゆっくりと起き上がった。どうやらベッドに寝ていたようだった。

確か僕は炎の抜け道で……倒れて……倒れて……

「ここは……どこですか？……みんなは！？」

「ここはハジツゲタウンだよ。君達は町の入り口で倒れていたんだ。私とテッセンさんとで君を運んできたんだ」

ふと隣を見ると、ベッドでルークが寝ていた。

ん……テッセンさん……テッセンさん！

「あの、あの、テッセンさんは……！テッセンさんはここにいてるんですか……？」

僕の突然の剣幕に白衣の男性は驚いたように言った。

「少し落ち着きなさい、テッセンさんなら……あ、帰ってきたみたいだ」

「おう、小僧が起きたか。うわっはっは、小僧、大丈夫じゃったか

？」

豪快な笑い声と共に玄関のドアが開き、初老の男性が入ってきた。

「どこかで見た顔じゃと思ったが、そうかキンセツシティで感電させてしまった小僧じゃったか。いや、申し訳ないことをしたのう」

「いえ、あれは……仕方ないです……」

あの時の電撃を思い出して少し身震いした。テッセンさんの隣に座っているライボルトというポケモンが放った電撃らしい。立派な黄金色の鬘をしていた。

「申し遅れました、僕はスズといいます。あっちのベッドで寝ているのはルカリオのルークです」

「ワシはテッセン。こっちはソライシ博士じゃ」

よろしく、と白衣の男性は微笑んだ。

「あの……僕はどうしてここに……」

「小僧とルークは町の入り口で倒れておったんじゃよ。ギャラドスとユキメノコが引きづるようにして小僧達を運んできておった。最初は君らの事が見えんかったから、ギャラドスが現れたと思って町はパニックになりかけたわい」

うわっはっはとテッセンさんは笑った。豪快に笑う人だ。

「もしかして随分長い事炎の抜け道にいたんじゃないか？あそこは火山ガスが発生してるから普通に取っぬけるぐらいだったら問題ないけど、長時間洞窟内にいるとちよつと危ないんだよ」

そうだったのか。戦いに必死で全然気がつかなかった。

「ルークは……ルークは大丈夫ですか？怪我は……それに他のみんなは……」

「ああ、ルーク君は右腕を火傷していたようだったから、手当てしておいたよ。しばらく休めば大丈夫だと思う。ギャラドスはさすがに町の人が不安そうにしていたから、ボールに戻ってもらってる」

「あ……ありがとうございます……ソライシ博士」

僕はホッとしてお礼を言った。

「困ったときはお互い様じゃよ。して小僧、ワシに何か用事があったんじゃないのか？」

テッセンさんから話を振ってきてくれた。

「はい…実は…」

僕はルネシティに起ったことを話し始めた。

- 炎呪 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
ギャラドス(ギイ)
ユキメノコ(メメ)

- 炎呪 -

外の空気を吸いにソライシ博士の家から出ると、メメが飛びついてきた。

しゃくつ、と足が地面にめり込む音がする。この辺りもずいぶんと火山灰が堆積しているようだ。

空はぼんやりと曇っていた。

”……………！”

「メメ！大丈夫だったか？」

”……………？”

「あ…そうか。ルークが寝てるから、メメとも話せないのか」

今までルークを介して当然のように意思疎通していたから、なんだか妙な感じがした。

しかしそれでも、メメが何を言っているのか何となく感じる事ができた。

「うん、僕は大丈夫。ルークも手当てしてもらって今は寝てる」

”……………”

「テッセンさんにも話を聞いてもらえたよ。すぐにキンセツシティに向かつてくれた。アスナさんと合流してくれるって」

あのミクリが…とテッセンさんは最初は半信半疑だったようだが、最後まで黙って聞いてくれた。

”……………”

「メメも大変だったでしょ、炎の抜け道。ただでさえ暑かったのに、あんな敵まで出てきちゃって…」

今思えばよく勝てたものだ。ギイが進化してくれなかったら、手の打ち様がなかった。

”……………から”

「えっ」

” ギイもがんばってくれたから ”

突然メメの声が聞こえてきた。

ルークが目覚めたのだろうか。

「ギイもがんばってくれたもんな。そういえばまだギイとはちゃんと話してなかった。後でゆっくり話そう」

” うん。メメも…”

そういえば、メメはコイキングのギイを溺愛していたけど、進化した今の姿はどうなのだろうか。

そのあたりの事も聞いてみよう。

そんな事を思いながら、僕はソライシ博士の家のドアを開けた。

ルークはベッドの上で上半身だけ起こしていた。

「ルーク、大丈夫？」

” スズ…”

「スズ君…それが…」

ソライシ博士が深刻そうな顔をしていた。

「博士…どうしたんですか？」

僕はなんだか嫌な予感がした。部屋を出たときよりも、なんだか空気が重くなったような気がする。

” 腕が…右腕が動かないんだ…”

「右腕…え？」

「スズ君。この火傷…誰にやられた？」

「博士…ええと、シャンデラというポケモンと戦って、火傷を負いました。あの、それが…？」

ソライシ博士は静かにルークの包帯を解いた。

ルークの右腕が露になっていくにつれ、僕は息を呑んだ。

美しい青い毛並みのルークの右腕に、まるで蛇が巻き付いているように黒い紋様が刻み込まれていた。

それがただの火傷ではないことは、一目見れば明らかだった。

「治療をしたときはこんなになつていなかったから気がつかなかったんだが…シャンデラの炎は普通の炎じゃないんだ。対象の肉体だけではなくて、魂にまで作用する」

「…こいつの炎は魂まで燃やし尽くすわよ…灰色が言っていた言葉が頭によみがえった。あのセリフがただの脅し文句などではなかったとしたら…」

「な…なおるんですよね？」

「…少なくとも私の知識には無い。調べてみるから少し時間をくれないか」

僕は体から血の気が引いていくのを感じた。

”スズ…ごめん…僕のせいで足止めしちゃ”

「謝る事なんてない！」

思わず大きな声で叫んでしまった。

- ここまでの裏設定的なもの - (前書き)

です。読まなくても全然物語に影響ないです。
ここまでのネタバレ含みます。

- ここまでの裏設定的なもの -

●スズ、ノリ、シズクは大体中学生くらいのイメージです。ゲームのグラフィックを見ると随分幼く見えますが、気にしない気にしない。あんまりキャラの外見的特徴を描写していないので、好きに想像してください。別に描写がめんどくさいわけではありません

●ノリはシズクが好き。シズクはスズが好き。スズはなんにも気づいてない。

●スズがルネシティにいた頃に全然ポケモン釣れなかったのは灰色達がルネシティ制圧の準備として水中の調査なんかをしていたため、水の中のポケモンがあまりルネ近海に寄り付かなくなっていたから。特別釣りスキルが無いわけではないが、本人は無いと思ってる。

●10話でシロナさんがスズに提示したモンスターボールの中身は、
- リオル・フカマル・ロゼリア - でした。

●このシロナさんはまだシンオウリーグ制覇する前です。

●スズは警察行けよって話ですが、ポケモン世界の警察の立ち位置がよくわからなかったので警察は出さない展開にしました（話終わっちゃうし↑）。国際警察とかあるみたいですが、実態よくわからないですし。あと、基本ゲーム準拠なのでジュンサーさんとかは出ません。

●読者様の好きなポケモンが例えば敵として登場して不愉快な思いを抱かせるしまうこともあるかもしれませんが、その種族全体を悪としてとらえているわけではありません。ご了承ください。作者が

憎んでいるのは雨ふらしニヨロトノぐらいなもんです。 永続雨だめ
だお…

- ここまでの裏設定的なもの - (後書き)

夕方ぐらいに次話投稿しまう

- 揺れる草むら - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

- 揺れる草むら -

ソライシ博士が治療法を調べてくれているあいだ、僕達は町から少し離れた114番道路の草むらで仲間達と話し合っていた。町中でギヤラドスを出したらパニックが起こってしまう。

以前ギヤラドスの恐怖を身をもって感じている身としては仕方のないことかもしれないと思った。

ギイに危険は無いとはいえ、多くの人にとってやはりギヤラドスは恐怖の象徴なのだ。

「ギイとはまともに話すの初めてだよね」

「おう、そうだなスズ。よろしくな！」

「よろしく。でも驚いたよ、随分大きくなっちゃって…」

「メメねえちゃんが危ないと思ったたら、なんだか力が湧いてきてさ。気がついたらでかくなってたよ。おいらが進化しなかったら危いところだったろ？スズももつとしっかりしろよ、あんまりメメねえちゃん危ない目に遭わせたら許さないからな！」

「ご、ごめんなさい…気を付けます…」

ダメ出しされてしまった。

口調は少し幼かったが、やはりギヤラドスの姿で言われると迫力がある。

「ギイ…すごくかつこうよくなった」

「ありがとねえちゃん。今まではオイラの事守ってくれてたから、今度はオイラがねえちゃん守るから！」

「ありがとう。ギイとつてもつよそう」

メメはどうやらこの姿になったギイのことも弟の様に思っているように、僕はなんだか少し安心した。

「それで、ルークは大丈夫なのか？」

「うん、それなんだけど…」

「なんだか波導の力が上手く流れていかないんだ。まるで自分の腕じゃないみたいだよ…」

ルークは苦虫を噛み潰したような顔で、自らの右腕を見ていた。もしかしたら今も右腕を動かそうと試みているのかもしれない。

不幸中の幸いというわけではないが、ルークは右腕が動かないという事以外は大きな怪我は無いようだった。僕はソライシ博士から聞いた現状を説明した。

「みんなごめん…僕のせいで…」

「何言ってるんだよ！ルークがいなかったらここまで来ることだってできなかったろ。そんなふうに思ってるやつなんていないよ！ねえ、メメねえちゃん」

「うん」

「今ソライシ博士が治す方法を調べてくれているんだ…だからきつとすぐによくなるよ！」

「助けて！」

突然頭の中に声が響いた。思わず僕は身構える。

ガサガサとふいに草むらが揺れ、一匹のポケモンが飛び出してきた。青い体に綿毛の様な翼が翼が生えている。これは…確かチルットというポケモンだっただろうか。

「ど、どうしたの？誰かに追いかけてるの？」

チルットの声があまりに緊迫していたので、僕は多少緊張して問いかけた。

「兄ちゃんを助けて！」

そう言っと、チルットは再び草むらに飛び込んでいってしまった。

「助けてだって…。さっきの感じだと相当切羽詰っているようだったけど…後を追いかけてみようか…」

ルーク達も無言で頷いた。

僕はチルツトの消えた草むらに飛び込み、チルツトが掻き分けたと見られる後を進んだ。

しばらく進むとふいに草むらが途切れ、大きな岩が姿を現した。岩によりかかるようにして、何かが荒い息をついている。

”チー…何処に行っていた。あんまり出歩くなと…誰だ！”
鋭い声が飛んだ。

声の主は壁に寄りかかるようにして座り、荒く息をしている。白い毛並みは出血で赤く染まっていた。

このポケモンは確か、ザングース。

- 血まみれザンゲース - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

野生のザンゲース(ザック)

野生のチルット(チー)

- 血まみれザングース -

”…俺の言葉がわかるのか？とつとここから消えろ、人間！”

ザングースは荒い息を吐きながら言った。

”違うの兄ちゃん！チーがこの人たち呼んできたの！”

”なんだと…余計な事を…”

”だってザック兄ちゃん、血が止まらない！”

ザングースの体は血に染まっていた。ザングースは強気な言葉とは裏腹に、随分と衰弱しているように見える。

「と、とにかく手当てさせてくれないかな？絶対君達に危害は加えないから…」

”人間の言う事なんざ信用できるか…な、なんだ！くそつ、話せ！”
ザングースは暴れたが、その抵抗には力が無かった。

ルークがザングースを担ぎ上げ、僕達は足早にハジツゲタウンへの帰路についた。

「おおスズ！シャンデラの呪いを解く方法がわかったぞ！…って、なんだそのザングース、血だらけじゃないか！」

ルークが担いでいるザングースを見て、ソライシ博士は驚きの声をあげた。

「あの、すみません、治療をお願いしても…」

「…わかったよ、任せてくれ」

俺は医者じゃないんだがなあなんてため息をつきながらも、博士はザングースの治療を始めてくれた。

「出血は…胸の傷からか？しかし傷の割りに出血が多いな…」

”ザック兄ちゃんは毒蛇の奴らにやられたんだ！すごく大きい毒蛇に！”

チーが泣き叫んでいる。

「博士…どうやら毒蛇にやられたようなのですが…」

ハブネークとザングースの話は以前に本で読んだことがあり、印象に残っていた。二つの種族は互いに憎しみあい、争っているのだと「毒蛇？ハブネークの事か。では傷のわりに出血が激しいのは毒に侵されているということか。…しかしちょっと待てよ…なぜこのザングースは毒に侵されているんだ？ザングースはハブネークの毒に對して免疫があるはずなのに…」

うーんと博士は唸った。

「こうして毒に犯されたザングースがいるということがその事実を証明しているわけだが…しかしそれが事実だとすればあまりよろしくないな…完全に種族間のパワーバランスが崩れてしまう…」

ソライシ博士はブツブツと呟きだした。

「は、博士？」

博士はハッと我に返ったようだった。

「あ、悪い、職業病かな。しかし、そうなるとまずいな。この町にもハブネークの毒に對する解毒剤はあるにはあるけど、あくまで既存の毒に對する解毒剤だからな。このザングースが受けた毒にそれが効くとは思えない…」

解毒剤…薬………そういえば。

「あの…博士。フエントウンで貰った漢方薬があるのですが…」

僕は思い出して言った。アスナさんがくれた、とても苦いという漢方薬。

「漢方薬か…俺はこの分野が専門ではないから、新しい抗体を作り出す事はすぐにはできない。今はそれに賭けるしかないか…」

僕はザングースに漢方薬を飲ませた。

口に流し込むと、ザングースの顔が歪んだ。やはり相当苦いのだろうか。自分で飲むハメにならなくてよかったと、僕は不謹慎な心配をした。

「効くんでしょうか…」

「なにぶん未知の毒だ。しかし、元々ザングースは毒に対する抵抗力は高いし、漢方というのは自然治癒力を高める効果があるからな。ザックの体力に賭けてみるしかない」

ベッドの横で、チーが心配そうにザックを覗き込んでいた。

- ザックの話 1 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

野生のザンゲース（ザック）

野生のチルット（チー）

- ザックの話 1 -

午前零時を過ぎる頃になると、ザックの呼吸は安定し始めた。耳を近付けてみると、どうやら穏やかな寝息をたてているようだ。チーが一晩中看病すると言って聞かないので、僕は交代でチーとザックに付き添うようにした。万が一様態が急変しては大変だからだ。

僕はメメと交代し、ぼんやりと外が明るくなってきた頃ベッドに入った。

「ズ…………スズ、起きろ…寝起きの悪い奴だな。おい、スズ！」
ソライシ博士に体を揺さぶられて、僕は目を覚ました。

「はかせ…おはようございます」

「ああ、おはよう。ザックが目覚めたぞ」

「！本当ですか！」

「ああ本当だ。早くお前も来い」

”…世話をかけたな”

午後の日差しが差し込む部屋の中で、ザックはベッドに横たわり上半身だけ起こしていた。

ザックの膝の上ではチーがスヤスヤと寝息を立てていた。

「いや…僕達が勝手にやったことだから」

”しかし驚いたものだ。俺達の言葉を理解する人間は初めてだ”

「いや、それはルークのおかげなんだ。波導っていう力らしいんだけど…」

”波導そのものの力というか、波導を操る技術を応用しているんだ。僕も独学で学んだだけだから、うまく説明できないんだけど…”

”とにかく悪かったな。この恩は俺が生きていたら返させてもらう

ぞ、人間”

「生きてたらって…もう毒は大丈夫なんじゃ…？」

”毒は大丈夫だ。まだ少し体内に違和感があるが、この程度なら差し支えないだろう。俺が言ったのは、毒蛇の連中との決着の事だ”

「決着って…じゃあその体で戦いに行くつもり！？」

ああそうだと、ザックは僕の目をまっすぐみて言った。

”俺達の一族はこの辺りを住処にしていたんだ。俺達のはるか昔から毒蛇の奴らと戦い続けている。それこそ戦いのきつかけなんか分からなくなってしまうぐらい昔からだ。実力はほぼ拮抗していて、どちらかが決定的に有利になる状況というのは今まで決して訪れる事はなかった”

ハブネークとザングースが争い続けている事は知っていたが、何故争いあっているのかは知らなかった。まさか当事者達もそれを知らないという事実には、僕はかなり驚いた。

”それが少し前から、ハブネークの奴らに変化があった。巨大な奴が現れたんだ。姿かたち事態に変化があったわけじゃないから、あれは進化ではないと思う。そいつが現れてから、俺達の力関係は一気に崩れたんだ。仲間はほとんどやられてしまった”

「ふむ…それはあまりよろしくないな…。完全に生態系が崩れてしまっている。ハブネークが進化するなんて話は聞いたことないから、突然変異体なのか…。いやそれにしあって、一種族を壊滅に追い込むほどの変異が短期間で起こるものなのだろうか…人為的な変異原が？いや、それにしあって…」

博士はなにやらブツブツと呟きだしてしまった。

”続けて構わないか？”

ザックが僕を見て言った。

- ザックの話 2 - (前書き)

ザック…東の集落のザングース。

チー…チルット。ザックの妹。

オズ…西の集落のザングース。ザックの親友。

- ザックの話 2 -

春を告げる風と共に、ザングースの集落はにわかに活気付く。多くの命が芽吹くこの季節。健康と武運を大地と海の神に祈る、年に一度の祭りが行なわれるのだ。

ザングースはそれほど個体が多い種族ではない。長きに渡って続いているハブネークとの争いの中で、その数は増えすぎる事も無く減りすぎる事も無く、絶妙なバランスを保っていた。

「ザック、今年はお前が東の代表に選出されると思うぞ。先代ももうピークは過ぎただろうし、去年も結果は残せなかったしな」

西の集落の代表に選出されたオズは、ザックの肩を叩いてにっかりと笑った。

「どうだかな…それに、俺にそんな大役が務まるかどうか。何も考えずにハブネークの奴らと戦ってるほうがよっぽど楽だ」

「まあ、そういうな。季節は巡り、命あるものは盛衰を繰り返す。実際東の集落が存続し続けられているのはお前の力あってこそだし、じゃあ俺は西に戻るぜ。また武祭で会おうや」

「ああ。じゃあな」

ザックは夕暮の中、自らの拠点がある東の集落まで戻った。

集落に戻ると、捕まえた獲物を保存庫に貯蔵し、自分の家に戻る。「おかえり兄ちゃん！」

洞穴に戻ると、彼の妹であるチーがパタパタと飛びついてきた。

「ただいま、チー」

チーは嬉しそうにザックの頭に飛び乗った。

ザックは妹のチーと二人で暮らしていた。と言っても、チーはザングースではない。チルットという種族だ。

数年前、群れからはぐれたと思いきまだ赤子だったチルットを偶然ザックが見つけ、それ以来二人は同居していた。

最初の内こそチーの存在を面倒だと感じていたザックだったが、次

第に彼女の存在は大切なものへと変わっていった。

「オズと会ってきた。あいつも武祭の準備で大変そうだったよ」

「今年は兄ちゃん達戦うの？」

武祭では各集落の強者が集い、種族内で一番強いものを決める祭りが開かれるのだ。

今年は東の集落からはザックが出場する事がほぼ決定していた。

ザックは東の英雄と呼ばれ、広く知られていた。この東の集落を切り開く際、近辺に拠点を持っていたハブネーク達との流血戦に大きく貢献し、勝利を導いた事からその称号を与えられたのだ。

「兄ちゃんすごいなあ。チーも一生懸命応援するから！」

「ああ……」

ザングースの集落は、距離を隔てて東西南北の四つに分かれていた。本来一つの大きな集落だったのだが、ハブネーク達の奇襲で全滅してしまう事を懸念し、集落を分けたのだ。大元の集落は南で、最初は北。次に西。ザックのいる東の集落は新たに作られたばかりで、未だ発展途上だった。

戦力を分散させることを懸念する声もあったが、万全の警備体制を敷き、各拠点間の連絡を密に取る事によって次第に各集落は発展していった。

- ザックの話 3 - (前書き)

ザック…東の集落のザングース。東の英雄と呼ばれる。
チー…チルット。ザックの妹。
オズ…西の集落のザングース。ザックの親友。

- ザックの話 3 -

ザックは、ふと考える時があった。

ザングースとハブネークは、そもそも何故争いあっているのだろうか。

仲間に問いかけてみたこともあるのだが、ザックが求めている答えを聞いたことはなかった。

というか、そもそもそんな事を考えた事がある者がいなかった。

問いかけられた仲間達は一瞬きよんとしてから、口々にこう言った。

「我々は大昔から争いあってきたのだ。汚らしい毒蛇の奴らと同じ大地に生きていくことなどできん！」

「俺の親父はハブネークの奴らに殺されたんだ。許す事などできるものか！」

それぞれが争いあう理由にはなるだろうがしかし、争いの根源的な理由を知っている者は集落の長を含め、誰一人としていなかった。

ザック自身、これまで多くのハブネークの命をその鋭い爪で引き裂いてきたし、それにためらいを覚えるわけではない。戦いの中でそんな考えがよぎるようなら、ザックは東の英雄などと呼ばれることはなかったであろう。

しかし、戦いを終えてふと血だまりの中で我に返ったとき、どうしようもない虚しさのような感覚を覚える事があった。

俺達は何故憎しみあっているのだろうか。毒蛇どもはその答えを知っているのだろうか。

「なあオズ。お前は…」

「うん？」

「…いや、なんでもない。武祭の準備は順調か？」

南の集落にいた頃は共にすごしていた事もある親友のオズに、兼ねてからの疑問を投げかけてみようかと思ったが、なんとなく思いとどまったザックは代わりになんでもない世間話を持ちかけた。

「ああ、うちの集落は順調だよ。俺はプレッシャー感じてるけどな。西が優勝した事はここ最近ではないからな。みんなフラストレーションが溜まつてるのさ……」

「はは、それはプレッシャーだな。東は結局俺が出る事になったよ。お手柔らかに頼む」

「そりゃこっちのセリフだよ、東の英雄……」

オズはため息をついた。

「北と南の集落はどうだ？」

「北には去年優勝したレンがいるからな……さらに腕を上げたとも聞く。今年もアイツが出てくるのは間違いないだろうな。南はどうだろう……：そういうば、昨日南からの定期連絡が来るはずだったんだけど、珍しく来ていないんだよ。忘れてるのかな？」

オズが思い出したように言った。

「今年の武祭は南の仕切りだったよな。準備で忙しいのか？大元の集落が情けない話だ。そんなところに負けるわけにはいかないな」

何気ない会話であつたが、おかしいと感じるべきだった。

各集落間の定期連絡が途絶えた事は、集落を分割してから一度もなかった。

そんな事を考えもせず、ザックとオズは別れた。

- ザックの話 4 - (前書き)

ザック…東の集落のザングース。東の英雄と呼ばれる。
チー…チルット。ザックの妹。
オズ…西の集落のザングース。ザックの親友。

- ザツクの話 4 -

何か様子がおかしい。

同じ道を歩いているのに、何かが違う。胸騒ぎのような感覚に襲われていた。

ふと地面に視線を落としたザツクは、何かを引きずったような奇妙な痕跡を見つけた。

「これは……毒蛇のやつらの這った跡？なぜこんな集落の近くに……」
周囲への警戒を強めながら、ザツクは集落に向かって歩調を速めた。

「ばかな……」

集落に戻ったザツクが見たものは、毒蛇達に蹂躪された見るも無残な集落の姿だった。

「みんな！無事か！」

あちらこちらに鮮血が散っている。明らかに助からないであろう姿を晒している者も至る所に倒れていた。

「おい、しつかりしろ！」

ザツクは倒れている仲間を抱き起こした。その体は異様に重たく感じた。

「おい……おい……しつかりしてくれ……」

「ザツク……毒蛇の奴ら……が……」

「！……おい、あまりしゃべるな」

ゴホッと、抱き起こした同胞は血を吐いた。

「……に気をつける……俺達の抗体が……きかな……」
腕の中にあつた命の灯は消えてしまった。

「くそっ……そうだ、チーは！」

自らのねぐらとするほら穴にたどり着くと、近くに倒れていた同胞を助け起こした。

「おい、大丈夫か！」

「ああ…ザック…全く、いいタイミングで 留守に してやが
って…」

へっへと、同胞は笑う。呼吸は激しかった。

「…っ！チーを知らないか！」

「チー ちゃんは、あいつ らが連れて行ったよ。東の英雄の妹分
って事を知 っていたんだろうな…はやく…おい かけてやれ…」

「…すまん！」

「ああ…ザック…」

「なんだ」

「あいつらぶつ殺してくれ…俺達の…を……………」

「わかつてる！一匹残らず引き裂いてやる！」

「頼んだぜ…東の英雄…」

毒蛇の這った跡を追いかけて、殺意を漲らせてザックは走った。

数十匹ほどの毒蛇たちの群れにはすぐに追いついた。

「チー！」

「兄ちゃん！」

全身の体毛が逆立つ。鋭利な爪が飛び出す。

ザックは怒りに任せ、毒蛇たちをなぎ払っていった。

チーを解放し、毒蛇の群れと向かい合う。

「チー、無事か！」

「兄ちゃん…兄ちゃん…！」

チーは泣きながらザックにしがみついた。

「…お前、東の英雄か」

ザックはギョツとして声のしたほうを見た。

「なに…貴様、どうして俺達の言語を！？」

「お前たちの稚拙な疎通言語など簡単に理解できるよ」

シャーシャーと笑い、ハブネークは言った。

ザックは改めて群れの中心にいるハブネークを見た。

他の個体と比べて、一回りも二回りも大きな体をしていて、尾が二

股に分かれていた。

「チー、離れてろ」

ザックは自分の倍はあろうかというハブネークに向かい合った。

「許さん……！」

ザックはハブネークに特攻した。

巨大な刀のような刃がついた二股の尾を振りながらそれを迎撃する。ザックはそれを巧みにかいくぐり、尾を切り落とさんと鋭い爪を立てた。

「！？」

ハブネークの鱗はザックの爪を通さなかった。

「そんな程度か東の英雄。まだ他の集落の奴らの方が骨があつたぞ」

「なんだと！？貴様ら、まさか……」

「少々平和ボケしすぎじゃないかね。こんな種族を相手に長年遅れをとっていたかと思うと、少々はずかしくなるな……」

二股の尾が舞い踊り、鋭い刃がザックの胸を十字に裂いた。

「くっ……おのれ……！？……な……に……」

途端にザックは体の自由が効かなくなるのを感じた。

「なんだ……これは……」

「これだからザンゲースどもは愚かだというのだよ。長い戦いの中で貴様らが我々の毒を受けなくなったように、逆もまた然り。貴様らの抗体を我々が上回っただけの事だ」

「兄ちゃん！」

チーの声が聞こえる。今意識を失うわけにはいかない。

「くそっ……！」

ザックはチーを銜ると、戦場を一目散に離脱した。

「……放って置け。どの道奴はもう終わりだ。我々はこのまま最後の集落に向かうとしようか」

ハブネークはシャーシャーと笑う。

「東の英雄、恐れるに足らず」

- ザックの話 4 - (後書き)

回想話は今回で終わります。

- そして現在にいたる - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザック: 野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。

チー: 野生のチルット。ザックの妹。

- そして現在にいたる -

そして今に至るといふわけである。

”これが俺達に起つた事だ。あまり考えたくはないが、あの毒蛇の口ぶりだと、他の集落はすでに…恐らく残るは西の集落だけだ。なんとしても守らなければならん”

ザックは布団の上の拳を握り締めた。

「にわかに信じがたい話だが…」

しばらくの沈黙の後、ソライシ博士が話した。

「こうして毒に犯されたザックがいるということがその事実を証明しているわけか。しかし、そうなるはずいな。この町にもハブネークの毒に対する解毒剤はあるにはあるけど、ザングースの免疫すら凌駕するこの新しい毒に既存の治療薬が役に立つとは思えない…」
ソライシ博士はまたブツブツと呟きだしてしまった。どうやら思考モードに入ってしまったらしい。

”そういうわけだ。世話になったな人間達。俺達がもし生き延びる事ができたら、この借りは必ず返す”

ザックはそういって、ベッドから起き上がった。

「ザック、まだ駄目だ。まだ体の毒は完全に消えてはいないだろう」
ソライシ博士は慌ててザックを静止しようとした。

”俺が寝てれば事態が好転するのか？一族の危機だ、少々の不調などに構っていられるか……人間、すまんがチーを見ていてもらえないか。こいつは見ての通り別の種族だ。俺の妹には違いないが、戦いに連れて行きたくはないんだ…”

ザックは看病疲れで布団の上でうずくまったままのチルツトを指差していった。

「それはもちろん、いいけど……ザック、僕達も一緒に…」
ザックは静かに首を振った。

”これは俺達ザングースとハブネークの奴らとの戦いだ。人間に介入される筋合いは無い”

僕は何も言う事ができなかった。ザックの口ぶりは静かだったが、強い決意が込められていた。

”じゃあな。…本当に助かった、ありがとう”

ザックはそれだけ言うと、勢いよく飛び出して行ってしまった。何だか時計の音がいやにはつきりと聞こえる。

後に残された僕達は、ぼんやりとしている事しかできなかった。

しばらくして目を覚まし、ザックが行ってしまった事を知ったチーは泣き喚いた。

”兄ちゃんを追いかける！チーだって戦えるもん！英雄の妹だもん！お願い、スズ兄ちゃん！チー達に力をかけて…このままじゃ、みんなしんじやう…”

「チー…だけど、ザックは……」

「スズ、私からもお願いする。力を貸してくれないか」

「そ、ソライシ博士？どうしたんですか急に…」

ソライシ博士から意外な言葉が飛び出し、僕は少々驚いた。

「これが単なる種族間の争いだったら俺も口は出さない。しかし、この状況はあまりに不自然だ。他種族の言葉を理解し、それまでの天敵を完全に圧倒するほどの進化がこの短期間で起る事は考えにくい。はつきりとしたことは言えないが、少々人為的なものを感じるんだ」

人為的にポケモンを進化させる。そんなことが可能なのだろうか。

「もし何者かがハブネークを進化させたのだとしたら、俺達が種族間の争いに介入する理由には充分なるだろう。それに、それほど強力な毒を持つハブネークが町の近くに存在しているとあつては見過ごすことはできない。もし天敵であるザングースがいなくなってしまうえば、ハブネークは一気に増殖するだろうしな」

確かにそれは言えるだろう。ポケモンジムの無いこの町にとっては、ハブネーク達の存在は大きな脅威となりうるだろう。僕がこの町に来たときも、もしテッセンさんがいなかったらギィを見た町の人たちは果たしてどうしただろうか。

「…わかりました。みんな、いいかな…？」

”片腕でどこまで力になれるかわからないけど、やってみるよ”

”メモも。ザックたちをたすける”

”おいらも賛成だよ。あいつあんな体で行っても返り討ちにされちゃうぞ”

決まりだった。

「すぐに向かおう。チー、西の集落に案内してくれ」

ソライシ博士がモンスターボールを手に、言った。

- そして現在にいたる - (後書き)

ソライシ博士がルークを介して普通にポケモン達としゃべってますが、ポケモンと会話できてビックリ！的なエピソードは割愛しました。別に忘れたわけじゃありません

- 西へ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザック：野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。

チー：野生のチルット。ザックの妹。

数時間前にザックが通ったと思われる獣道を、僕達は走った。

「チー、西の集落まで後どのくらいだ？」

ソライシ博士が息を切らしながらチーに尋ねる。

「うーん、いつもはザック兄ちゃんの頭の上に乗っているからもつと早く着くんだけど…このペースだと後1時間ぐらいで着くと思う！」

ルークの頭の上で方向を指示していたチーが答えた。

「い、1時間か…」

ソライシ博士は苦しそうな声を上げたが、速度を緩める事はなかった。

みんな、あまり時間に猶予がない事はわかっていた。

僕達は森の中を走り続け、夕日が大地を赤く染める頃、西の集落を望む高台にたどり着いた。

「もう集落はすぐそこだよ…毒蛇たちが潜んでるかもしれないから、気をつけて…」

チーは声を潜めていった。

僕達は周囲を警戒しながら、集落への歩を進めた。

「ルーク…周りの様子わかる？」

「ちよつとまって……右腕のせいで上手く波導が使えないからあんまり自信がないけど……うん、たぶん大丈夫だと思う。周りに敵意を放つ存在は無いみたい」

「そうか…よし、みんな一気に行こう。ザングース達がやられてしまつてはしょうがないし…」

「そうだな…行こう。ルーク、もし何か感知したらすぐに知らせてくれ」

「わかりました」

集落まで後一步というところで、背後から声が飛んだ。

”！背後から何か来ます！数は…2…3…！”

言って、ルークは迎撃体勢に入る。威嚇の波導弾をたった今通ってきた森の奥に向けて放った。

「…ダメージはあまり通らないかもしれないが、威嚇にはなっただろう。スズ達は先に進んでくれ。後方は俺が引き受ける」

「博士…大丈夫ですか？」

「ああ…ハガネール！」

ソライシ博士がモンスターボールを放り投げると、見るからに堅牢そうな体を持つ巨大な蛇のようなポケモンが現れた。

「俺の専門分野は鉱石学だね。研究の過程でコイツと仲良くなったんだ。俺はポケモンバトルは特別得意なわけじゃないが、鉄蛇で毒蛇を相手にするには丁度いいハンデだろう」

ハガネールのタイプは確か、地面＋鋼だっただろうか。確かに、ハブネークを相手にするにはこれ以上ないポケモンだろう。

音を聞きつけたのか、ハブネーク達がさらに数匹集まってきた。シャーシャーと舌を出し、こちらを睨みつけている。

「博士…お願いします。ギイ！博士を援護してあげてくれ！」

”おう、わかった。スズ、メメねえちゃんを危ない目にあわせたら後で承知しないからな！”

「…肝に命じておきます」

”ギイ、きをつけて”

”ありがとう、姉ちゃんも！”

ギャラドスの威嚇の咆哮が背後で反響する中、僕達は集落の中心に到達した。

- 西へ - (後書き)

10万アクセスを超えました…ありがとうございます。

m (—) m

- 消えゆく種族 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザック: 野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。

チー: 野生のチルット。ザックの妹。

- 消えゆく種族 -

ザックは集落の中心で巨大なハブネークと向かい合っていた。隣には一匹のザングースが膝をつき、荒い息を吐いている。ザックの話にあった、オズというザングースだろうか。

僕は改めてハブネークの姿を見た。ザックの話に聞いたとおり、尾が二股に分かれており、先ほど見たハブネーク達よりずいぶん大きかった。

「ザック！大丈夫か！」

ザックは僕の声に驚いて振り返った。

「人間…何故来た！お前達には関係ないと言っただろう！」

「関係なくないもん！チーは兄ちゃんの妹だもん！」

「チーまで…お前を危険な目にあわせるわけには…」

「兄ちゃんのばか！兄ちゃん達が死んじやったらチーだけ生きてるなんて、やだもん！そんなのやだ！」

チーは僕の頭の上で泣き叫んだ。

「英雄殿の妹か。…人間もつれてきているようだな。多種族に助力を乞うなど、恥ずかしくないのか貴様ら。まあ、貴様の妹にしたってそもそもザングースではないしな。本当に恥知らずな種族だ貴様らは。」

「黙れ、汚らわしい毒蛇が！」

ザックはハブネークに飛び掛っていったが、その爪がハブネークを傷つけることはできなかった。

「なんどやってもムダだよ。先日の毒もまだ回復しきっていないのだろう。少し大人しくしてもらおうか」

そう言っと、ハブネークは鋭利な尻尾でザックに容赦ない斬撃を浴びせた。

”……………っ！”

たまらずザックは膝を折る。体中に無数の切り傷が刻まれていた。

” ふん、まあいい。どの道貴様らは消え行く種族だ。英雄殿の妹よ。ザングースを捨てて我々の仲間になるというなら、命は取らないで置いてやる。どうだ、我々の仲間にならないか？”

チーは少しもためらわず叫んだ。

” チーはザック兄ちゃんの妹だもん！バカにしないで！チーはずっと兄ちゃん達と生きていくんだ！”

チーは毅然として言った。

” 死を選ぶか。ならば要望どおり貴様ら皆殺しだ！この大地から消えるがいい！”

ハブネークが戦闘態勢に入った。二股の尻尾が踊るように動き、鋭い刃がヒュンヒュンと音を立てて舞っている。

「チー、下がれ！メメ、援護を頼む！ルークはハブネークを！」

ルークとメメも頷くと、戦闘態勢に入った。

メメが放った猛吹雪を背に、ルークがハブネークとの距離を詰める。

” それがどうした！”

ハブネークは大きく息を吸い込むと、口から炎を放射した。

” ！”

炎はメメの吹雪を突き破り、メメを襲う。慌ててメメは回避した。

「ルーク、ボンラッシュ！」

接近していたルークがハブネークの横っ面に拳を叩き込んだ。

爬虫類特有の目がぎょろりとルークを睨む。

” その程度か、波導使い！”

ハブネークが身を翻し、尻尾でルークをなぎ払った。

” うっ！”

ルークが慌てて飛びのいて、僕のところまで戻ってくる。腕を斬られたのか、青い毛並みに血が滲んでいた。

” …スズ、あいつ強い。片腕じゃとても太刀打ちできない…最も万全の状態だったとしてもどうなるかわからないけど…”

ルークは悔しそうに言った。

” もう終わりか、人間共！”

再びハブネークが炎を吐いた。

” 危ない！ ”

ルークが僕を押しつけて炎をまともに受けてしまう。

” ふふ、もはや私に敵はいない…この地は我らのものだ。英雄殿の妹から血祭りにあげてやろう ”

” ……なんだと！ ま、待て… ”

” そこで大人しくしている、東の英雄。仲間が切り刻まれる様を見て残された少ない時間を精々苦しみたまえよ ”

” やめろ…そいつらは関係ないだろう！ ”

ザックの叫び声が聞こえた。

” 関係ない事はないさ。ザングースに与するものは生かしてはおけぬ。それが例え取るに足らない存在であっててもな ”

ハブネークが僕とチーの前まで迫ってきた。

” お前達に直接の恨みはないが、この世界から消えてもらう。悪く思うなよ ”

ハブネークの鋭い刃が風を切る音がして、そして…

ハブネークの体が吹き飛ばされていた。

- 毒暴走 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザック: 野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。

チー: 野生のチルット。ザックの妹。

- 毒暴走 -

ザックは体が燃えあがるような熱さを感じていた。まるで再び毒が体を巡り始めたかのような感覚だった。実際にその通りなのかもしれない。前の戦いで受けたハブネークの毒は完治しておらず、まだ体に残留していたのだ。

ふと体に目をやると、以前ハブネークに十字に切られた胸の傷が再び開き、ザックの胸から腹部にかけてを赤く染めていた。

しかし燃えるような熱さと共に、ザックは奇妙な感覚を覚えていた。体の気だるさとは裏腹に、何故か力が湧いてくるのだ。

これは…

戦士の勘が告げている。この力なら毒蛇に届くと。

突如、僕達の目の前まで迫っていたハブネークの巨体が吹き飛び、白い影が現れた。

「ザ、ザック！」

”兄ちゃん！”

”二人とも、下がってろ。すぐに片付く”

吹き飛ばされたハブネークがゆっくりと起き上がった。

”すぐに片付くだと？なめられたものだ！先ほどまで手も足も出なかった者の”

”勘違いするな、毒蛇”

ザックはハブネークを遮って言った。

”俺が勝つなどと言った覚えはない。俺が言いたかったのは、決着が近いってことだ。この力はどうかやらそれほど長く使えないようだから…”

見ると、ザックの胸の十字傷から絶え間なく血が流れ出ていた。

” 覚悟しろ、毒蛇。今こそこの地に、我らが種族に安寧を”

” この地に生き残るのは我々だ。貴様ら全員根絶やしにしてくれる！”

ザックは大地を蹴り、ハブネークの刃を潜り抜けてすれ違いざまに切り付ける。

返す刀で、ハブネークの刃がザックの皮膚を裂いた。

どちらかが傷つけば、負けじと鮮血が飛ぶ。

僕は半ば呆然として、二つの種族の戦いを眺めている事しかできなかった。

夕日が世界を赤く染めていた。

どのくらい戦っていただろうか。決着の時は訪れた。

ザックがハブネークの二股の尻尾の片方を切り落とし、その胴体を切り裂いた。

うめき声をあげ、ハブネークは倒れた。徐々に血だまりが広がってゆく。ザックはしばらく荒い息を吐いて天を仰いでいたが、やがてその場に崩れ落ちてしまった。

” 勝った！ザック兄ちゃんが勝ったよ、スズ！”

チーは嬉しそうに僕の頭を離れると、ザックに飛びついた。

” おのれ……ザングースごときに…遅れを…この長き戦いの終わりを……”

ハブネークが途切れ途切れに呟いてる。

” ……悪いな、毒蛇。生き残るのは俺達みたいだ”

” ……ふん…これで終わりではない。貴様らの被った被害も…軽いものではあるまいよ。……私はまもなく退場する事になるだろうがしかし、貴様のその力も…また異端。種族間の秩序を乱すものだ…
……いつか我々の中から現れるであろう新たな脅威の出現におびえながら精々つかの間の勝利に酔いしれるがよい……”

「いや、恐らくこれ以上の進化は近い未来には起こらないだろうな」
突然、声が聞こえた。

- 研究者 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザック: 野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。

チー: 野生のチルット。ザックの妹。

- 研究者 -

「まさか強化ハブネークが負けるとは…一つの変異が天敵の変異をも促したのか…ふむふむ」

突如声が聞こえた。

声の先に目をやると、灰色の白衣を着た男が立っていた。灰色だから白衣とは言わないのだろうか。

「なっ…お前、いつから…」

「慌てるな少年。私の正体についてはもはや説明する必要はないだろうが、私はただの研究者だよ。ボスの作った新薬の実験にここまで来ただけのことだ。少年をどうしようって気はない」

「なんだと…人間、貴様まさか…」

ハブネークは苦しそうに言った。

「ああ、そうだ。お前の体に特殊な薬剤を投与させてもらった。気づかれないようにやるのはなかなか骨が折れたが、ボスも実験結果には満足してくださるだろう。お前のその力はいわば我々のおかげって事だよ」

”…………”

ハブネークは放心状態になってしまった。

「まあ結果は上々だ。毒蛇の毒はさらなる強化を遂げ、新たな毒は対抗種族の力さえ引き上げた。ハブネーク側これ以上の変異がないと言ったのは、ザック君の新しい力がハブネークに影響を及ぼす種類のものではないからだ。ザック君の変異は元々君から受けた毒に対抗するためのものだからね。あくまで自分の中で完結している」
最も長い目で見ればわからんがねと、ハブネークを見て灰色は言った。

”…………これは傑作だ。多種族の力を借りてでかい顔をしていたのは、ほかならぬ私自身だったというわけか。はっはっは！”

ハブネークは血の涙を流しながら笑った。

”貴様：そんなくだらん実験のために……俺達の戦いに踏み入ったのか！”

ザックが激昂し灰色に向かって一歩踏み出したが、すぐに崩れ落ちてしまった。

”……………！”

「無理するな、君の体だつてもうボロボロだろう？その力は毒を無効化しているわけじゃない。慣れない力の使いすぎは感心しないな……じゃあ、そろそろ俺は引き上げさせてもらう」

そう言くと、灰色はハブネークに向かってモンスターボールを投げた。

ボールはハブネークの眼前で二つに割れると、その巨体をその中に収めて地面に転がった。

「なっ……ハブネークをどうするつもりだ！」

僕の問いかけに、灰色はさも当然と言った様子で答えた。

「どうするって……持ち帰って研究するのさ。思ったとおりの実験結果が出て、ボスもきつとお喜びになるだろう。じゃあな少年。お前が無事だったらまた会うこともあるかもしれないな。……しかし、こういう形でポケモンと会話するつてのは中々貴重な体験だ。少年のルカリオは随分強い波導力を持っているんだな」
灰色はそう言い残すと、森の中へと消えていった。

「スズ、大丈夫か！ハブネークの親玉はどこへ行つた！？」

ソライシ博士がハガネールとギイを連れてこちらに走ってきた。

「戦いは……勝ちました。でも……」

なんと言っているのか、僕はよくわからなかった。

ハブネークの残した血溜まりとザックに切り落とされた尻尾だけが、夕闇の中に残されていた。

- 研究者 - (後書き)

毒暴走は夢特性です一応。

そういえば夢イブイ解禁されましたね。マジックコートエーフィとか使ってみたい。

- パワーバランス - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザック：野生のザンゲース。東の英雄と呼ばれる。

チー：野生のチルット。ザックの妹。

- パワーバランス -

僕達は満身創痍のザックを抱えて急いでハジツゲタウンに戻ると一通り治療を終えた。

みんな疲労困憊で、怪我をした者の手当てを終えると、僕達も死んだように眠った。

翌日、僕は昼過ぎに目が覚めた。

外はいい天気のように、窓から日差しが差し込んでいた。

ザックはまだベッドで寝ていた。チーも枕元で寝息を立てている。あれだけの戦闘の後だ。消耗していて当然だろう。

僕はなんとなく新鮮な空気を吸いたくなって、外に出た。

外に出ると、ソライシ博士がぼんやりと煙草をふかしていた。

「おおスズ、起きたか」

「おはようございます。博士…今回の件、ありがとうございました」

「いやなに、放っておいたらゆくゆくはこの町にもかかわってくる事だったからな。むしろ俺も助かったよ」

昨夜は疲労困憊で治療を終えるとすぐ眠りについてしまったので、

僕は博士に事のあらましについて説明した。

「なるほど…やはり第三者の思惑が紛れ込んでいたのか。それもスズ、お前の故郷を襲った奴らだったとはな」

ソライシ博士が唸り声を上げた。

「あのハブネークはすごい力でした。ザックが新しい力に目覚めなければ、多分僕達は…」

「そういえばそのザックの新しい力だが、話を聞く限りだと毒によって攻撃能力を飛躍的に上昇させるもののようだな。免疫機能を失う代わりに新しい力を手に入れたってことか」

どうやらそのようだった。ザックが力を発動したとき、ハブネーク

の出血毒が再び体の中を巡り、ザックは胸の古傷から激しく出血していた。

「しかし、ザングース達が全く歯が立たなかったそのハブネークすら退けるとは…捨て身の力とはいえ、強力なものだな……」

ソライシ博士は何故か難しい顔をしていた。

「博士…どうかしたんですか？」

「いやな…ザックが勝ったのはもちろん嬉しいよ。俺達はザックの味方としてこの争いに加わっていたからな。しかし二つの種族間のパワーバランスを考えると、複雑だよ。今のザックの力は明らかにハブネーク達の上をいつているからな…」

「あ…」

力を持ったハブネークはザングース達の集落を襲い、壊滅状態に追いやった。

今新しい力を手に入れたザックは、果たしてどうするのだろうか。

「でも…ザックがそんなことを…」

「…起こってしまった事はどうしようもない。しかしあの灰色の奴ら、なんのためにこんな事をしたんだ。単なる学術的興味か？スズは心当たりはないか？」

「すみません…僕には…」

見当もつかなかった。ここまできて、僕はいまだに灰色達の目的がわからなかった。

”スズ”

ルークの声が聞こえた。

「おはよう。昨日はルークも大変だったね」

”スズより遅く起きるなんて、ちよつとショックだけどね。スズ…ザックも目を覚ましたよ。スズを呼んでる”

「そうか…よかった。僕を…？」

”うん”

- アンビバレンス - (前書き)

主人公の所持ポケモン^ス

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザック：野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。

チー：野生のチルット。ザックの妹。

- アンビバレンス -

博士の家に戻ると、目を覚ましたザックはベッドに横たわり窓の外を見ていた。チーはまだザックの上で寝息を立てている。

”人間…世話をかけたな…”

ザックがベッドから上半身を起こした。

「ザック…まだ寝ていないと…」

”大丈夫だ…今回の件、本当に感謝する。俺達だけでは正直どんな結末を迎えていた事か…”

ザック僕に頭を下げた。僕は慌ててしまった。

「そんな…気にしないで。元々僕達が首を突っ込んだんだし、最初に君達のバランスを崩したのは僕達人間ということになるんだから…むしろ謝らないといけないのは僕達だ」

”そんなことはない。ここは純粹に礼を言わせてくれ”

「ザック…その…これからどうするんだ？」

”…その質問はどういう意図だ？”

逆に問い返され、僕は言葉に詰まってしまった。

”…俺達はこれまでずっと戦い続けてきたんだ”

ザックは独り言のように話始めた。

”だが、理由無き種族間の戦いに一体何の意味があったのか。仲間達を守るといふのはもちろん理由になるが、そもそもなぜ俺達は互いに潰しあう事を選んで、理由無き憎しみに身をゆだねていたのだろうか”

「…この世に正義と悪の価値観がある限り、利と害がある限り、争い事があるのは仕方ない事だと思う…」

なんて陳腐な言葉だと、僕は口にして思う。僕自身、ルネシティを襲った灰色達の組織に激しい憎しみを感じている。何をどう取り繕ったって、言葉を乗り越えて感情は押し寄せてくる。

”…これはチーには黙っている事なのだが…”

ザックは前置きして続けた。

” あいつには、群れからはぐれているところを保護したと言ってあるのだが、チーの両親はハブネークに殺されている。数年前、縄張り争いが激化していてな…毒蛇の奴らは他種族の棲み処にまで手を伸ばしたんだ。…俺達の争いの延長線上で巻き込まれたわけだから、直接的ではないとはいえ俺達にも原因があるのだが…”

ザックは膝の上で眠るチーをそつと撫でた。

” チーはすでに事切れた親のチルタリスの羽に守られて、静かに眠っていた。…なんでだろうな、俺はどうしてもチーを放っておくことができなかった。今思えば、チルタリスの親達の圧倒的な愛を目の当たりにして以来、俺の中に迷いが生まれたように思う。原因の一端は俺達にもあるとはいえ、他種族の子を引き取って育てる事は仲間にも反対されたが…結局、今に至ると言うわけだ”

僕は何も言う事ができず、しばらく沈黙が流れた。

” 人間、お前は故郷を守るためにあの男達と戦っているのだとか”

「 ルークから聞いたのか…うん、そうなんだ」

” 人間……どうか俺も連れて行ってもらえないか。ぜひお前の力となる事を許して欲しい”

「 ザック…それは…ありがたい話だけど。ザングースの集落は大丈夫なのか?」

” 今回の戦いで、双方大きな被害を被った。相手をどうこうしようという話はしばらく起きないだろう。それに…この力を手に入れたしまった今、俺も種族間の秩序を乱す存在となってしまうた…”

「 そんな…」

” いいんだ。集落の再興は残った者達だけでもやれるだろう。もちろん、お前さえよければという話だが…”

「 それは…ザックが来てくれれば、僕達もとても心強いよ」

” そうか”

ザックはベッドから起き上がり、大仰に跪いて言った。

” よろしく頼む、スズ”

- On the other hand 5 - (前書き)

シズク(23番)の所持ポケモン
マリル(マリちゃん)

- On the other hands -

私はルネシティに住む者です。

私達の町は侵略者に支配されています。

助けてください。

どうかこの手紙を読んだ方、私達を助けてください。

××××年・月×日

私は小石を湖に投げ込み、小さく咳払いをした。

月の見えない闇夜だ。

ルネシティの暗さには慣れているとはいえ、状況が状況だけに心細さが私を襲った。

しかし夜間外出が認められていない現在、闇夜は身を隠すのに都合がいいとも言えた。

夜の闇に身を潜めてしばらく待っていると、湖からマリちゃんが顔を出した。

私達の町がこんな事になる前はいつも一緒だったのに、今となつては深夜に会えるか会えないかという状態だ。私はマリちゃんを抱きしめた。

「マリちゃん、お願いね」

私は手紙を瓶に詰め、マリちゃんに渡した。

マリちゃんは小瓶を受け取って小さく鳴くと、夜の湖に潜っていた。

手紙入りの小瓶を流すのは何個目になるだろうか。

町の人たちが持っていたポケモンは灰色たちに取り上げられてしまっていたため、現在この町でポケモンを所持しているのは私しかない。だったら私は、できる事をやろうと思った。

ルネシティの現状を外に伝えるのだ。

訪れる人の極めて少ないこの町で、外からの助けは期待できない。生まれてそれほど経っていないマリちゃんは、まだまだダイビングを使いこなせていないため長距離を航行することができない。なるべく小瓶を遠くに運んでもらい、後は海流任せにするしかなかった。果たして、外の人がこの手紙を読んでもくれる可能性はどのくらいあるのだろうか。誰の手にも届かず、海底に沈んでしまうことだって充分考えられる。

それに、運よく誰かの手に渡り手紙が読まれたにしまつて、何かの冗談だと思われてそれで終わりという可能性もあった。

実際私がこの手紙を読んで、何か行動を起こすかと言われると自信がなかった。しかしそれでも、何もしないでいることはできなかった。

私はしばらく水面を眺めていたが、身を潜めながらスズくんのお母さんが寝ている家に戻った。

- 流星の滝へ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザンゲース（ザック）

チルット（チー）

- 流星の滝へ -

114番道路を進むと次第に火山灰が体積した道路は終わり、ゴツゴツした岩肌があたりを占め始めた。

ぼんやりと曇っていた空は晴れ、太陽が顔を出す。

”スズ、目的地まではどれくらい？”

ルークが尋ねた。

「ソライシ博士の話ではそれほど遠くないみたいだったけど…」

”そうだな、もう数十分といったところだろう。俺も一度だけ訪れた事がある。あの滝は中々壮観だったな”

”チーも見たことある！とってもキレイだったよ！”

”たのしみ”

僕達はハジツゲタウンを出発し、114番道路にある流星の滝を指していた。

博士が調べてくれた方法によると、ルークの右腕の呪いを解くには、清浄な水で清める事が必要なのだそうだ。

「荒ぶる炎の呪いを沈め、清らかな水で浄化しなければならない」ハジツゲタウンを出発する前日、ソライシ博士はルークの右腕の呪いについて話してくれた。

「114番道路を抜けた先に、流星の滝と呼ばれている滝がある。

この滝に浸かり身を清めれば、恐らく呪いは解けるはずだ」

「流星の滝…ですか」

「ああ。どのくらい浸かればいいのかはわからないが、ルークの場合呪いが侵食しているのは右腕だけだからな。シャンデラの呪いとはいえ、解呪にそれほど時間はかからないと思う。…ルークもいつまでもあのままじゃきついだろうし、明日にでも向かってみるといい」

「ですね…日常生活も大変そうですし…」

「それじゃない。ルークは表にだしてないが、おそらくあの右腕は相当熱をもっているはずだ」

「……………え？」

「火傷自体は治っているが、シャンデラの呪いは炎の呪いの中でも上位のものだ。今回のケースはおそらく意図して呪いにかけられたわけではないのだろうが、かなり苦しいはずだ」

僕は改めて、前を歩くルークの右腕を見た。

ルークの右腕には未だ包帯が巻かれていた。ルークは泣き言を一度も言わなかったが、それが逆に辛さを物語っているようにも思えた。

”……………ズ……………ズ……………”

「……………え？」

”ズズ！なにボーっとしてるの？チーの話ちゃんと聞いてるの！？”

「あ、うん、ごめん。……………なんだっけ？」

”もう、やっぱり聞いてなかったんだ！”

チーはザックの頭の上でむくれた顔をした。

ザックが仲間になってくれたあの日、ザックはチーをザングースの集落に残るように説得した。しかし、もうザック兄ちゃんの傍を離れるのは嫌だと言って、彼女は聞き入れなかった。結局ザックと共にチーも付いてきてくれることになったのだ。

ザックはため息をついていたが、その実まんざらでもなさそうだった。やはり妹を残していくのは気が引ける部分もあったのだろう。口には出さないがザックは心なしか嬉しそうだった。

進む道が勾配を帯び始め、岩山が目立ち始めた。

程なくして、洞窟の入り口が目に入る。あれが流星の滝への入り口だろうか。

「なんだ、随分大所帯なんだな。聞いてた報告と少し違う」

突如上から声が降ってきた。

ぎよっとして小高い岩山を見上げると、灰色のシルエットが見えた。

・ 騎士と忍者 ・ (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザンゲース(ザック)

チルット(チー)

「今更説明は必要ねえと思うが」

灰色はゆつくりと岩山を降りてきた。

「そろそろ終わってもらう。さすがにこれ以上動き回られると、俺達も都合が悪いんだよ」

”スズ、こいつがお前の言っていた灰色の一味か”

鋭い目でにらみつけながら、ザックが言った。

「うん……」

灰色は僕達の正面に立った。

「お前ジムリーダーを味方につけてるんだって？ジムリーダーごときに遅れを取るつもりはないが、その上にいる奴らにまで出てこられるとさすがにやかいだからな……現段階でこれ以上事を大きくさせるわけにはいかねえ」

「……なに言ってるんだ。僕に撃退されるようなお前らの仲間なんかジムリーダーに敵うわけないだろ」

「俺達なんか下っ端だよ。お前の故郷にはちゃんと実力派が待機してるさ。……そうそう、ちよつと前の話だが、ルネシティ近海の上空を飛んでた鳥を落としたって言ってたなあ。確かトロピウスっていつてたっけか。女が一人乗っていたらしいが、お前何か心当たりはないか？」

灰色がにやりと笑う。

「……………え……………？」

僕は頭を殴られたような衝撃を受けた。

ヒワマキシティを飛び立ったとき、ナギさんが乗っていたのはトロピウスだった。

前日にトロピウスから取れた木の実のジュースをモナミさんにもらっていたので、印象に残っていた。

僕は血の気が引いていくのを感じた。

「どうした？急に元気がなくなったようだ」

「そ、それがどうした！」

僕は精一杯強がって言った。

「別にどうもしないさ。ただ起こった事を伝えただけだ。何も情報がないのはお前も不安だろうからなあ……さて、始めようか。おらっ！」

男のモンスターボールが宙を舞うと、二つの影が飛び出した。一体は鎧を身に纏ったような、まるで騎士を彷彿とさせるポケモン。もう一体は、まるで忍者のようなポケモンだ。

「……！」

二体が場に姿を現した途端、空気が張り詰めていくのを感じる。相変わらず、見たことがないポケモンだった。

くそっ……敵のタイプはなんだ……

”スズ、落ち着け。動揺してはいはこの場は切り抜けられない”

隣のザックが囁き、僕は我に返った。

”俺が出る。流星の滝はすぐそこだろう。お前とルークは滝を目指せ。こっちは俺達でなんとかしておく”

「ザック……でも……」

ザックは騎士を見て言った。

”あいつは恐らく鋼タイプ……しかも相当できそうだ。俺の技がここまで通るかわからん。俺達の中ではルークが一番奴を倒せる可能性がある”

ザックは淡々と言った。

”ギイも連れて行け。滝に近付くためにはもしかしたらアイツの力が必要になるかもしれない”

「……わかった……メメ、ザックと協力して。チーはサポートを頼む」
メメとチーはこくりと頷いた

”……みんな、ありがとう。波導の通信回線は繋げておくから、何かあったらすぐに連絡して”

「……ここは頼んだ。すぐに戻ってくるから……！」

” 合図したら走れ… ルークもいいな。 1 . 2 . . . 3 ! ”

僕達は弾かれたように走り出した。

「おお？なんだ、逃げるのか少年」

「…くそっ！」

不敵に笑う男の言葉を無視して、僕たちは大急ぎで流星の滝のある洞窟へと飛び込んだ。

- 騎士と忍者 - (後書き)

さいきん じんせい が くだりざかなんだよ…

- 轟槍 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
ギャラドス(ギイ)
ユキメノコ(メメ)
ザンゲース(ザック)
チルット(チー)

洞窟の中はぼんやりと明るかった。どこからともなく滝の音が聞こえてくる。

光源はなんだろうか？じっくりとあたりを見渡しているヒマも無い僕達は、滝の音が聞こえる方へと急いだ。

開けた場所に出ると、なんとも静謐な空間が広がっていた。洞窟の中に滝がある。それほど大きな規模ではないが、僕達は圧倒されてしまった。

見ると、流れ落ちる滝の水がぼんやりと光を発しているようにも見える。

「……ゆっくり見ていたいけど、あまり時間が無い。早速滝に……」

「よし、ルーク、オイラに乗りなよ」

ギイが水の上に降り、ルークに乗るよう促す。

「うん。よろしく、ギイ」

ルークは飛び乗ると、ギイは滝に向かって泳ぎだした。

よし……これで呪いが解けて腕が動くようになれば……ルークのことを気にかけながらも、僕は洞窟の外に残してきた仲間達の事が気がかりで仕方なかった。

「……まあ、自分のポケモンおいて逃げる奴じゃなさそうだしな。お前らを適当に痛めつけてやれば戻ってくるだろ。シュバルゴ、アギルダー、始めるか。どうやら相手トレーナーはポケモンバトルを放棄したみたいだから、お前ら好きに戦ってみな。……あのガキが戻ってくるまでは殺さない程度にしてやれよ」

シュバルゴとアギルダーが一歩前に出てきた。

「メメ、俺は鋼のやつとやる。お前はもう一匹を頼めるか？」

「わかった」

”俺と戦ってくれるのはお前か。早速始めようか”

シエバルゴが槍の様に鋭利に尖った腕をザックに向かって突き出す。

”随分好戦的な事だな鋼の騎士よ”

ザックも一歩前に出る。

両者の視線が空中でぶつかり合い、ザックは一気に距離をつめる。

シユバルゴはザックを迎え撃つ形で、槍を構える。

空気を裂く音がして、シユバルゴの槍が空を裂く。ザックは紙一重でそれを交わし、ブレイククローを叩き込んだ。

”…っ、硬いな…!”

シユバルゴの体には傷一つ付いていなかった。

”なかなかやる…”

シユバルゴは再び槍を構えた。

シユバルゴの一撃はザックのそれより明らかに威力がありそうだった。再び槍を構え、まるで大砲のような一撃を放ってきた。

ザックは再びそれを回避し、シユバルゴの懐に入ると再びブレイククローでシユバルゴの胸部を切りつけ、距離を取る。

素早さではザックが上回っているようだが、破壊力は明らかに相手が上だった。

”…この削りあいはいは少々割に合わないな…”

呟くと、ザックは首から提げていたペンダントを握り締めた。ザックの掌から血がぼたぼたと垂れる。

同時に、以前改造ハブネークに十字に裂かれたザックの胸の古傷から、徐々に血が滲み出してきた。毒が体内を駆け回り始めた証だった。

”！兄ちゃん！”

”…このまま分の悪い戦いを続けてはいずれヤツの槍に捕まる…なるべく早く勝負をつける”

ザックは深く呼吸をしてみた。

ザックのペンダントは、いつかの改造ハブネークの切り落とした尻尾の刃を削り、作ったものだった。切り落とした今も、その刃には

純度の高い毒が封じられている。

” まだまだ楽しませてくれそうだな。 来い、獣の戦士 ”

シュバルゴはにやりと笑い、再び槍の照準をザックに合わせた。

- 轟槍 - (後書き)

主人公の手持ち+これから仲間になる予定のポケでランダムマッチ
潜ってみたけど中々勝てません。

- アギルダー - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザンゲース(ザック)

チルット(チー)

- アギルダー -

”…やめろ。無駄に血を流す必要はない”

今まさに戦闘態勢に入ろうとしていたメメに、アギルダーは静かに言った。

” シュバ達の戦いの結果如何で俺も手を引こう。お前達の側が負けたら、お前も手を引いてくれると嬉しい。もし納得がいかなかったらお前がシュバと戦えばいい。…どうだ？”

” ……あなたはたたかわないの？”

メメは首を傾げて、少々戸惑いながら問いかけた。

極めて好戦的で、目的のためなら手段を選ばない…そんなイメージを、メメは灰色達に対して抱いていたのだ。

” ご主人は好きにやれと言ってくれたからな。シュバがやられるような相手に俺が敵うとは思えん。それはお前も同じだろう？”

まさにその通りだった。メメの氷はシュバルゴに対して有効な手段とは言えない。メメもそれは充分承知だった。

” メメも、たたかうのはすきじゃない”

背後で吹きすさび始めていた吹雪を抑え、メメは言った。

” あなたたちのもくてきは？”

” 俺達のご主人の命令にただ従うだけだ。俺達は目的遂行の為の手段でしかない。そんな俺達が、知るはずが無いだろう”

” そう…”

アギルダーの言葉を全て信じたわけではなかったが、メメは警戒のレベルを下げた。

ルークが淹つばに浸かり始めてからどのくらい経つだろうか。
僕は気ばかり焦ってしまい、ソワソワとしていた。

美しい流星の滝もまるで目に入ってこない。

外に残してきたみんなは大丈夫だろうか…ここはギイに任せて、僕も外に戻ろうかと考えていたその時だった。洞窟の壁に反響して、微かに音が聞こえる。

ポケモンの鳴き声のようだ。声は僕達が通ってきた方向から聞こえてきた。

まさか…ザック達は負けてしまったのだろうか。残してきた仲間達が灰色のポケモンに串刺しにされている映像が頭をよぎった。

…何を考えてるんだ！

僕は頭を振って、悪い妄想を追い出した。しかし、音は相変わらず続いていた。ルーク達はいまだ滝つぼから上がってくる気配は無い。僕は心を決めて、音の正体を確かめるべく、前のフロアを恐る恐る覗いて見た。

そこには、二羽の巨大な蝙蝠に纏わりつかれている一匹のポケモンがいた。あれは…確かゴルバットというポケモンだったか。実際に見るのは初めてだった。もう一匹のポケモンの姿はゴルバットの陰になってしまいはつきりとは確認できなかったが、その雰囲気から察するにどうやら苛められているようだ。ポケモンの体から出血が見られ、悲痛そうな声を上げている。

僕はその光景を見ていることができず、気がつけばポケモン達の間割って入っていた。

突然の僕の乱入に驚いたのか、二羽の蝙蝠はどこかに飛び去っていった。

「ふう…よかった…君、大丈夫？」

僕は地面にうずくまっているポケモンを見た。そのポケモンは、弱々しい声で小さく鳴き声をあげた。

「あれ、このポケモンは…」

あまりポケモンの種類に詳しくない僕でも、知っていた。

硬いカラに覆われたポケモン。硬いカラに覆われ、大空を夢見るポケモン。

確か名前は、
コモル！。

- アギルダー - (後書き)

仮面ライダーおいしい。

- おくびょうコモルー - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザンゲース（ザック）

チルット（チー）

- おくびょうコモルー -

コモルー。ホウエン地方を代表するといっても過言ではないドラゴン、ボーマンダの進化する前の姿。

あまりポケモンに詳しくない僕でさえ知っているのだから、ことホウエン地方におけるその認知度は相当なものだろう。

ずっと昔に図鑑で見たきりだったが、進化前と後のギャップがとても印象に残っていた。それにドラゴンという存在は、多くの少年の心の琴線に触れるものがあるのだろう。

僕は包帯を持っていなかったので、服の袖を破って包帯代わりに撒き、出血していた部分を簡単に手当してあげた。

「じゃあコモルーはトレーナーとはぐれちゃったの？」

僕が尋ねると、コモルーは小さく頷いた。

とりあえずの危機が去った今も、コモルーは小刻みに震えていた。どのくらい前になるだろうか、コモルーはトレーナーと流星の滝を訪れた。しかし何かの拍子に滝に落ちてしまい、そのままトレーナーとはぐれてしまったのだそうだ。

コモルーは日付を数えていなかったため正確な日数はわからなかったが、トレーナーとはぐれてしまったのはそれほど前のことではないように思われた。

いずれは強大なポケモンになるとはいえ、今はまだ力を蓄える時期である。一人で見知らぬ地に放り出すのは少々酷というものかもしれない。

「コモルー……君のトレーナーさんが見つかるまで、一緒に来る？もちろん君さえよければだけど……」

”……………”

コモルーは迷っていたようだったが、やがて首を縦に振った。

「そうか。よろしく、コモルー。僕の仲間は…今はちょっとばらばらになっっているんだけど、後で紹介するよ。…ところでコモルーは、名前はあるの？」

”……………ルー……………”

「ルー、か。もしかしたら短い間になるかもしれないけどよろしく、ルー」

”……………”

ギイン！

真っ向から繰り出されたシュバルゴの刺突を、ザックは両の爪でがつちりと受け止めた。

驚いたのはシュバルゴだ。

ザックはそのままシュバルゴの懷に飛び込み、拳を固めて強力な連撃を放った。

”ぐっ…”

シュバルゴの顔が初めて苦痛に歪み、吹き飛ばされる。

”つつ”

土煙の中、シュバルゴはゆっくりと立ち上がった。

”つつははははっはあ！これほどの相手とめぐりあったのは久方ぶりだ！”

シュバルゴが心底楽しそうな声で笑い、立ち上がった。

”来い、獣の戦士！まだ足りないぞ！もっと俺を楽しませてくれ！”

”…よく喋る騎士殿だ”

ザックは再びシュバルゴの槍を潜り抜けて懷に飛び込み、再度連撃を叩き込む。

しかし今度は先刻のようにはいかなかった。シュバルゴはその場に踏み止まり、その強固な頭をザックの頭部に叩き付けた。

”ぐ…っ！”

たまらずよろめいたザックを、乱れ突きが襲った。

今度は吹き飛ぶのはザックの方だった。

”どうした、それまでか？俺も全力を出させてもらうぞ！”

シュバルゴの槍がさらに太く、鋭く形態を変える。

全身から放つオーラがさらに力強さを増したように見えた。

”はあっ、はあっ………くそっ、やはり割に合わん削り合いだ……”

さらに威圧感の増したシュバルゴに、ザックは再び向かい合った。

- おくびょうコモリー - (後書き)

毒暴走 V S 虫の知らせ

- 炎の爪痕 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザンゲース(ザック)

チルット(チー)

コモルー(ルー)

- 炎の爪痕 -

” あれは…”

明らかにパワーアップしたシュバルゴを見て、メメが呟いた。

” シュバの全力だ”

アギルダーがそれに答える。

” あいつが虫の知らせを発動させている所は俺も数えるほどしか見た事が無い。それだけでもあの戦士は賞賛に値するよ”

” メメお姉ちゃん……”

いつの間にか隣に来ていたチーが、不安そうにメメの手を握った。

” だいじょうぶ。ザックはつよい”

… 大丈夫。ザックが負けるわけ無い。

そう思いながらも、メメの中の不安は膨らんでいった。

「！光が…」

ルークが浸かっている滝つぼの辺りが、一際明るく光り始めた。

光は段々と激しくなる。ぼんやりと明るかった洞窟内を閃光が照らし、収束した。

「ルーク！」

僕の呼びかけに応えるように、ギイに乗ったルークが戻ってくる。

「ルーク！腕は……………」

ルークは無言で僕に腕を見せた。

シャンデラにかけられた炎の呪い。黒い蛇が巻き付いているかのよう

に刻み込まれていた呪いの痕は、未だそこに存在していた。

しかし、誰が見てもそれとわかる変化が生じていた。黒い痕が、真紅に変わっている。

「それは…」

”大丈夫、なんとも無いよ。腕も動くし、右腕から流れ込んできた禍々しい波導も今はもう感じない。それどころか、何だか力が湧いてくるような気さえするんだ”

ルークは右腕を振り回して、につこり笑って見せた。

”やっぱり自由に腕を自由に動かせるっていいなー！なんだか生まれ変わったみたいな気分だよ！”

ルークは宙返りして喜んでいいる。青い毛並みに真紅の紋様が映えていた。

”聞いていたよ。ルー、僕はルーク。よろしく！”

”おいらはギイだ。よろしくな”

ルーは戻ってきたギイとルークを見て、僕の後ろに隠れてしまった。小刻みに振動が伝わってくる。どうやら怯えているようだった。

ギイの姿は、確かに他者を威圧するものがある。僕だってギイがギヤラドスに進化したときは、その姿に怯んだものだ。………それに、今でも正直外見は怖い。

”なんだよ。スズ、そいつ大丈夫か？おいらを随分怖がってるみたいだけど”

ギイは、僕の後ろに隠れるようにして震えているドラゴンを見て言った。

「大丈夫、ちょっと驚いているだけだよ。……さて、ゆっくりしている時間はない。早くザック達のところに戻らないと！」

”うん、急ごう！”

- 炎の爪痕 - (後書き)

もう七月も折り返しですね…

- リフレッシュ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザンゲース(ザック)

チルット(チー)

コモルー(ルー)

- リフレッシュ -

”ふっ！”

シュバルゴの連続突きがザックを襲う。

突きの一発一発が先ほどとは比べ物にならない威力である。鋭く、重い。紙一重でかわしたザックの皮膚が裂ける。

”どうした、それまでか獣の戦士！”

ザックがバランスを崩したところに、シュバルゴの強烈な横薙ぎが入った。

”がっ…！”

かろうじて受け止めたザックだったが、ついに膝をついてしまった。

”…降参だ、騎士殿”

肩膝を着いたザックに、尚もシュバルゴは槍を向けて言い放つ。

”潔い事は悪い事ではないが、俺はまだ満足していない。お前が駄目なら次はあの雪女に相手をしてもらうことになるが？”

シュバルゴの目は獠猛な光を帯びていた。力の解放によって軽い興奮状態に陥っているのだろうか。

”心配しなくても、お前の相手は別にいるさ”

”何？”

”俺は負けた。しかし大局はまだわからんぞ”

突如、ザックとシュバルゴを分断するように背後からエネルギーの塊が飛んできた。

”これは…波導エネルギーか？”

シュバルゴが視線を向けた先には、スズ達の姿があった。

「みんな、大丈夫か！」

僕は大きくで仲間の下に駆けつけた。

” メメたちはだいじょうぶ”

メメもチーも、見たところ怪我はしていないようだった。

「おお、戻ってきてくれて安心したよ。もしかしたら本当に逃げちまったのかと思い始めていたところだ」

灰色が大仰な動作で僕に話しかけてきた。

「…そんなことするわけがないだろう。仲間を置いて逃げるものか！」

「ふふ、おかげでそのお前の大事な仲間とやらは随分と傷を負ったみたいだな。自分勝手なトレーナーさんだ」

「あ…」

僕はザックを見た。

体中に傷ができ、膝について苦しそうに呼吸をしていた。

ザックの胸の傷が開いているのを見て、僕は驚いた。

「ザック！まさか、毒暴走を…」

「俺は大丈夫だ。状況を見る。後はお前達の役目だ」

「大丈夫、兄ちゃんはチーが治すからっ！」

ぱたぱたとチーが飛んできたかと思うと、ザックの肩にとまり、光を発し始めた。

「チー、それは…？」

” ハジツゲタウンを出るときソライシ博士が教えてくれたの！今のチーじゃ毒しか治せないけど、これでザック兄ちゃんの役に立てる！”

しばらくすると、ザックの胸の傷からの出血が止まった。

ザックの呼吸も多少なりとも落ち着いていたように見えた。

「よく戦ってくれた…よく持ちこたえてくれた…」

僕は安堵のため息をついた。

” みんな、ありがとう。今度は僕が戦う”

僕とルークは、猛烈な殺気を放つ鋼の騎士に向き合った。

” 次はお前が相手をしてくれるのか？青き波導使い”

シユバルゴが臨戦態勢に入り、周囲の空気が張り詰めていく。

ルークも無言で構えた。両腕で構えているルークの姿を見るのは随分と久しぶりな気がした。

”波導使いと戦うのは久しいな。お前も俺を楽しませてくれ！”

・リフレッシュ
・（後書き）

万能ソライシ博士。

- 壊れるまで - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザンゲース(ザック)

チルット(チー)

コモルー(ルー)

- 壊れるまで -

「ああ、戦う前に一つ言っておくが」

灰色が緊張感の無い声で話しかけてきた。

「今回の戦いは、完全にポケモン同士に任せているんだ。だからお前も口出しすんなよ」

「……………そう、なのか？」

「そうだ、スズ。俺もあの鋼の騎士と一対一で戦った。少なくとも俺にはアイツが何か手出しをしているようにには見えなかった」

「…わかったよ、僕も口出しせず静観する」

「はっ、信用のカケラもないな」

灰色が自重気味に言った。

当たり前だ。この男に限った話ではないが、灰色を信用する義理は何一つない。口出ししないと云ったが、僕は灰色の一挙手一投足を注視していた。

「口挟んで悪いなシュバルゴ。存分に戦ってくれ」

灰色がシュバルゴに言って、一歩下がった。

「忝い、主殿。来い、波導使い！」

「ルーク、頼んだ！」

僕も一歩下がっていった。

「うん、見ててみんな。絶対勝つよ！」

言うが早い、ルークは飛び出していった。

シュバルゴはそれを迎え撃つ形でルークに照準を合わせる。先に手を出したのはシュバルゴだった。大砲のような一撃がルークに向かって放たれる。

ルークはそれをかわし、連撃の置き土産をして再び距離を取った。

しかしシュバルゴは少しも怯んでいなかった。

そのままバックステップしたルークを間合いの外に逃がさず、追い討ちをかけるように槍を突き出した。

”さすがに大したダメージにはならんか”

槍はルークの腹部をえぐったが、大した怪我はしていないようだった。

”あの騎士の攻撃力は恐るべきものだが、当たらなければ怖くない。格闘タイプのルークには、大降りの一撃を見切るのはそれほど難しくはないはずだ”

しかし…と、ザックは続けた。

”格闘タイプの拳をまともにくらって涼しい顔をしていられるのはどういうわけだ。ルークの拳は決して軽くないのだが…”

”それどころかシュバルゴはそのまま反撃までしてきた。

”お前達はいくつか勘違いをしているようだから訂正しておいてやる”

それまで沈黙を守っていたアギルダーが語りかけてきた。

”第一に、シュバのタイプは鋼＋虫だ。故に、格闘術が格別弱点というわけではない”

アギルダーは淡々と続ける。

”第二に、シュバがずば抜けて打たれ強いわけではない。もちろん鋼である以上耐久力は高いが、アイツはそもそも痛みを感じない。気力でカバーしているという意味ではない。単純に、痛覚がないんだ”

「痛覚が…ない？」

僕は驚いて言った。

”ああ、そうだ。俺たちが今の組織に入る代わりに、痛みを感じぬ体に作り変えてもらう…それがシュバの出した条件だ。より戦いを楽しむために、あえてそうしたのだ。だからアイツは、少々ダメージで立ち止まる事はない”

それこそ壊れでもない限りな、とアギルダーは呟いた。

- ある作戦 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
ギャラドス(ギイ)
ユキメノコ(メメ)
ザンゲース(ザック)
チルット(チー)
コモルー(ルー)

- ある作戦 -

痛みを感じない。

果たしてそれがいい事なのか憂うべき事なのか、僕は迷ってしまっ
た。

あまり殴りあいのケンカなんてしたことが無い僕だったが、今まで
感じた事のある痛みを思い出して見た。痛みを感じない事は単純に
いい事のようにも思える。

”何を考えている、スズ”

突然ザツクが声をかけてきた。

「ザツク…痛みを感じないっていうのは、どういうものなのかなっ
て」

”…それだけだと聞こえはいいがな。あらゆる生物が備えている痛
覚という機能を捨てているわけだ。必ずどこかに歪は出る。それ相
応の、な。少なくとも俺は、痛みを捨てようとは思わん”

”青き波導使い。お前は命を奪った事はあるか？”

”…？突然なんだよ…”

突然のシュバルゴの問いかけに、ルークは不審げな声をあげた。

”数年前、イツシュのとある地域で大きな争いがあった”

シュバルゴは話し出した。

”俺達の組織は探し物をしていてな、それがあある塔に眠っていると
特定できたのだ。俺達もその作戦に狩り出された。かなり大掛かり
な作戦で、組織の中核となる錚々たるポケモン達もそれに参加して
いた。現地のポケモン達とも争いになったが、俺達は次々に蹴散ら
した。結局目的を達するには至らなかったが、あの時の血風の臭い
や土煙。我が槍が肉を貫く感触は鮮明に思い出すことができる”

”だから！突然なんだよ！”

” 殺す気でこい ”

” ！？ なっ … ”

” お前からは俺を殺してでも倒そうという気迫を感じられん。先ほどの獣の戦士からは刺すような殺気を感じたものだがな ”

” …… ”

” 俺は痛みを感じない。生半な事では止まらぬぞ ”

「 ルーク ! 」

僕は思わず声を上げた。

” スズ … ”

手出し無用というルールだったが、ルークには何者かの命を奪う存在にはなつてほしくなかった。

何を甘い事と思われるかもしれないけど、それでは灰色達と同じになつてしまふ。目的のためにあらゆる障害をあらゆる手段で排除しようとする、灰色達と。

” … 大丈夫。ありがとう、スズ ”

ルークはにつこり笑つて前を向いた。

” シュバルゴ、お前は戦闘を楽しみたいんだろうけど、僕達にはあまり時間がない。一気に決めさせてもらうよ ”

” ほう、それはつれないな波導使いよ。お前達は俺をここまで本気にさせたのだ、まだまだ楽しませてもらわねば困る ”

ルークは腰を落とし、掌を腰の横で構えた。

” それは … 先ほどの波導弾か？ あれでは俺を止めることはできんぞ。溜めが必要となる技は注意するのだな。俺の槍がお前を捕らえる ”

ルークの右腕が紅く光を帯び始めた。光を放っているのはシャンドラの炎呪の痕だった。

” … 殺さなくなつて、やり方はある。僕はお前達と同じにはならない ! ”

- 宿りし力 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザンゲース(ザック)

チルット(チー)

コモルー(ルー)

- 宿りし力 -

”！シュバ、炎だ！”

”なに…？”

それまで状況を見守っていたアギルダーが、突然動いた。

一瞬体が光ったかと思うと、アギルダーが突如ルークめがけて凄まじい獄炎を放った。

”なっ…！”

ルークもそのまま右腕のエネルギーを解放放つ。ルークのその掌からも業火が放たれて、アギルダーのそれと相殺された。

”アギルダー、貴様！”

加勢に入ろうとしたザックめがけて今度は巨大な闘気エネルギーの塊が放たれた。

”ザック、あぶない”

メメがザックの前に躍り出て、それを受け止める。メメの体に当たると、エネルギーは消失した。

アギルダーはその間にシュバルゴを連れ、灰色の元まで後退していた。

一瞬の出来事に、僕はただ見ていることしかできなかった。

”何をするアギィ！俺はまだ…”

灰色の元まで半強制的に移動させられたシュバルゴは、不満の残る声を発している。

”シュバ、忘れたのか？俺が組織に入るときに提示した条件を”

”……………退却判断の絶対権限”

アギルダーはしばらくシュバルゴを見つめていたが、やがて騎士は舌打ちをして大人しくなった。

アギルダーと灰色はしばらく意思疎通していたようだったが、やがて灰色が口を開いた。

「あーあ、わかったよ。お前がそう言うなら、ここらで退散か」

灰色は騎士と忍者をモンスターボールに戻す。

”雪女、獣の戦士、それに青き波導使いよ。手出し無用の約束を破って申し訳なく思う。俺達はこちらで引く”

「おい、俺達はここらで引いておいてやる。…正直炎には驚いたぜ。完全に俺達の弱点をつかれた」

次々と事が起こり流れについていけなかった僕だが、我に返って言った。

「ま、待て！ナギさんについてもっと詳しく…」

「ナギ……？ああ、ルネで撃墜したあの鳥使いの事か。その様子だとやはりお前の関係者か。残念だったな、俺も詳しくは知らない。俺も仲間内から聞いたただだからな。しかしお前の動揺っぷりを見れたのは気分がいいぜ。まあ精々足掻けるだけ足掻いてみることに。俺たちにとっちゃそれも楽しみの一つだ」

くつくと笑い、灰色は去っていった。

”アギルダーっていったっけ…あのポケモン。あいつも多分波導使いだ。僕が炎を撃つとき、僕の波導を読んで技を先取りされた”

ルークが自分の右腕を見ながら言った。

「そつえば、あいつらもポケモンと意思疎通しているようだった。波導の力ってルークだけが持っている訳じゃないんだ…」

”波導の力は誰もが持っているよ。素質がある者なら鍛えて強化することもできる。僕達の一族はそれが少し強いんだ”

「それにしてもあのアギルダーっていうポケモン…一瞬で状況を動かしたね」

”アギルダー…”

メメが呟く。

”思うのだが、恐らくアイツは本当は手出しするつもりはなかったのだろうな”

ザックが言う。

”痛みを感じぬとはいえ、ダメージ自体がなくなるわけではない。いわばシュバルゴは、体の異常を伝えるアラームが無いのと一緒に俺との戦いで消耗している上に炎を受けたのでは、危険だと判断したのだろう”

退却判断の絶対権限、だったか。

”ねえねえ、ルーク右腕治ったんだ!”

チーがぱたぱたと羽ばたきながら、ルークの右腕に飛び乗った。そうだ。それに。

「あの炎なに!？」

僕は今更ながらルークに問いかけた。

”そうだよ! あんなこと、前はできなかっただろ!”

ギイも驚いた様子だった。

”あれは…炎の呪いがもたらした副作用みたいなものかも。怨念だけが消えて、炎の波導をうまくコントロールできるようになったんだ”

呪いは思わぬ副作用をもたらしてくれたと言う事か。

話したいことはたくさんあった。ルークの腕のこと。新しい仲間のこと。

でもとりあえずは。

「カナズミシティについてからゆっくり話そうか…」

直接的な危機は、ひとまず去ったのだ。

「まあアギイはそういう権限を持ってるわけだし、俺も任せるつったから文句は言わねえけどさ」

灰色が言う。

「お前とシュバでやってりゃ、あいつ等倒せたんじゃないか?」

”…どうかな。獣の戦士以外の経験値は未だそれほど高くはなさそ

うだったが、決して楽な相手ではなかった。シュバも相当なダメージを蓄積しているはずだ。あの状態で炎を使う相手とやりあうには少々危険すぎる”

「ふうん…まあ、いいや。シュバも少し喋りすぎだったしな。久々に全力でやりあえて高揚してたのはわかるが、あいつらに与えなくていい情報与えちまった」

”…面目ない…”

「そういった意味ではアギイの退却判断もやっぱ妥当なところか。…そついや俺はその時はお前らと組んでなかったから当時の事はよく知らないが、あの作戦はかつてない規模だったんだろ？真偽はわからんが、イッシュの伝説まで相手にしたらしいじゃないか……。まあいいさ。あれだけの情報じゃあいつも何も気づきようがないだろ。とりあえず俺達はルネに戻るか」

- 宿りし力 - (後書き)

……し、静まれ……俺の右腕……ッ！

- On the other hand 6 - (前書き)

8番 ∴ ノリ

23番 ∴ シズク

シズク(23番)の所持ポケモン
マリル(マリちゃん)

ガヤガヤと騒がしい外からの音で、目が覚めた。

一体どうしたんだろう……。灰色達に統制されてしまっただけからのルネシティは全くと言っていいほど活気がなく、人間の集団が発するざわざわとした音を聞くのは久々のような気がした。

隣のベッドには畳まれた毛布が片付けてある。スズくんのお母さんは、もう起きて出かけたようだった。

何となくただならぬ雰囲気を感じ、私は急いで服を着替えて表に出た。

広場に人だかりができており、灰色が何やら演説をぶっている。

「君達のポケモンである事は明白だ。早く名乗り出たまえ」

私は近付くにつれ、次第に鼓動が高まるのを感じた。嫌な汗がにじみ出るようだ。

「私も一ポケモントレーナーとして、無闇にポケモンを傷つけるのはとても心が痛む。君達が早く名乗り出してくれる事を祈る」

ヒュウツ！と、ムチがしなる音と、何かが叩かれる音が聞こえた。

対象物は、小さな鳴き声を上げる。私はその声に聞き覚えがあった。マリちゃんだ。

なんで。どうして。

私は慌てて群集の中に飛びこんだ。

中心には灰色がいた。他の者達とは違い、頬に蛇の様な刺青が施してある。

「先日、このような手紙を運んでいるポケモンが発見された。が発見された。海底を探索していた私達の同胞が見つけてくれたのだ。これは明らかに町の状況を外部に伝える文脈であり、救援要請だ。私達は君達に真摯な姿勢で対応してきたつもりである。しかし、このような裏切り行為をされては私達も黙っているわけにはいかない。町の秩序を守るためにも、この手紙を出した者にはしかるべき措置

をとらねばならない」

迂闊だった。軽率すぎた。

戸惑い。後悔。怒り。悲しみ。目の前の灰色が言葉を発するたびに、様々な感情が私の胸の中で交じり合った。

マリちゃんの皮膚は裂け、瑞々しい青い肌には血が滲んでいた。幾度も幾度もムチで打たれたのだろう。

「痛いだろう… 苦しいだろう… かわいそうに。トレーナーの下に帰って手当てしてもらったらどうだ？」

灰色が手を止めて、囁く。

マリちゃんだけに言っているのではなく、これはトレーナーに向けての言葉でもあるのだろう。再び鞭が振り上げられた。

「…マ…！」

私が思わず叫ぼうとしたところを、ノリくんを抑えられた。

「8くん…！」

ヒュウツと鞭が空を裂き、再び小さな悲鳴が聞こえた。

我慢しろ、ということだろうか。

「せっかく耐えたマリルの気持ちをムダにするつもりか… 大丈夫、犯人をいぶりだす為にも、必要以上に痛めつけたりしないさ…」

本当にそうだろうか。

マリちゃんは私の方を見向きもせず。ただじっと耐えていた。

甘えん坊でいつも私にだっこされていたマリちゃんが、私の方を見向きもせずただじっと耐えていた。

私はこれ以上耐えられそうになかった。

- カナズミシティ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
ギャラドス(ギイ)
ユキメノコ(メメ)
ザンゲース(ザック)
チルット(チー)
コモルー(ルー)

- カナズミシティ -

「すごい…」

115番道路を抜けてカナズミシティにたどり着く頃には、夕暮時になっていた。

夕日に照らされる町を見た僕は驚いた。

今まで訪れたどの町よりも大きい。それに道路が綺麗に舗装されていて、土が見えるところはおよそ見当たらなかった。

近代的な通りを多くの人々が行き交っている。きっとルネシティなんかとは比べ物にならないくらいたくさんの方が住んでいるのだろう。

行き交う人々が着ている服もなんだかきれいで、僕の服装なんていかにも田舎者まるだしのようには思えた。それに長旅で、服もくたびれていた。

「みんな…とりあえずジムに向かおう」

僕は疲れた体を鼓舞し、足を進めた。

この町のジムリーダーの事は、少しだけ知っていた。

もちろん会った事があるわけではないのだが、昔母さんが、僕をこの町のトレーナースクールに入れようとしていたのだ。カナズミジムのリーダーは、そのトレーナースクールの教師も兼任しているらしいのだ。

ジムの外観は統一性があるのか他の町のジムとほぼ同じ形をしているため、すぐに見つけることができた。

僕は早速カナズミジムの門を叩いた。

「ツツジさんに用事？」

「はい、急ぎなんです。ヒワマキシティのジムリーダーの紹介状もあります」

僕はナギさんから受け取っていた書状を見せた。

「これはナギさんの……実は今、トウカシティのジムリーダーさん

がいらしてるんだ。そちらも大事な話らしいから、用事はその後でもいいかな?」

「なんですって?」

それは…タイミングがいいというかなんというか。

「実はトウカシティのジムリーダーさんにもお話があるんです。なんとかお取次ぎしていただけないでしょうか」

「うーん、そうか…ちょっと待っていてくれるか、今お二人に話を伺ってみるから」

僕は入り口でしばらく待機していたが、すぐにさっきのトレーナーの人が戻ってきた。

「二人ともお会いしてくれるそうだ。この廊下をまっすぐ進むとドアが見えてくるから、その部屋に入るといい」

僕はお礼を言つて、廊下を進んだ。

このジムは岩タイプのジムらしく、ジム内には岩をあしらった装飾が散りばめられている。

なんとなく荘厳に感じるジム内を進み、僕は部屋に入った。

「失礼します」

僕が部屋に入ると、二人分の視線が集まるのを感じた。

「ルネシティのスズといいます。今日はお二人にお話があつて参りました」

「ようこそカナズミジムへ。わたくしはジムリーダーのツツジと申します」

「私はトウカジムのセマリだ。よろしく」

僕は二人のいるテーブルまで向かった。

「わたくし達にお話があるそうですね」

「はい…まずはこの手紙を読んでいただけますか」

僕はナギさんが書いてくれた書状を渡した。

「セマリさん、これは…」

「ふむ…確かにナギくんの筆跡だ…」

読み終えたセマリさんが口を開いた。

「そこに書いてある事は事実です。カナズミシティにくるまでキンセツとフエンのジムリーダーの方にも協力を要請しています」

二人はなにやら目配せしていたが、やがてツツジさんが口を開いた。
「…実は、わたくし達が今日集まっていたのはナギさんのことも関係しているのです」

センリさんが低いトーンでゆっくりと告げる。

「ナギさんと連絡が取れないんだ」

僕は血の気が引くのを感じた。

- センリとツツジ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザンゲース（ザック）
チルット（チー）
コモルー（ルー）

- センリとツツジ -

「れ…連絡が取れない、というのは？」

僕は動揺を隠し切れずに言った。

「私達ジムリーダーは情報交換や技術の向上などを目的に、定期的に連絡を取り合ったり集まったりしているんだが…ナギくんから返事がこないのだよ。盗聴なんかを避けるため連絡は鳥ポケモンを通じて行っていたのだが…」

ルネシティ上空で鳥使いを撃墜…灰色が言っていた言葉が蘇る。

「あの……実は……」

黙っていても仕方ない。僕は灰色が言っていた事をそのまま伝えた。部屋の中が静まり返る。

「まさか…ナギさんが…」

「しかしスズ君から聞いた話と合わせて考えると、な」

「信じられません…ナギさんほどの使い手が…」

ツツジさんが呟く。

「私も信じたくはないが、あのミクリ君までが無力化されてしまっているというルネシティの状況を鑑みるに、可能性は高い」

可能性。つまり、ナギさんが灰色達にやられてしまったという可能性。

「そう…ですわね…」

しばらくの沈黙の後、ツツジさんが口を開いた。

「わたくし達も最悪の事態を想定して動いた方がよろしいでしょう。センリさん…」

「うむ。スズ君、私達も全面的に協力しよう。今までこの話をしたジムリーダーは誰だ？」

「ええと…ナギさん、アスナさん、テッセンさんです。合流地点のカイナシティに集まってもらっています。トクサネシティとムロタウンにはナギさんが向かってきているはずなんです…」

「うむ…この状況だとムロタウンは訪れていないと考えるのが妥当か…」

「そうですね。わたくし達もムロジムにコンタクトを取った方がよろしいかと」

「じゃあ僕がこのままムロタウンに向かいます。お二人はカイナシティで他のジムリーダーの方と合流なさってください」

「馬鹿を言うな。君を一人で行動させるわけにはいかない」

「そうですね。灰色の組織から追っ手がかかっている以上、単独での行動は危険ですわ」

「ムロタウンには…ツツジくん、同行してあげなさい。私はカイナシティに向かい、集まっているジムリーダー達に状況を説明しよう。…私が同行してもいいんだが、スズ君もむさいおっさんより若い女性の方が嬉しいだろう？」

「ちよつ、センリさん何を言ってるんですの!？」

慌てた様子でツツジさんが反論した。

「はっは。まあともあれスズ君、私達も全力で……って、どうした？」

僕は我に返った。安心し、力が抜けてしまったのだ。ここまでの疲労もたまっていた。

「疲れているのでしよう…無理ありません。今夜はジムに部屋を用意します、ゆっくり休んでいてください」

・ センリとツツジ ・ (後書き)

毎日暑いですねかし…

- 夜の語り - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザンゲース（ザック）
チルット（チー）
コモルー（ルー）

- 夜の語り -

シャワーを借りた僕はツツジさんが用意してくれた部屋に戻り、布団の上に大の字になった。

セシリさんはトウカシティに帰って行った。準備をして、早速カイナシティに向かってくれるそうだと。

これで僕が話をしたジムリーダーは五人。残るジムリーダーはトクサネシティとムロタウン。トクサネジムにはナギさんがコンタクトを取ってくれている事を期待するのであれば、残るはムロタウンのみだ。

そのムロタウンまではツツジさんが同行してくれるという。今まで一人で旅してきたことを思えば、なんとも心強い限りだった。

安心したと同時に、不安も大きくなった。ナギさんは果たして大丈夫なのだろうか。

灰色達に捕まってしまったのか。無事でいてくれるのだろうか。セシリさん達は連絡が取れないと言っていたけど…。

”スズ：ナギさんは大丈夫だよ”

僕の心を読んだかのように、ルークが話しかけてきた。

「ルーク：ありがとう。そうだよ、大丈夫だ、きっと」

僕は布団から起き上がった。

「そうだ… ゆっくりできる時間がなかったから、今みんなに紹介するね。流星の滝で仲間になった、ルーだ」

みんなにちゃんと紹介しようと思い、僕はルーをモンスターボールから出した。

「ルーはトレーナーとはぐれちゃったんだって。だから元のトレーナーと会えるまでっていう期間限定ではあるんだけどね」

”よろしく”

メメがルーの頭を撫でようとしたが、ルーは僕の後ろに隠れてしまった。

” あっ、お前せつかく姉ちゃんが…”

モンスターボールの中からギイの声が聞こえる。

” ギイ、しずかに。こわがってる”

” あたしはチー！よろしくね！”

チーはぱたぱたと羽ばたきながらルーのそばに寄って行っただが、ルーは未だに震えていた。

” もう、なにこのコ！せつかくみんなが挨拶してるのに、さっきから震えているばかりじゃない！”

” チー…よせ。俺はザック。よろしくな”

ルーの反応は相変わらずだった。

「はは…まあ、色々な事があつて疲れているのかもね。僕も疲れた…今日はもう休もうか」

” わかった。おやすみスズ”

メメはそういうと、ギイのいるモンスターボールに入ってしまった。

” 俺達も寝るか”

” うん！みんな、おやすみ！”

ザックとチーもモンスターボールに戻る。

” 今日は僕もモンスターボールか。じゃあ先に寝るね、スズ”

ルーくもボールに戻った。

「ルーく…腕が治って本当によかった。僕は…もし腕がずっとこのままだったら、」

” スズ”

ルーくが僕の言葉を遮った。

” スズもあの時、僕達の前に立って庇ってくれた。同じ目に遭ったのはスズだったかもしれないだよ。それに、生身であんな炎を受けたら呪いどころの話じゃなかった”

「それは…」

” だから、そういう事は言いつこなしだよ。僕はスズが無事で本当によかったと思ってるんだ”

「ルーく…」

ルークは少し照れくさそうに言った。

”さて、僕も寝るようかな。スズも早く寝ないと、また朝起きられなくてツツジさんにみっともない姿見られちゃうよ”

「それはまずい…」

ルークは笑っておやすみと言った。

”もうひとふんばりだよ、スズ。おやすみ”

「ありがとう…おやすみ、ルーク」

僕達はあるという間に眠りに落ちていった。

- 空の旅 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
ギャラドス(ギイ)
ユキメノコ(メメ)
ザンゲース(ザック)
チルット(チー)
コモルー(ルー)

- 空の旅 -

「ズさん、スズさん」

意識の彼方から女の人の声が聞こえる。どうやら僕を起こそうとしているようだ。

「おはようございます、スズさん」

どうやら僕はまた起きられなかったようだ、ぼんやりと思った。

「すいません…どうも僕、寝起きが…」

僕はゆつくりと上半身を起こし、言った。

「かまいませんわ、長旅で心身ともに疲れているのでしょうから…でももうお日様も高いところまで登っている事ですし、そろそろ起きていただけると嬉しいのですが」

クスクスと笑いながらツツジさんは言った。

無理やり意識を覚醒させた僕は、昨日三人で話していた部屋に向かった。

ドアを開けると、パンの焼ける匂いやコーヒーの香りが鼻をくすぐる。

「おはようございます…」

「おはようございます、スズさん。さあ、あまりゆつくりしてはいられないでしょう？朝ごはんを食べて出発しましょう」

テーブルの上には二人分の食事が用意されていた。僕達は早速向かいあって少し遅めの朝食を取った。

「スズさんはムロタウンには行った事がありますか？」

「いえ、初めてです。僕は今までルネシティから出たこともなかったもので…」

まあ、とツツジさんは驚いた様子で言った。

「そうでしたか。本当はカナズミシティも案内してさしあげたかつ

たのですが、状況が状況ですからね……」

ツツジさんは少々残念そうに言った。

何もカナズミにくるのはこれが最後というわけではない。ルネシテイに平穏が戻ったら、僕は一度ホウエン地方をゆっくり回ってみたいと思った。ミナモシテイのデパートでみんなと買い物してみたい。随分と世話になったモナミさんにももう一度会ってお礼を言いたいし、フエンタウンの温泉にもゆっくり浸かってみたい。前はアスナさんと一緒だったからあまりリラックスして入浴できなかったのも、今度はじっくりと。

僕は少しだけ楽しい想像をしつつ、残りのパンにかぶりついた。

「では、早速ムロタウンに向かいましょう。スズさん、準備はよろしいですか？」

僕は頷いた。

「ムロまではどうやって向かうんですか？もしかして、ギイに乗っていくとか……」

ムロタウンは海を隔てている。

昨夜ギイに聞いてみたのだが、曰く「短距離ならいけるが長距離は今のオイラの實力では無理」だそうだ。随分時間がかかってしまうし、自分一人ならばともかく乗っている者に気を使いながらの海の旅はそれなりに消耗してしまうとの事だ。また、ギイはダイビングも使えるらしい。父親が使うのを昔から見ていたといっていたが、こちらの方もまだ腕は未熟なようだった。

「ふふ、海の旅も魅力的ですが、ここは私に任せてください。プテラ！来てください！」

ツツジさんがモンスターボールを投げると、中から巨大な鳥が現れた。皮膚はゴツゴツしていて、なんだか荒削りな岩のような雰囲気がある。プテラは大きな翼を広げると、高いトーンで一声鳴いた。ツツジさんに顎の辺りを撫でられて甘えているプテラをしばらく見

ていたが、僕はふと気がついた。

…ん？

ということとは…まさか、空から？

ツツジさんは振り向いて言った。

「私のプテラに乗っていきましよう。ムロタウンまではそれほど距離はありませんから、すぐに着くでしょう」

「ギイ！ギイ！なんとかがんばれないの！？」

僕は必死で懇願したが、ツツジさんは僕を引っ張るとプテラの背に飛び乗った。

- 空の旅 - (後書き)

割とどうでもいい事ですが、主人公は高所恐怖症設定です。
忘れてる方、途中からの方も多いかと思いますが、一応^^^;

- ムロタウン - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザンゲース(ザック)

チルット(チー)

コモルー(ルー)

- ムロタウン -

「わ、わわ！」

僕達を乗せると、プテラは大空に舞い上がった。

見る見るうちに大地が遠ざかっていく。僕は早くも目を閉じた。今まで感じたことのない浮遊感が襲ってくる。

「ふふ、スズさんは空を飛ぶのは初めてですか？」

「は、はい！」

僕は恐怖のあまりツツジさんにしがみついていた。

本当に外の世界は始めてのことだらけだ。

「せっかいですから、景色を堪能しては？」

ツツジさんの気持ちよさそうな声が聞こえてくるが、こちらはそれどころではない。目を開けたら、僕は間違いなく気絶する自信があった。

フエンシティに行くときに乗ったロープウェイも恐怖を感じたが、直に風を受けている分、現在の状況の方が恐ろしかった。

「ツツジさん…ナギさんは大丈夫でしょうか…」

僕は口を開いた。何か話していたほうが少しでも気がまぎれると思っ
たし、どうしてもナギさんのことを考えてしまう。

考えても答えは出ないが、一人で考え込んでいるのは悶々としてしまい、結果思考がループに陥ってしまう。

「…確実な事は言えませんが…今はまだ情報が少なすぎますから…」
ナギさんは少しの沈黙の後、答えた。

「ですが、わたくし達はこのホウエン地方を代表するトレーナーとしてジムリーダーを務めておりますのよ。どこの誰とも分からぬ不逞の輩にそうそう簡単にやられてしまうわけにはいきませんわ」
そう言っ
て微笑んでくれたツツジさんは、なんだかとても力強かった。

どのくらい飛行していただろうか。ツツジさんの声が聞こえた。

「スズさん、ムロタウンが見えてきましたよ」

僕はおそろおそろ目を開いた。前方にそれほど大きくない島が浮かんでおり、家々が小さく見えた。あれがムロタウンだろうか。遠めに見る限り、町の規模はルネシティとそれほど変わらないように思えた。

プテラは一度島の上空をぐるりと回り、砂浜に向かって降下し始めた。徐々に大地が近付いてくる。

あともう少し… あともう少し…

「？ツツジさん、あれは何ですか？あの砂浜の…」

母なる大地に近付くにつれ、砂浜になにやら四角い建造物が見えてきた。石造りの不恰好なものだが、あれは…リング？

「あら、あれは…そういうえばこの時期のムロタウンは…」

ツツジさんは思い出したように言った。

「闘技大会が催される時期ですわ」

- トウキ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザンゲース(ザック)

チルット(チー)

コモルー(ルー)

- トウキ -

プテラは砂浜に無事着陸し、僕達はムロタウンに降り立った。よく晴れていて、水平線の向こうまで見渡す事ができる。

大地を踏みしめる事ができるというのは、なんと幸せなことだろうか。地面というのは、当たり前すぎて気がつかない大切なもの一つだろう。間違いなく。

「おーい、ツツジい！」

ざっざつと、砂浜を走ってくる音が聞こえてきた。

「あら…あの声は…」

声のした方を振り向くと、何やら洒落た板のような物を持った男性がこちらに向かって走ってくるところだった。

あれはサーフボードというやつだろうか。

走ってくる男性は、海を彷彿とさせるような青い髪をしている。

「お久しぶりです。よくわたくしが来たのがわかりましたね」

ツツジさんはにっこり微笑んで言った。

「サーフィンしてたらお前のプテラが飛んでくるのが見えたんだよ。それよか久しぶりじゃん！どうしたの、今日は……………って、お前誰だ？何してやがる！」

青い髪の男性は、僕の姿をじろじろ見た。

空の旅があまりに必死だったため指摘されるまで気がつかなかったのだが、僕は未だにツツジさんにしがみついたままだった。

「あつ…」

僕は慌ててツツジさんから離れた。

「おいお前！ツツジとどういう関係だ！」

青い髪の男性が僕に詰め寄ってくる。

「いや…えつとその…」

僕があたふたとしていると、ツツジさんも焦ったように口を開いた。

「トウキさん、違いますの。この方はスズさん。実は今日ムロタウンに来たのは…」

「いや、いい！聞かん！」

ツツジさんの言葉を、トウキと呼ばれた男性は遮った。

「俺に話を聞いて欲しかったら俺を倒してからにしろ！」

「何を言ってるんですの、トウキさん！彼は」

「ツツジと付き合うなら、それなりの力を持ったやつじゃないと俺は許さん！なんだその見るからになよなよとした…」

「もう、話を聞いてください！」

「決闘場所は、優勝をかけた闘技場の上だ。楽しみにしてるぜ」

言いたい事を言い終えたのか、青髪の男性は去っていった。僕は一部始終をぼかんとしてみている事しかできなかった。

「なんということでしょう…」

ツツジさんのため息が聞こえた。

「闘技大会？」

「ええ。ムロタウンではこの時期、格闘大会が開催されるんですの。ムロは小さな町ですけど、格闘家達の間では由緒ある大会として知られているんですよ」

初めて聞いた。最も僕は格闘技に興味があるわけではないし、ただでさえ世間の事を知らなさ過ぎるので、一般的にどの程度の認知度の大会なのかを計る指標にはならなかった。

「それで…その大会がなにか？」

「トウキさんは言い出したら聞かない方ですから…少なくとも大会が終わるまでは会ってくださいさらないでしょう…面倒な事になってしまいましたわ」

ツツジさんは頭を抱えるようにしている。

「わたくしが歳若くしてジムリーダーに就任したせいか、トウキさ

んはわたくしに対してちょっと過保護なところがあるんです。それは嬉しい事でもあるんですけど…どうやらわたくし達がその……

お、お付き合っているとは勘違いされたようで……」

ツツジさんは頬を赤らめながら言った。
「ええっ……！」

僕も驚いた。そういえば僕はムロタウンについてからもずっとツツジさんの腕にしがみついていた。勘違いさせてしまったのは明らかに僕のせいだろう。

でも…と、僕はいまひとつ状況がつかめず言った。

「あのう…その事とジムリーダーにお会いするのとは何か関係が？」

ツツジさんは一瞬ぼかんと僕を見たが、やがて頷いた。

「ああ、スズさんはご存知なかったのですか？ムロジムは格闘タイプのジム。ジムリーダーは……」

ツツジさんはため息をついて、告げた。

「先ほどの男性…トウキさんなんですの」

僕はようやく、面倒な事になったと思った。

- トウキ - (後書き)

ああ夏休みが終わってしまう

- 出場要綱 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザンゲース（ザック）

チルット（チー）

コモルー（ルー）

- 出場要綱 -

「つまり…そのトウキさんが主催する闘技大会に出場して、勝てと？」

僕は恐る恐る口に出した。

「勝て、とは言いませんわ。しかしどの道大会が終わるまでトウキさんはお話を聞いてくれないと思いますの。スズさんはルカリオをお持ちのようですし、修行の一環として参加してみてはいかがでしょうか？」

「で、でもこの大会はタッグマッチなんですよ？ 僕の手持ちで格闘ポケモンはルークしか…」

「あら、心配には及びませんわ」

ツツジさんは何やら紙を取り出した。どうやら参加要綱のようだ。僕はざっと目を通した。参加資格は至ってシンプルだった。

- - - -

・ 格闘家の誇りを重んじるポケモン

・ 格闘タイプの技を覚えているポケモン

- - - -

…ちょっと大雑把すぎやしないか。これでは捉えようによってはゴーストやエスパータイプのポケモンまで参加できることになってしまうではないか。

僕の言いたいことがまるで伝わったかのように、ツツジさんは言った。

「前にも申し上げましたが、この大会は格闘家の、格闘家による、格闘家のための、由緒ある大会ですの。ただ勝利のためだけにエスパーやゴーストタイプのポケモンを多様するトレーナーはおりません。みなさん格闘家としての誇りを大切にされているようですよ」

つまり、参加ポケモンは自然と格闘タイプかそれに準ずるポケモンに絞られるというわけか。

僕はため息をついた。

「……………ということは」

「ええ」

ツツジさんがにつこりと笑う。

「スズさんも充分参加可能と言う事です」

「とうわけなんだけど…」

僕は仲間達をモンスターボールから呼び出し、話をした。

闘技大会は明日開催だったので、ツツジさんは今晚の宿を取りに行ってくれた。

”僕はもちろんいいよ。これでも格闘タイプだし、こういう力試しの場はちよつと楽しそう”

ルークは参加を承諾してくれた。

「あと一名なんだけど…」

僕はみんなを見回した。

「メメはゴーストタイプだし、ギイは格闘タイプの技なんて覚えてないから参加は難しそうだ…チーやルーに出場させるわけにいいし…」

ザックのため息が聞こえた。

”…俺とルークで出る。ルールのある戦いの中で格闘の専門家達にどれだけ通用するか分からんがな”

「ありがとう…ザック、その、無理はしないで…」

”スズ、大丈夫！兄ちゃん是集落で一番強かったんだから！”

チーがザックの頭の上で誇らしげに言った。

”チー…あまり自らの強さを誇るな。それに俺達も所詮は閉じられたコミュニティの中で争い合っていたにすぎんからな。広い世界でどの程度力が通用するのか、もう少し試してみたくもある”

「うん、わかった。みんな精一杯がんばろう！」

” スズ、出るからには勝たないとだめだぜ！”

” だいじょうぶ、ふたりともつよい”

ギイとメメが多少興奮したように話している。

と、その様子を眺めていたルーが突然走り出した。

「る、ルー？どうした？」

僕は慌ててルーを追いかけた。

” ……！！”

ルーは砂浜にある参加者の登録手続きが行われているテントめがけて走っていき、エントリーの済んだトレーナーの前に立った。

「んあ……なんだ、お前ルーか？」

- 出場要綱 - (後書き)

D S l i t e が壊れたので修理に出しました。いくらかかりま
すかね…

- ショウ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ(ルーク)

ギャラドス(ギイ)

ユキメノコ(メメ)

ザンゲース(ザック)

チルット(チー)

コモルー(ルー)

- ショウ -

「る、ルー！どうしたの急に…」

僕は息を切らしながら突然走り出したルーを追いかけた。

ルーは一人のトレーナーの前に立って、何やら必死に訴えている。

「ああ、アンタこいつ拾ったの？」

ようやく追いつきゼエゼエと呼吸を整える僕に、そのトレーナーは言った。

「ええと……あなたは…」

「お前こそ誰だよ。俺はショウ。そいつの前のトレーナーだよ」

ショウはルーを顎でしゃくるように言った。

拾った…？前のトレーナー……？

なんだか話が微妙にかみ合わない気がした。

「なんだよその顔。コイツは俺が115番道路で捨てたんだよ」

「捨て…た？」

「ああ。せつかくドラゴンポケモン捕まえたと思ったのに、コイツいつまで経っても進化しやがらねえんだよ。わざわざ流星群まで覚えさせたのに、大した威力にもならないしな」

冷たい目で殻に覆われたドラゴンを見下ろす。

ルーは隣で悲しそうな声で鳴いていた。

「…ルーはあなたを追いかけて…流星の滝に迷いこんで、ゴルバツトに襲われていたんですよ！」

「知るかよ、そいつが勝手に迷い込んだんだろ。大体な、ゴルバツトなんかにはやられるようなドラゴンなんざ、俺はいらねえんだよ！」
おら、あっち行け！と、ルーを忌々しそうに蹴り飛ばした。

「や、やめてください！今は僕の仲間だ！」

僕はルーの前に立ってショウを睨み付けた。

「お前もドラゴンを捕まえて舞い上がってんだろ？残念だったな、そいつは進化なんかできないぜ。ルーみたいな臆病者が殻を破れる

もんか。臆病者は一生大空を飛ぶことなんかできないんだよ」

シヨウは馬鹿にしたように言い放った。

「……！その言葉を取り消してください！」

「嫌なこった。お前もさっさと新しいドラゴン見つけたほうがいいぜ。そんな役立たずなんか捨てちまえって」

「なんだと……っ！」

僕は思わずシヨウに詰め寄った。

「よせよ。お前も闘技大会参加者だろ？ここで争ってても仕方ない、決着は舞台の上でつけようじゃないか」

シヨウは不敵に笑った。

なんだかとても気分が悪かった。

”なんだアイツ、態度悪いな！オイラが噛み付いてきてやろうか！
” 憤るギイを必死でなだめ、僕は隣で力なく蹲るルーの硬い皮膚を撫でた。

「……あいつには絶対負けたくない……」

灰色達との戦いの中で、負けられないと思ったことはルネシティを出てから幾度となくあった。しかし、負けたくないとか心から感じたのは初めてのようない気がした。

・ ショウ ・ (後書き)

100話目のようです。読んでくださっている方、本当にありがとうございます (――) m

- 来訪者 -

大海原を一艘の船が進んでいた。

三人が乗っている。一人の男は船を漕ぎ、残りの二人はまるでその身を隠すように、マントとフードを纏っていた。

「悪いですねえ船頭さん。わざわざ運んでもらっちゃって」

「いやー、気にスナナ。どうせ俺もムロタウンに向かう予定だったからよ。ちようど今格闘大会が開かれる時期だからな。毎年楽しみだー」

「へえ、格闘大会ですかい…頭巾の兄さん、聞きました？中々…楽しそうなイベントじゃないですか」

「…」

どうやら二人は男性のようだった。一人は声質から、もう一人はその呼称からそれを判別することができる。

「特に興味はないですかい？」

「…」

頭巾の兄さんと呼ばれた男は相変わらず無口だったが、もう一人の男はしきりに話続けた。

「アタシは楽しみですねえ。なんかこう、血が騒ぐって言うかねえ」

「…」

「兄さん相変わらず無口ですねえ。コンビ組んでるアタシの身にもなつてくださいよお」

「…すみません」

「おおっ、しゃべってくれたね！こいつは嬉しいねえ！兄さん、あんな闘技大会って聞いてなんかこう、湧き上がるものとかないんですかい？」

「俺は…特に…」

ふーん、とおしゃべりな男は言う。

「そついうもんですかね」

「んじゃ、お二人さん気をつけてなー。つつてもここからム口は目と鼻の先だけど俺はもう一度戻ってお客さん乗つけてくつから」
「はいはい、ありがとうございますよ。んじゃ、行きますかね頭巾の兄さん」

おしゃべりな男は砂浜を踏みしめ、大きく伸びをした。

「シユバさんとアギイさんを退けたっていうお子さん、中々面白そうじゃないですか。そう思いませんかい？」

「俺は…別に…」

おしゃべりな男はため息をついた。

とその時、一陣の風が通り過ぎ、おしゃべりな男のフードがはぐられた。

「おわつと、いけねえいけねえ。兄さんは大丈夫ですかい？」

「…問題ないです」

「なんというか、そういうところもさすがですねえ。アタシとは違うや」

「…そんなことは…ビアルさんには本当に感謝してます…」

「よ、よしてくださいよ急に…さて、これからどうしましょうかねえ。格闘大会つても興味あるなあ」

二人はゆっくりと歩き出した。歩き出した二人を再び塩気を孕んだ風が吹きぬける。

「わわわつと…危ない危ない。海沿いは風が強いやね。気をつけなといけませんねえ」

再びおしゃべりな男のフードがはぐられた。

「…ビアルさん…何かで固定した方が…」

「すいませんすいません…ちよつと一旦どこかに隠れないとねえ…」
頭巾の男は、完全にフードを飛ばされてしまつて慌てているワニの様な頭部を持つ相棒に小さくため息をついた。

- 前夜祭 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}
ルカリオ(ルーク)
ギャラドス(ギイ)
ユキメノコ(メメ)
ザンゲース(ザック)
チルット(チー)
コモルー(ルー)

空に高く上っていた太陽が水平線に沈みかけている。ムロタウンに夕暮が訪れた。

なんとなくその風景はカイナシティを彷彿とさせるものがあつた。ツツジさんが取ってくれた宿で合流し、僕は一部始終を話した。

「それは…あまり気持ちのいいお話ではありませんわね…」
ツツジさんは表情を曇らせて言った。

「ただ、そのショウというトレーナーの方は去年も闘技大会に参加されていました。それなりの結果を残していたと記憶しておりますわ」

そうなのか。闘技大会で結果を残すというからには、かなりの使い手と考えたほうがいいだろう。

しかし勢いで言ってしまったとはいえ、後悔はなかった。
ルーはすっかりしよげ返ってしまったて、モンスターボールから出てこようとはしなかった。

「わたくしの方は…だめでした。やはりトウキさんに話を聞いてもらうには闘技大会が終わるまで待つしかないようです」
ツツジさんは申し訳なさそうにうなだれた。

「いえ、焦っても仕方ないです。それに誤解の原因は僕にあるわけですから…僕は僕でやれる事をやります」

「そう言つて頂けると助かりますわ…ところでスズさん、対戦相手はもう決まったのですか？」

「いえ、明日クジを引いてその場で対戦相手が決まるそうです。勝ち残ったもの同士で戦つて、最終的に勝ち抜いたものが前回チャンピオンのトウキさんと戦えるとか」

考えてみれば、参加者の人数も大会の規模も、僕は全く分からなかった。

しかし、元より大会に向けて準備する期間があつたわけでもない。

できる全力を尽くすしかなかった。

ムロタウンの洞窟に、二つの影があった。シヨウと、そのポケモンだ。

ドクログという猛毒を持つポケモンだった。

二人は明日の大会への最終調整のため、大会にエントリー後洞窟に籠っていた。

「あのスズとかいうガキ、気に入わねえなあ……初戦であたらねえかなあ」

ブツブツと呟いていたシヨウに、応える声があった。

「当たるといいですねえ」

突然聞こえた声に、シヨウは驚いて振り向いた。そこにはフードで顔を隠した二つの人影が立っていた。

二人は薄暗い洞窟の奥から徐々に近付いてくる。

「あん？何だあんたら」

「いえね、兄さんも大会に出場なさるんでしょう？ちょっと相手をしていただけないかなあと思いましてね」

「模擬戦希望かい？いいぜ、俺達も明日に備えてちょっと調整しようと思っていたところだ。なあドクログ」

ドクログはシヨウを見て、頷きを返す。

「へへ、楽しみですねえ……じゃ早速」

「あ？ちよつとまで、あんたが準備してどうす……」

言い終わる前に、フードの男は動いていた。

慌てて臨戦態勢に入ったドクログの首根っこを無造作に掴み上げ、放り投げる。

体勢を崩しながらも着地したドクログに畳み掛けるように当身を浴びせ、洞窟の壁に叩きつけられたドクログは昏倒してしまった。
「なっ……………」

シヨウは一瞬で起こった出来事にあっけにと取られていた。

「終わりですかい？なんだ、大したことないですねえ。闘技大会つてのもこの程度のレベルなのかな？これじゃあ砂漠にいた頃の方がよっぽど齒ごたえがある方々がいましてがねえ……」

「な、何言つてやがる！ただの模擬戦でここまでやるやつが………っというか、お前なんなんだよ！なんで生身の人間が格闘ポケモン倒せんだよ！」

フードの男は一瞬動きを止めたが、しばらくすると笑い出した。

「はっはっは！こいつは可笑しいねえ。生身の人間が……ですかい」
尚も笑い止まないフードの男に、シヨウはイラついた素振りを見せる。

「ああ、すいませんねえ。すいませんすいません。いえね、兄さんがあまりに滑稽な事を言うからついね」
くつくつと、笑いながら続ける。

「兄さん、そもそもポケモンと人間って何が違うんですかい？ポケモンだって色んな種族がいるじゃないですか。空を飛べるヤツ。海に潜れるヤツ。土の中に住んでるヤツ。あんた達人間だけ特別な種なんですかねえ」

「な、何言つてんだ？」

シヨウはフードの男の言う事が理解できなかった。ポケモンはポケモン。人間は人間ではないか。

あんた達人間。それではまるで、フードの男が人間ではないような口ぶりではないか。

「あんた達人間だけ特別なわけじゃあないんじゃないかなあとアタシは思うんですがね……まあ、そんなのはどうでもいいや。あんた達のその感覚で言うなら、この場にいる”人間”は兄さんだけでさあ」
フードの男二人はおもむろにその体に纏っていたものを脱ぎ捨てた。

「……お前……その姿……！」

フードを脱ぎ捨てたそこには、想像していたものとは違う生物の姿が存在していた。

ワルビアル。イツシュ地方に生息している、ワニの様な姿を持つポケモンだった。姿があらわになると、寧猛そうな気性がより強く感じられた。

もう一体は頭部に鶏冠が逆立っており、体はドラゴンを彷彿とさせる作りをしていた。こちらもイツシュに生息している、ズルズキンというポケモンだ。

シヨウは動揺しながらも疑問を投げかけた。

「え……ポケモン？だって、人間の言葉を……」

動揺を隠し切れないシヨウに向かって、ワルビアルは威圧するように一歩を踏み出す。

目と鼻の先まで接近したところでワルビアルは口を開いた。

「それで兄さん、一つお願いがあるんですが、聞いちゃくれませんかねえ」

- 前夜祭 - (後書き)

9月はゲームが豊作すぎて更新頻度がゴニョゴニョ

- 頭巾と砂ワニ 1 - (前書き)

登場人物

ワルビアル… ビアル

ズルズキン…

日は落ち、洞窟の中に濃い闇が訪れた。

薄暗い洞窟の中は静まり返っていたが、やがて静寂をかき消すように声が聞こえてきた。

「ねえ頭巾の兄さん。アタシが砂漠にいた頃の話ですわ」

洞窟内に反響する声。

「……」

「相変わらず聞いてるんだか聞いてないんだかわかりませんねえ。夜が明けるまでまだ長いですよ？ 少しくらい暇つぶしに付き合ってくれても……まあいいや」

勝手に続けますねと、おしゃべりな声は話し続ける。

ズルズキンは洞窟の壁にもたれ掛かり、ビアルの言葉に返事をするでもなく目を閉じていた。

「ワルビアル一家ったら、砂漠じゃ知らないやつなんていませんでしたよ。争いとなれば尻馬に乗っかって大暴れしてましたし、砂漠の勢力争いなんてのも性懲りもなく続けてました。今思えばくつだらないのにねえ」

「……知ってますよ……俺もそこにいた」

「おお、やつとしゃべってくれましたねえ！」

ビアルが嬉しそうな声を上げた。

「そういえばあの時は驚きましたよ。兄さんがいきなりアタシらに因縁ふっかけてきて……いや、ありやそういうのじゃないですかね。

あの頃の砂漠で単独でアタシらにケンカ売ろうなんて輩は、よっぽどのお馬鹿さんか世間知らずだったからねえ」

どっちも大して変わりませんかねえと、ビアルは笑う。

「少数派だったウチとしては兄さんもアタシらの一味に加わってくれて助かりましたがね……ま、結局アタシらも井の中の蛙って事だったんでしょうが」

「ビアルさん…」

あの頃が懐かしいですねえ…と、ビアルは少し感傷をこめて話し続けた。

・ 頭巾と砂ワニ 1 ・ (後書き)

20万アクセスを超えました。

本当にありがとうございますm(´`´)m

- 頭巾と砂ワニ 2 - (前書き)

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

砂漠。

砂。

砂。砂。

見渡す限りの砂でございます。

時には砂嵐が吹き荒れ、時には灼熱の太陽に焼かれる死の世界で生き残るためには、少ない資源を手に入れなくてはなりません。分け合うか、奪い合うか。

生きるか死ぬかの世界で、前者を選択する者はごく稀でございました。

あの頃の砂漠はそこに生きる者達の間で争いが生まれ、修羅の時代を迎えておりました。

「おいお前さん達、今日の戦果を報告してくださいねえ。さあ、一番上の兄さんから」

洞穴の中から暢気な声が聞こえてまいります。いかにも若々しい声がそれに応えます。

「マラカツチ共が拠点にしていたオアシスを奪ってやったよ。2, 3匹吹き飛ばしてやったら蜘蛛の子散らすように逃げていきやがった。貴重な水源をあいづらに使わせておくのはもったいねえからな」
「ふむふむ、相変わらず上の兄さんいい仕事しますねえ。じゃあ次、真ん中の兄さん、おねがいしますねえ」

いかにも落ち着いた声がそれに応えます。

「私達の拠点の近辺で砂漠北部の最大勢力、ヒヒダルマ達のものと思われる痕跡を発見しました。痕跡を隠そうとしていない…やつ等、明らかに挑発しています」

ヒヒダルマというのは、砂漠の北部を仕切っている最大勢力です。

勇猛であり寧猛であり凶猛な長として知られる狒々王を筆頭に、徐々に砂漠全域に勢力を拡大しようとしている模様でございました。「ふむふむ、真ん中の兄さんはいいい目を持っていますねえ。あいつらの動向には気をつけなくちゃいけませんね。最後に、一番下の妹さんはどうですかい？」

いかにも元気のいい声がそれに応えます。

「私は、これを見つけたの！」

「これは…イシズマイの殻ですかい？ははっ、さすがですねえ」

一番下の妹は得意げに胸を張りました。

「目下のところ気をつけるのはヒダルマさん達の動きですかね…。兄さん達のおかげでアタシらは砂漠南部の最大勢力となることができました。本当に礼をいいますよ」

ビアルは改まって礼の言葉を告げました。

「何言つてんだよ。俺達はアンタについてるんだぜ、ビアルさん」

「ははっ、そうまで言われちゃあかつこいいところ見せなくなっちゃいますね。どれ、明日にでもヒダルマの連中のところ牽制にいつてやりますかねえ」

ビアルが腕を振り回しながら言いました。

「砂鰐が直々に動くとなつては、あいつらも青くなるでしょうね」

真ん中のワルビルが誇らしげに言いました。

砂鰐というのは、かつて砂漠南部の数々の勢力を単独で殲滅してきたビアルに付いた二つ名でした。砂鰐に狙われたら逃れる術は無いとまで言われ、南部を代表する畏怖の存在でございます。

「おお、オレも一緒に行つていいかい！？」

一番上のワルビアルが同行を申し出ました。

「そうですねえ。真ん中の兄さんの報告の感じだと本格的に事を構えるって感じじゃなさそうですから、この近辺のやつ等の拠点にはそれほど戦力はまだ常駐していないでしょうね。今後のためにも達磨さん達相手の実戦を経験しておくのもいいかもしれないですね」

「よし、決まりだ！へへ、俺達もいつまでもビアルさんに守られて
ばっかりじゃないってトコ見せてやるよ！」

「メグは？メグは？」

一番下のメグロコが、楽しそうに聞きました。

「一番下の妹さんは、ここを守っていてくださいね。アタシ達の帰
る家がなくなったりしたら大変ですからねえ」

わかった！と、メグは元気よく頷きました。

こいつは頼もしいですねえと、ビアルは笑ったものでした。

翌日、ワルビアル一家はヒビダルマの拠点を見下ろす事のできる砂
山の上に立っております。都合のいい事に砂嵐が吹き荒れており、
一家の姿を隠してくれているようでございます。

「あれがヒビダルマさん達の拠点ですか。見張りは…こちらには気
づいていないようですねえ。どれ、それじゃあ早速」

ビアルが鼻唄まじりに力をこめた右腕を地面に突き立てると地面が
割れ、ヒビダルマの拠点の一つが砂の中に沈んでゆきました。驚い
たヒビダルマ達がわらわらと拠点から出てまいります。

「出てきなすったね。…それでは皆さん、達磨落としても始めると
しましょうかね」

ワルビアル一家は颯爽と砂山を滑り降り、動揺の渦中にいるヒビダ
ルマ達に飛び掛ってゆきました。

- 頭巾と砂ワニ 2 - (後書き)

本編の少し前。ワルビアルとズルズキンがイッシュの砂漠にいた頃のお話です。

しかしワルビアル一家のネーミング安直すぎますね我ながら。

- 頭巾と砂ワニ 3 - (前書き)

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ビアルはその手に掴んでいる真つ赤に染まったヒヒダルマを無造作に放り投げると、仲間に問いかけます。

「真ん中の兄さん、ヒヒダルマ共の様子はどうです？」

ビアルは高台の上から戦場全体を見渡していたビルに尋ねました。

「奴ら北へ逃げ帰って行きます。恐らく本隊のところまで戻るつもりでしょう。この拠点は捨てたものと考えていいかと」

砂嵐の中でもその性能は衰えを見せないようでございます。

ビルはその千里を見渡せる目で、状況を報告しました。

「真ん中の兄さんは相変わらずいい目を持っていますねえ。さて、今日のところはこんなもんですかねえ」

完全に不意を付かれたヒヒダルマ達はただただ動揺するばかり。慌てふためくヒヒダルマ達をワルビアル一家は次々と蹴散らし、ヒヒダルマ達の先遣隊を潰したのです。

「ビアルさんはやっぱりすげえや。砂漠で一番強いんじゃないの！」
ビアル同様ヒヒダルマの殲滅に精を出していたアルも戻ってきました。

「ははっ、一番上の兄さんも随分力強くなってきましたよ。この分なら砂漠を制圧するのも時間の問題じゃないですかねえ」
ビアルは豪快に笑いました。

一仕事を終えて拠点への帰路についた一行でしたが、拠点が近付くにつれてビアルは何やら妙な気配を感じておりました。

「…何だか妙な感じがしますね…」

拠点の中から、留守を任せてきた一番下の妹であるメグ以外の気配がするのです。敵意のようなものは感じられませんでした。なんとも掴みがたい空気が漂っていたのです。

「…ダルマさん達の残党つてわけでもなさそうだし…兄さん達、少々気い張つといてくださいね」

二人の兄弟達はまだ何も感じていないのか顔を見合わせておりましたが、ビアルの様子を見て浮き足立っていた気持ちを落ち着かせました。

「お前が砂鰐か？」

拠点に入ると同時に、洞窟の中に反響するように声が聞こえてまいりました。

聞き覚えの無い声でございます。ビアル達は注意深く進むと、大きく円形に開けている拠点の最奥にメグと、もう一つの影がございました。

ほう…と、ビアルは声を発しました。

「ズルズキン…ですか。おかしいですね…ズルズキンさん達はだいぶ前にこの砂漠から退場して頂いたはずですが…」

影の正体はズルズキンと呼ばれるポケモンでした。

ビアルは以前ズルズキン一派と、砂漠南部の支配権を巡って争った事があったのでした。

争いの結果につきましては、ここにこうして砂鰐が健在という事が、示しております事でしょう。

「俺と手合わせ願いたい」

ズルズキンはこちらの返事を待たず、すでに戦闘態勢に入っているようです。

「ははっ、随分好戦的な兄さんですね。追い出された仲間のあだ討ちですかい？」

ズルズキンは無言で、攻撃的な気をビアルにぶつけておりました。

「ビアルさん、ここは俺が…わざわざ砂鰐が戦うまでもねえよ」

アルが口を挟みましたが、ビアルはそれを制しました。

「悪いが、アタシにやらせてくだせえ。ちよいと戦闘の後で気が立

つててね……」

もちろん、それもありました。しかしそれ以上に、兄弟達にこのズルズキンの相手をさせるのは少々荷が勝ちすぎていると感じたのでした。

- 頭巾と砂ワニ 4 - (前書き)

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

目を覚ましたズルズキンは、砂で出来たベッドの上に寝かされている事に気がつきました。

ここは…俺は…砂鰐と戦って…

「ああ、目が覚めましたか」

入り口からまさにその砂鰐の一味がのっしと入ってまいりました。思わず上半身を起こしたズルズキンでしたが、直後に激痛が走り体がまともに動きません。どうやら酷くやられたようだ、ズルズキンは今更ながらに認識しました。

「痛くしちまつてすみませんねえ。どっか動かないところありますか？」

「どういいうつもりだ、砂鰐」

ワルビアル一家に目線を移し、ズルズキンは言いました。

「いや、申し訳ないねえ。あの状況じゃ手加減する要素が何一つなかったですからね。この砂漠で見ず知らずの他人を信用するってのは中々難しいもんで…いや、アタシ達もだまし討ちなんてもんは何度もやってますよ。でもね、自分がやってるからって、同じ事やられて許すかって言われたらそういうモンでも無いでしょう。ま、何はともあれ別に兄さんが憎いわけじゃない。考えてみればアンタは、アタシ達が帰ってくるまで一番下の妹さんと二人つきりだったのに、人質を取るようなマネはしなかったしねえ」

ズルズキンは黙ったままでした。

「ところでアンタ、なんでこんな事したんだ？確かに中々腕は立つようですが、さすがにアタシら相手に敵うと思ってたわけじゃねえでしょう。いくらなんでも多勢に無勢、それがわからないほどアンタは弱くなかった。仲間達の復讐に燃え滾ってたってトコですかい？」

「…俺には仲間はいない。ずっと一人で生きてきたんだ。俺の周り

には誰一人いなかった」

「だったら尚更アタシ達に挑んでくる理由がわかりませんね……まあ、いいか。アンタ、これからどうするんですかい？」

「……わからない」

「わからないって……アンタ生まれはこの砂漠ですかい？」

「……」

「アンタなんにもわからないんですね……」

ビアルは少し考えるようにしてから、口を開きました。

「アンタ、もしかかったらアタシ達の仲間になっちゃくれないですかねえ？」

「……？」

「アタシ達の仲間になれば戦闘には困りませんぜ。もう少し頭数も欲しいと思ってたところだったし、アンタだったら申し分ない強さだ。どうでしょ、一丁アタシラに力を貸してくれないですかねえ」

「ビ、ビアルさん……本気ですか！？」

ビルが驚いたように口を開きました。

「ええええ本気ですとも。考えてもみなさいな、これほどの使い手に他の勢力のところにつかれちゃアタシラとしても面倒だし、もし仲間になってくれるってんなら心強いでしょう。それにヒビダルマ達を制圧するには正直頭数がさすがに足りないと思いませんか？」

「私は反対です！そいつは何を考えてるかわからない。私達を襲った理由だってまともに話そうとしないじゃないですか！」

ビルが声を荒げました。

「まあまあ、落ち着いてくださいよ真ん中の兄さん。理由は聞いたじゃないですか、単なる腕試しだって」

「仮にそれを信じたとしてもしょう。だけど、そいつが私達と一緒に行動する理由にはならない！私達は四人でやってきたじゃないですか」

ビルはあくまで食い下がります。

「そうは言ってもねえ、これからはもっともっと厳しい戦いになっ

てくると思いますよ。ヒヒダルマさん達もこれから本腰を入れてくるだろうしねえ」

「ですが…」

ビルは俯いてしまいました。ビアルの言う事もつともであると感じていたのです。

「オレは賛成だぜ」

一番上のアルが言いました。

「さっきの二人の戦いを見る限り、俺の力じゃまだまだ至らない部分がある…悔しいけどよお」

「それを自分で認められただけでも大したモンです。アタシが保証します、兄さんはまだまだ強くなれますよ。……一番下の妹さんはどうです？」

メグは少しの間首をかしげて考えるようにおりました。

「メグは…わからないけど…でも、頭巾さんがいてくれるおかげで兄さん達やビアルさんの負担が軽くなるのなら、メグは頭巾さんにいてほしい！」

「優しい下の妹さんらしいですね。…真ん中の兄さん、どうでしょうここは一つアタシの顔を立てちゃくれませんか。頭巾の兄さんの行動についてはアタシが全責任を持ちます。何か問題を起こそうとしたらその時は真ん中の兄さんの言うとおりにしますから…」

真ん中のワルビルは納得が出来ない様子でしたが、最終的には首を縦に振りました。ズルズキンを信用したわけでは有りませんでした。が、つまりそれほどの影響力をビアルは持っていたのです。

「そういうわけで、後はアンタ次第だ…悪い話じゃないと思いますぜ。生き物ってのは何かしら目的を持つべきだ。どんな事にせよ、ね。もしアンタがまだアタシに挑みたいってんならそうすりゃいい。まだまだアンタに負ける気はしませんがね。アンタがウチの一家として大暴れしてくれば、アタシらも随分楽になる。アンタもレベルアップしてより強くなれる。お互い笑顔がこぼれるってわけです」ズルズキンはしばらくの間あっけに取られたようにビアルを見てい

ましたが、やがてため息をつき、布団に横たわりました。

「決まったようですね！よろしく願いますねえ、頭巾の兄さん」
ビアルは満足そうに笑ったのでした。

- 頭巾と砂ワニ 5 - (前書き)

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

「くそっ！勝てねえ！」

灼熱の太陽が砂の大地を照らしています。

焼けるような地面を叩いて悔しがっているのは一番上のアルです。

「お前は力は強いが猪突猛進過ぎる。もう少し緩急をつけたほうが攻めの幅も広がる」

「……今日はやめだっ！」

肩をいからせて、一番上のワルビアルは行ってしまいました。

ズルズキンがそれを見送っていると、ビアルが入れ替わるように拠点から出てきて言いました。

「ご苦労さん。どうですかい、一番上の兄さんは？」

「…攻め手に単調なところがあるけれど、中々強い。砂漠のレベルはわからないけど、経験を積みめば飛躍的に強くなると思う」

「そうですね！いやー親じゃないから親バカつても変ですがね、あの子達は中々見所があると思うってたんですよ。そうですね、そうですかそうですね」

それを聞いて、ビアルは嬉しそうに頷いておりました。

「そんな事より砂鰐、今日も頼む」

「そんな事って…せっかく人がいい気分だったのに。しかし頭巾の兄さんも懲りないですね毎日毎日…」

ぶつぶつと文句を呟きながらも、ビアルは戦闘体制にシフトいたしました。

それを見たズルズキンの眼光も、少しばかり鋭さを増します。

「どれ、じゃあ始めましょうか。どうした、攻めてこないんですかい？」

「…今日こそ」

ズルズキンが大地を蹴って、ビアルに向かって距離を詰めます。決して素早いとは言えませんでした、ズルズキンの動きは独特の捉

え辛さがありました。

「おっ…とっ…相変わらずとらえどころの無い動きですねえ」

よろめきながらもビアルはそれをかわすと、大振りの一撃を見舞いました。ズルズキンもそれをひらりとかわします。

間髪いれず、ズルズキンはビアルめがけて距離をつめて来ました。

「…確かに兄さんの動きは捉え辛いんですけどねえ、それだけじゃアタシに勝てないんですよ」

ビアルは微動だにしません。動きを止めた大柄なその姿はまるで的那样です。ズルズキンのとび膝蹴りが、ビアルに直撃しました。

「…頭巾の兄さんの攻撃は、ちよつと軽いんですよねえ。だから、アタシみたいな頑丈が取り得みたいなヤツにとつちや、一撃貰う覚悟でいれば」

ビアルはズルズキンの頭を鷲づかみにして地面に叩きつけて動きを封じると、その強靱な顎を開いてズルズキンの喉笛数センチ手前の虚空を食いちぎりました。

「ほらね、相手に致命傷を与える事が出来るんですよ」

ビアルは倒れているズルズキンに手を差し伸べましたが、ズルズキンはそれを拒みました。

「ま、アタシと頭巾の兄さんじゃあまだまだ実戦経験に差があるってだけかもしれませんかね。さて今日の戦いも済んだ事だし、キリキリ働いてくださいねえ。働かざるもの食うべからず、ってね。ささ、一番下の妹さんが兄さんを待ってますよ」

「…」

ズルズキンは汚れを払うと、いつの間にか拠点の入り口でこちらをみていた一番下のメグの下へ向かいました。

「頭巾のお兄ちゃん、お疲れ様！」

「…ああ」

「ビアルさん強いでしょー。ビアルさんはね、スナワニなの！」

メグは”砂鰐”という言葉の持つ意味を解っていないようでしたが、誇らしそうに言いました。

「…知っている。だからここにきたんだ」

自分の身一つで生きてきたブルズキンにとって、戦っているその時こそが唯一生きている事を実感できる瞬間なのでした。

「じゃあ行こう、そろそろお水が無くなっちゃうから」

「…」

ブルズキンは無言で歩き出しました。メグはそんなブルズキンの後ろを嬉しそうに付いて行くのでした。

- 頭巾と砂ワニ 6 - (前書き)

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

ズルズキンとメグの二人はしばらく砂漠を歩き、つい先日アルが制圧したオアシスへと向かいました。

オアシスはまるで生命力に満ちあふれているようです。

二人はオアシスのほとりまで進むと、持ってきた桶に早速水を汲みました。

「よし、これだけあればしばらくもつね！」

桶に汲まれた澄んだ水を見て、メグが嬉しそうに言います。

「…そうだな。用事も済んだことだし、戻るぞ」

ズルズキンがぶつきらぼうにいました。

「少し休憩していこうよ。メグ疲れちゃった」

ズルズキンはため息をつくと、小さく密集して生えている背の低い草の上に寝転がりました。

一歩外に出れば荒れ果てた砂漠が広がっているというのに、オアシスには穏やかな時間が流れています。

ズルズキンはぼんやりと、砂漠に流れ着くまでの事を思い返しておりました。

「ねえ、頭巾のお兄ちゃんはどうしてビアルさんと毎日戦ってるの？」

メグが唐突に質問を投げかけてきました。

「奴が強いからだ」

ズルズキンは簡潔に答えます。

「ビアルさん強いよねえ。メグ達のお父さんよりも強いかも！」

「…砂鰐はお前達の父親じゃないのか？」

ズルズキンはかねてから疑問に思っていたことを問いかけました。

「ワルビアル一家の兄妹達は砂鰐の事を”ビアルさん”と呼び、対してビアルは兄妹達のことをわざわざ回りくどい呼び方で呼んでいました。血の繋がったもの同士の間でそれがいかにも不自然であると

いう事は、さすがにズルズキンにも感じる事ができるのです。

「うっん、違うよ。お父さんは随分前にいなくなっちゃったの。それからね、ビアルさんが来てくれたのー！」

メグの回答はいまひとつ要領を得ませんでした。疑問自体は解消したので、ズルズキンはそれ以上聞き返しませんでした。争い合いが蔓延しているこの砂漠で何も告げずに姿を消したというのはつまり、決して歓迎すべき事態とは言いがたいのでした。

「…そろそろいくぞ。日が暮れる前に拠点に帰ろう」

「うんっ！」

立ち上がったメグが、ちらちらとオアシスを気にしている事にズルズキンは気が付きました。

「…？どうした？」

「うっん、なんでもない…」

ズルズキンがメグの視線を追うと、オアシスの底で何が光を反射しているのを確認できました。

「気になるのか？」

「別に！暗くなっちゃう前に帰ろう！」

明らかに意志に反する事を言っているメグに、ズルズキンはため息をつきました。

「…ちよつと待ってろ」

「え……あつ、頭巾のお兄ちゃん！」

そっくり残すと、ズルズキンはオアシスに飛び込みました。波紋が湖に広がります。

オアシスは思ったより深さがありました。ズルズキンは光ったあたりを目指して潜水を開始しました。

ズルズキンは自らの行動に不思議な感覚を覚えていました。

戦い、戦い、戦う。止まる時は生命の終わり。自らの事ですらその程度にしか考えたことがなかったズルズキンにとって、他者のために何かをするというのは始めてのことだったのです。初めて芽生えたこの思いを何と形容すべきなのかわからず戸惑いさえ覚えるズル

ズキンでしたが、それが嫌な気持ちでないことだけは彼にも解っておりまして。

ぼんやりと考え事をしながら水をかいているうちに、ズルズキンはターゲットにたどり着きました。

「これは…イズズマイの殻か？…そういえばメグの奴、これを集めているとか言っていたな」

光を反射していたのは、小さなイズズマイの抜け殻でした。ズルズキンはそれを拾うと、岸をめがけて再び泳ぎ始めました。

「…や…て！返……て！」

岸が近付いてくるにつれ、何やらメグの緊張した声が聞こえてまいりました。

- 頭巾と砂ワニ 7 - (前書き)

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

「返して！それはメグ達のお水なの！」

ズルズキンがオアシスから上がると、メグを取り囲むいくつかの影がありました。

砂漠北部の雄、ヒヒダルマの群れです。

「まずいな……」ズルズキンは思いました。このオアシスは完全にワルビアル一家の勢力下にあるのです。こんなところまでヒヒダルマ達が足を伸ばしているとは思っていませんでした。

「ほう、ズルズキンとは珍しい。貴様らの一族はこの砂漠から尻尾を巻いて逃げ出したと聞いていたがな」

オアシスから上がったズルズキンを見て、ヒヒダルマの一人が早速挑発してきます。

「貴様らの長、竜戦士も先の戦いで砂鰐に駆逐されたそうではないか」

「砂鰐ごときに遅れを取る種族だ。そもそもこの砂漠で生き延びられるはずが無い」

獰猛な鼻息と共に、ヒヒダルマ達は下品に笑いました。

ズルズキンは静かに立ち、ヒヒダルマ達の挑発をその身に受けています。

「……もういいか。水を持って帰らなければいけないんだ」

この状況で戦闘を始めるのは得策ではありません。自らが傷つく事に対して抵抗があるズルズキンではありませんでしたが、メグが巻き込まれる事を考えると、このまま乱戦になるわけにはいかないのです。

「はっ、腰抜けが。この周辺はまもなく我々ヒヒダルマとワルビアル共の戦闘区域になるだろう。せいぜい情けなく生き延びるがいい」ヒヒダルマ達はメグから奪った桶を地面に叩きつけました。桶が割れ、地面に徐々に染みを作ります。

「頭巾のお兄ちゃんを悪く言わないでっ！あんた達なんかビアルさんにやられちゃえばいいんだ！」

「メグっ！黙れ！」

それまで静かだったズルズキンの言葉に、メグはハッと我に返りました。

「ビアル…？」

その名前を聞いて、去ろうとしていたヒヒダルマ達が足を止めます。

「砂鰐の事か？貴様まさか、ワルビアル一家のメグロコか」

ヒヒダルマ達は目配せしましたが、すぐに意見が一致したようでした。

「お前、俺達と一緒に来い」

ヒヒダルマの一人がメグの腕を掴みました。

「えっ」

「砂鰐をおびき出すエサに使える。さすがの砂鰐も自分の娘が人質に取られたら出てこざるをえんだろう」

「び、ビアルさんはメグのお父さんじゃ…」

「ガタガタいうな。大人しく付いてきてもらおう」

強引にメグの手を引いたヒヒダルマの体が吹き飛び、オアシスに大きな水しぶきがあがりました。

「手を離せ、醜い達磨ども。お前ら如きが砂鰐と戦う資格があるかどうか、俺が選定してやる」

突然の出来事に、ヒヒダルマ達の顔色がみるみる真っ赤に染まっていきます。

「調子に乗るな、ズルズキン風情が！」

飛び掛ってくるヒヒダルマを交わし、ズルズキンは強烈な蹴りを叩き込みます。ヒヒダルマは小さくうめき声を漏らし、砂煙を舞い上げながら吹き飛びました。

「こいつ…少しはやるようだ」

ヒヒダルマ達は改めてズルズキンの周りを囲みます。

「メグ、先に帰っている」

「で、でも…」

「この程度の奴らに引けは取らん。お前も知っているだろう、俺は砂鰐と毎日戦っている」

「わ、わかった……すぐアル兄ちゃん達を呼んでくるから！」
戸惑っていたようでしたが、メグは不急ぎで走り出しました。

「いいのか？」

「構わん。砂鰐どもの居場所ならこのズルズキンも知っていそうだしな」

先ほどズルズキンに吹き飛ばされたヒヒダルマ達も戻ってまいりました。

「あまり時間はかけていらねん、全員でかかるぞ。こちらの準備が整う前に砂鰐に登場されても面倒だからな」

ズルズキンはヒヒダルマ達の群れに向かい合いました。

- 頭巾と砂ワニ 8 - (前書き)

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

所詮は多勢に無勢です。

奮戦していたズルズキンですが、次第に数に押され、動きを封じられていきました。

炎を受ける度に皮膚を焼かれ、攻撃を加えられる度に鮮血が飛び散り、骨も何箇所か折れているようです。それでもヒダルマ達は攻撃の手を緩めませんでした。

”あいつは無事に逃げられたか…”

ついには崩れ落ち、最早抵抗する事ができなくなってしまったズルズキンが思うことは、自らのことではなく、小さなメグの事でした。そんな自分がなんだか可笑しくて、地面に大の字になっていたズルズキンは小さく笑いました。

「もう終わりか、ズルズキン」

「そう言ってやるな。そもそもズルズキン風情、我々の相手ではない」

”…からだが動かないな…ここまでか…”

「頭巾のお兄ちゃん！」

ズルズキンの意識が遠のいていったまさにその時、場を切裂くような大きな声が響き渡りました。

サツサツサツと、砂の上を走る音が聞こえ、ズルズキンの耳元で止まりました。それは聞きなれたメグの足音でした。

ぼんやりとしている視界の中に、涙を浮かべたメグの姿が飛び込んできました。

「おまえ…なんで…戻って…」

「アル兄ちゃん達、まだ帰ってきていなかったの！だから…だから…」

「だからって戻ってくる奴が…」

「ほう、わざわざ戻ってきてくれるとは。これは手間が省けた、礼

を言うぞ。ズルズキンは用なしだ。奴らへの見せしめに、再起不能にしてやれ」

ヒヒダルマが冷酷に言い放ちました。

それを皮切りに、ヒヒダルマ達がズルズキンを肩を掴み、強引に立たせて拘束します。

「頭巾のお兄ちゃん！」

「お前はこつちだ。来い」

「くそっ……」

メグを連れて行かせるわけにはいかない……！

ズルズキンは強く思いました。それはとても不思議な気持ちでした。強く思う、という事自体、今まで感じたことの無い感覚でした。自のことですら必死になることがなかったズルズキンが今、全くの他人であるメグの事を必死で案じていたのです。

同時に、何か力がわきあがってくるのを感じました。

腹の底から力の奔流のようなものが巻き起こり、全身を駆け巡っていくのがわかります。

”これは……”

ズルズキンはためらいなく、その力を解放しました。

「な、なんだ！？」

「これは……竜の気？ばかな！」

ズルズキンの周囲に、力が竜巻のように巻き上がりました。それはまるで、竜が翼を広げたようです。ズルズキンは強引に、両脇を拘束していたヒヒダルマを振り払いました。

「こ、このっ……！」

襲い掛かってくるヒヒダルマの動きがまるでスローモーションのように見えます。

「……………」

ズルズキンは再び、ヒヒダルマ達の群れと向かい合いました。

- 頭巾と砂ワニ 8 - (後書き)

ズルズキン は 竜の舞 をおぼえた！

- 頭巾と砂ワニ 9 - (前書き)

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

灼熱の太陽が沈み、砂漠に夜が来ます。大きな月が出ていて、静かな夜でした。

「これは…心配して来て見りゃあ…どういことですかい…」
オアシスのいたるところに、真っ赤に染まったヒヒダルマ達が転がっていました。

「頭巾の兄さん！一番下の妹さん！大丈夫ですか！」
ビアルの声がオアシスに響き渡りました。

「あ、ビアルさんの声だ！心配して来てくれたんだ！ビアルさん、こっちー！」

声を聞きつけたメグが、大きな声でビアルを呼びます。

「頭巾の兄さん！こいつは一体…」

「何匹か逃がしてしまったが…大丈夫だ、とりあえずは」

ズルズキンは地面に寝転がったまま、苦しそうに言います。

「これ…兄さん一人でやったんですか…？」

「肩を貸してくれ…早く…帰って休みたい…」

「……ははっ、お安い御用でさあ！」

「生き物つてのは何かしら目的を持つべきだ」

「え、なんか言いましたか？」

拠点への帰路、ビアルの背中で揺られるズルズキンが呟きました。

「あんたに仲間に誘われたときに言われた言葉だ。あの時は少しも理解できなかったが…今ならなんとなくわかる気がする」

「はっは、そいつはよかった。まあ、アタシの言う事なんざ話半分で聞いてりゃあいんですよ。どうせ大したこと言ってやしないんですから」

おどけた素振りでは応えるビアルでしたが、ズルズキンはその言葉を心の中で改めてかみ締めました。

降り注ぐ月光が、ビアル達を優しく照らしていました。

月の光は誰しもに等しく降り注ぎます。

砂漠の入り口に立っている二つの影も、その例外ではありませんでした。

「砂漠か…俺は初めて訪れる」

「俺もだ。聞いていた通り、闘争の気が満ちている。ふふ、気が昂ぶる」

まるで騎士のような外見をした一方が言います。

「…ちゃんと任務を優先しろ」

忍者のような外見をした一方がそれをたしなめました。

「わかつている。ターゲットは竜戦士、狒々王、そして砂鰐だったか。風の噂では俺もその通り名は聞いている。楽しみだ」

「情報によると、竜戦士はすでに砂漠を去ったらしいがな」

「ではターゲットは後者というわけだな。行くぞ、アギイ」

「…」

早速砂漠に足を踏み入れた相棒の騎士を見て、アギイと呼ばれた方も無言でそれにくのでした。

・ 頭巾と砂ワニ 9 ・ (後書き)

アギイさんとシュバさん再登場。

- 頭巾と砂ワニ 10 - (前書き)

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

「すごかったの！頭巾のお兄ちゃんの周りになんだか竜みたいなのがぐるぐるーって回って！すごかったの！」

メグは興奮した様子で、ヒヒダルマ達との闘争の一部始終を話しました。

「ふむ…そりゃあ竜の力ですねえ。ズルズキンって一族は竜の血を引いているらしいんですね。以前砂漠にいたズルズキン達の中にも、竜の力を使ってくる奴らがいましたよ。みんながみんな力を使えるわけじゃなさそうでしたが、頭巾の兄さんも竜の血を色濃く引いているのかもしれないねえ」

一同はベッドに寝ているズルズキンに目をやりました。一通りの治療が済んだズルズキンは、静かな寝息を立てています。

「しかし、帰ってくるなりぶっ倒れるからびびったぜ。…すごい怪我だったしよあ」

「竜の力は身体能力の飛躍的上昇だと聞いたことがあります。体力が回復するわけではなさそうですし、それに彼もまだ上手く力を使いこなせていないんじゃないですかね」

ビルが冷静に分析しました。

「それにしても…ヒヒダルマの奴ら、こんなところまで姿を見せやがるとは。完全に俺達を潰す気で来てやがるな」

いつも荒々しいアルが静かに言います。

「そうですね…あのオアシスはここからそう遠く離れていない。この拠点もやつらに見つかってしまいう可能性がありますね」

拠点の中に、なんとも言えない空気が漂いました。

さっきまで元気にズルズキンの武勇伝を語っていたメグも、その空気を感じたのか大人しくなっていました。

「ま、今日のところは休みましょう。今後の事は、とりあえずアタシが考えておきますよ」

その空気を払拭するようにビアルは言うと、ぶらぶらと拠点の外に出ました。砂漠を月明かりが照らしています。夜は更けていました。太陽と入れ替わるまで、その時間はかからないでしょう。

「アタシもいい加減前に進んだほうがいいんでしょうがねえ…」
ため息混じりにビアルは呟きました。

ヒダルマ達との間で本格的に抗争が始まれば、殲滅戦になる事は目に見えています。

もちろん負けるつもりはありませんでしたが、簡単に勝てる相手とは言えないのでした。

「！誰です！？」

突然拠点の周囲に気配を感じました。ビアルは周囲を探るように警戒のレベルを高めます。

しばらく周囲を探っていたビアルでしたが、一瞬現れた気配はすぐに消えてしまいました。警戒しつつ気配のした方へ注意深く近付いてみると、そこに何かが置かれていることに気が付きました。手にとって見ると平べったい石板のようなものであり、何かメッセージが刻まれています。

「？…こいつは………！」

見るとも無しに石板を見たビアルは、目を見開きました。

しばらくするとビアルはクックと静かに笑い、手に持っていた石板を握りつぶしました。

「…まだまだ抜けられそうにありませんねえ。いや、或いは終わりになるのかな」

そう言って笑うビアルの目には、普段浮かべる事の無い光が宿っていました。

- 頭巾と砂ワニ 11 - (前書き)

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

一夜が明け、ワルビアル一家は食卓を囲んでおりました。

最もズルズキンはベッドで寝たままでしたし、メグはズルズキンの看病で付き添っていましたので、若干寂しい食卓ではありました。

「じゃあ一番上の兄さんは近辺の見回りをお願いします。もしヒビダルマ共を見つけても、決して無茶な事はしないでくださいね」

朝食をかきこみながら、ビアルが言います。

「ああ、大丈夫。：頭巾のヤツも満身創痍だし、今奴らとやり合うには少々分が悪いつて事ぐらいわかるさ」

普段好戦的なアルでしたが、冷静さは失っていないようでした。

「ありがとうございます。決して弱気になってるわけじゃありませんが、わざわざ万全じゃない状態でこちらから仕掛ける事もないですからねえ」

昨日のオアシスでの小さな紛争の結果を受けたヒビダルマ達がどのような動きに出るのかは微妙なところではありましたが、少なくともこのまま大人しく引き下がるような者達ではないことだけは確実でした。

「真ん中の兄さんは、周囲を警戒しててください。もしこの拠点が発見されたら大急ぎでここを移動しなけりやなりませんからね。：。頭巾の兄さんが動けない今、ここの防衛は兄さんの目が頼りです」

「わかりました。ではもし何かあったら我々はここを引き払います。その時は、例の場所に合図を残しておくので、以前使っていた砂漠南部の拠点で落ち合いましょう」

「はは、南に残してきた古巣が役に立つかもしれませんがねえ。頭巾の兄さんとメグを連れての移動はちと骨が折れるかもしれませんが

……」

「大丈夫です、任せてください。それで、ビアルさんは……」

「アタシはちと野暮用がありましてねえ。ま、心配しないでくださ

い。夕刻までには必ず帰りますんでねえ」

昨夜ビアルの元に届けられた石板には、ただ一言刻まれておりました。

” 遺 跡 で 待 つ ”

砂漠で遺跡といえば、指し示す場所はひとつしか思い浮かびませんでした。

差出人の名前はありませんでしたがしかし、差出人は拠点の場所を把握している事になります。このまま放置しておく事はできませんでした。

「じゃあ、俺は行くぜ」

食事を終えたアルとビアルは拠点を出て、それぞれの方向へ出発していきました。

いつもと同じように太陽が昇り、いつもと同じように砂漠を灼熱の世界に変えていきます。

しかし、この日がワルビアル一家にとって大きな転機となる日である事を、この時はまだ誰も知らないのですでした。

- 頭巾と砂ワニ 12 - (前書き)

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

●ヒビダルマー派●

砂漠北部を支配している。ワルビアル一家と抗争中。狒々王を長としている。

●外部勢力●

アギイ（アギルダー）…ある目的のために砂漠にやってきた。諜報活動に長ける。冷静。

「…アンタに呼び出されるとはねえ…めったに前線に出てくることのないアンタがどういう風の吹き回しですかい」

ビアルは静かに言いました。

「久しいな、砂鰐」

ただ一人遺跡に赴いたビアルを待ち受けていた真紅の姿。

大きな体、他の個体にはない立派な鬣。ヒヒダルマ達の長、狒々王でした。

「幸か不幸かそれなりに長い付き合いだが、直接相對するのは久しぶりになるのかな…そういえば、お前の仲間は元気か？ん？」

「アンタがその口で言うんじゃねえ…」

ビアルは拳を握り締めます。

「まあ、そう熱くなるな。今日は別にお前と戦いに来たわけではない」

「アンタがそうでもアタシは違うぜ。付き合ってもらえないねえ」

「未だにワシを憎むか」

「憎い」

間髪いれずにビアルは答えます。

「テメエらがあいつにした事を忘れたとは言わせねえ。あんな手使われなきゃ、あいつがテメエら如きに後れを取るはずがねえんだ…」

ああ、アンタが憎いねえ。八つに裂いて…いや、そんなもんじゃ足りねえ。十六、三十二、六十四…ああもう幾何級数的に増大するアタシの憎しみ。アンタのその器量でどうか受け止めてくださいよ」

ビアルが残忍な笑みを浮かべました。

「ふん、お前ともあるう者がいつまでも過去の存在にしがみ付くとはな。しかし泣く子も黙る砂鰐が、まさか泣く子の面倒を見るようになるとは誰が予想できたか」

「…さすがあいつの子供達ですよ、メキメキ腕を上げてきてる。ア
ンタのところの雑兵程度、軽く蹴散らしますぜ？」

「ワシは、砂漠を出る」

突然流れを切る狒々王の言葉に、ビアルは虚を疲れたように首をか
しげました。

「あん？」

「実は先日、外の組織からスカウトを受けてな、より広い世界でワ
シの力を行使してみたいと思ったのだ」

「はっ、何言ってるんだかよくわからねえが、だったら尚更今のうち
にアンタをぶっ殺しておかなけりゃいけませんねえ。何度も、何度
も、苦痛を与えてやらなければいけませんねえ」

「お前がどうしてもというならここで戦うのも吝かではないがしか
し、お前の大事な家族は今頃大丈夫かな」

狒々王がわざとらしく言います。

「あ？そいつは…どういう意味ですかい？」

「ワシのところにスカウトに来た奴らだが、砂鰐の名にも関心を持
っているようだな。次は砂鰐のところに行くと言っていたので、貴
様らの活動区域だけ伝えておいたぞ。かなりの手練だったが、まあ
遭遇したところで砂鰐殿ご自慢のワルビアル一家ともなれば問題な
いのだろうな」

狒々王がクツクと笑います。

「…てめえ、知っててアタシを呼び出したんですかい！」

「人聞きの悪い事を言わないでくれ。ワシは旧知のお前に砂漠から
の旅立ちを一言伝えただけだよ。黙って出て行ってはお前が
寂しがると思ってるなあ」

狒々王がにんまりと口角をあげます。

「くそっ…！」

ビアルは躊躇せず、狒々王に背を向けて走り出しました。

「…あれが砂鰐か」

ビアルが去った後、遺跡に残された狒々王に近付く声がありました。
「おお、アギイ殿か。ちゃんと手紙を届けてくれたようだな。…しかし、ワシらが中々見つけれなかった奴らの拠点をこつとも簡単に発見してしまうとは」

「単に長けているだけだ。俺はそれしかできんさ」

「謙遜を。して、砂鰐はどうだ？」

「彼なら資格充分だと思う」

シユバがどう選定するか知らんがな、と小さく呟きました。

「しかし、凄まじい殺気だった。一体どれだけの事を彼にしたのだ、狒々王よ」

「なあに、ごくごく常識的な事しかしておらんよ…あくまで砂漠での常識だがね。さて、ワシも戻るとするか」

「…」

狒々王は戻り、アギイも遺跡を去りました。

動くものがいなくなった遺跡には、ただただ砂嵐が吹き荒れておりました。

- 頭巾と砂ワニ 12 - (後書き)

あと2 - 3話で過去話終わる予定ですたぶん汗

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

●ヒビダルマー派●

砂漠北部を支配している。ワルビアル一家と抗争中。狒々王を長としている。

●外部勢力●

アギイ（アギルダー）…ある目的のために砂漠にやってきた。諜報活動に長ける。冷静。シュバの相棒。

シュバ（シュバルゴ）…ある目的のために砂漠にやってきた。戦闘担当。強い。アギイの相棒。

「貴様、砂鰐か？」

砂漠北部との境界周辺を偵察していたアルは、突然声をかけられ驚いて振り返りました。

「あ？」

見慣れぬ者が立っています。まるで騎士の様な出で立ちをして、異様な雰囲気放在了ました。纏う空気はさながら刃のようです。そんな存在に気が付く事ができずこの距離まで近づけてしまったという事実は、アルの警戒レベルを大いに引き上げました。

「なんだ、あんた」

「貴様、砂鰐………ではないな」

騎士はアルを一瞥すると、興味を無くしたかの様にそのままアルの横を通り過ぎていきます。

「おいおいおい、ちょっと待てよ。見ねえ顔だけど、新参か？それともビアルさんの知り合いか？」

思わず肩を掴んだアルを、騎士はゆっくりと振り返ります。

「…砂鰐を知っているのか？」

アルは内心失敗したと思いましたが、すぐに言葉を続けます。

「確かに俺は砂鰐を知ってるぜ。だが見ず知らずのヤツを案内するほど俺も無用心じゃねえ。お前は一体…うおっ！」

騎士はその槍のように研ぎ澄まされた腕を振るい、アルの手を振りほどきました。

「俺はシュバという。砂鰐を探している。ヤツの元へ案内してくれ、思いがけない素早い動きに、アルは大きく後退して身構えました。

「…と言われて素直に案内するように見えるか？」

アルは腕をゴキゴキとならします。

「やめておけと言いたいところだが、手っ取り早くてこちらも助かる」

シュバと名乗った騎士はゆつくりと構え、その大槍の照準をアルに合わせます。

”獲物は…見るからに立派なあの槍か。威力はありそうだが、小回りは効かなさそうだな…”

アルは相手の獲物を見定めると、すぐに騎士に向かって襲い掛かりました。

両者の距離が縮まるや、騎士の一撃が放たれました。

「…っ！」

迫り来る槍を皮一枚で交わし、アルは騎士の頭部に拳をたたきつけました。

シュバは一撃を受けつつもすぐに槍を構え直し、再び標的に向かって引き絞ります。

「あぶねえっ！」

「この程度か？これでは俺に膝をつかすこともできんぞ」

「タフな野郎だな…こいつはどうだ！」

アルは拳を突き立て、地面を揺らしました。衝撃波がシュバを目標して砂漠を走ります。

「随分と大雑把な攻撃だな。…俺も人のことは言えぬが」

シュバは迫り来る地割れを最小限の動作で交わしました。

「…む、どこへ…」

シュバが視線を上げると、アルの姿は消えていました。

「目くらましというわけか…」

と、シュバの真下から突如両腕が生え、シュバを引きずり倒します。砂煙が舞とともにアルが姿を現し、倒れた騎士に馬乗りになりました。

「油断したな。砂漠じゃこういう戦闘方法もあるんだぜ…おらっ！」
アルは馬乗りになったまま、大地を割るそのエネルギーをシュバに直接叩き込みました。

「もう一発！」

衝撃が走り、周囲の砂が舞い上がります。

「はっは！どうしたおら！」

突然アルは右腕に鈍い痛みを感じました。

シュバの槍がアルの右肩を削っていたのです。

「っ…！お前…！」

思わず飛びのいたアルに、シュバはゆっくりと立ち上がります。

「ばかな…効いてねえだと…」

「いや、正直かなり効いているようだ…驚いたぞ」

アルは急に寒気を感じました。目の前の騎士の存在が、より一層ブレッシャーを増したような感覚にとらわれたのです。

「少し強く行くぞ。我が槍のいで見せろ、砂漠の戦士」

- 頭巾と砂ワニ 13 - (後書き)

最近格闘統一パで潜ってます。

ルカリオ@スカーフ、ズルズキン@オボン、ゴウカザル@襷、ヘラ
クロス@オツカ、カイリキー@ジュエル、ローブシン@バコウ

結構強い。超霊にめっちゃ弱いですw

カイリキーとエルレイド入れ替えてみようかな…

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

●ヒダルマー派●

砂漠北部を支配している。ワルビアル一家と抗争中。狒々王を長と
している。

●外部勢力●

アギイ（アギルダー）…ある目的のために砂漠にやってきた。諜報
活動に長ける。冷静。シュバの相棒。

シュバ（シュバルゴ）…ある目的のために砂漠にやってきた。戦闘
担当。強い。アギイの相棒。

「父は、死にました」

拠点から周囲を見渡しつつ、ビルは淡々と言いました。

ズルズキンは無言で食事を取っていましたが、耳を傾けているようでした。

「父は強かった。私たち兄妹はまだ幼かったんですが、そんな父を誇りに思っていたものです」

父親の事を思い出しているのか、ビルは少し懐かしそうな表情を浮かべています。

「そんな父が、或る日突然姿を消しました。入れ替わるようにビルさんが来てくれたんです。ビルさんは、以前父に紹介された事がありました。親友だと。当時の私たちは自らの力で生きていく事など到底できませんでしたから、ビルさんがいなければ私たちなどあつという間に駆逐されてしまったでしょう。ビルさんは父の消息について何も語りませんが、私もアルも、幼いながら察する事ができました。父はもう帰ってこないんだと」

ビルは感情を込めずに続けます。意図的にそうしているようにも感じました。

「ビルさんは強かった。当時私たちの住んでいた区域で幅を利かせていたズルズキン達を打ち破ってから、その名は一層轟いていました。いつの間にやら私たちは、少数ながら砂漠の一大勢力になることができた」

「…俺にそんな話を聞かせるなんて、どういう風の吹き回しだ」

「別に、ただの気まぐれです…少し外を見ていてくれますか？私も昼食を取って来ます」

ビルはそう言うと、拠点の中に入っていました。

「何者ですか！」

程なくして、ビルの緊迫した声が拠点の中から聞こえてきました。不審に思ったズルズキンは、足早に拠点の中へと戻ります。

普段一家が食事をするスペースに見慣れぬ訪問者が佇んでおり、ビルと向かい合っていました。

「ばかな…いつの間に拠点の中に…」

ズルズキンはその姿に見覚えはありませんでした。ビルの様子を見る限り、どうやらそれは同じのようです。

「俺はアギイという。砂鰐と話をしに来た。ヤツが戻ってくるまで待たせてもらうぞ」

いつの間にやら拠点に侵入していた訪問者に、ビルは心底驚きました。自分の目を信用していましたが、かなり注意深く周囲を見張っていたからです。

「砂鰐…なんのことです？」

動揺を隠し切れないながらも、ビルは質問を投げかけます。

「すでに把握している。別にお前に許可を求めたわけではない」

「……あなたは…いつの間に、そこに？」

「中々いい目を持っているようだ、それに頼りきりというのはよくない。気をつけることだな」

ビルが歯を食いしばる音が聞こえてくるようです。

拠点の中は、いままで感じたことの無いような空気に支配されていました。

「…頭巾さん…メグをつれて逃げてください…」

ビルが囁くように告げます。

「…何？」

「ここを発見してしまった以上、留まる意味は無い。もたもたしていても、戻ってくるビアルさんやアル兄さんまで危険にさらしてしまう。あいつが纏っている空気は、どう考えても普通じゃありません」

それはズルズキンも感じていることでした。今までに遭遇したどん

な強敵とも違いました。

”…それなら俺が…”

”ボロボロのあなたに何ができるんですか？それに…”

頭巾は言い返すことができません。少し躊躇うように、ビルは言いました。

”…いえ、なんでもありません。早く行ってください”

”……ビル”

ビルは無言でしたが、ズルズキンは構わずビルの背に声をかけました。

”…さつさと追いついて来い”

そう言うズルズキンは、今の彼にできる最高速度でメグの元へ向かいました。

「どこへいく？悪いがここに居てもらおう。妙な小細工をされては面倒なのでな」

「そうは行きません。あなたには少し私の相手をしてもらいます」
進路を遮るように、ビルが立ちふさがります。

「お前がか？…俺との実力差がわからないほど未熟には見えないが」とくに感情を込めるでも無くアギイは静かに告げます。

「そうですね…その上でこうして残るっていうのは、中々精神的にキツイものがありますね…」

ビルはため息を吐いて言いました。

「しかし、大切な家族を差し置いて自分だけ助かろうなんて思う輩はウチの一家にいないんですよ、生憎」

- 頭巾と砂ワニ 14 - (後書き)

ゴツゴツ山追加されましたね。

昨日今日と潜ったけど、一度も行けなかった…。

夢島選択させて欲しいすなあ。

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

●ヒビダルマー派●

砂漠北部を支配している。ワルビアル一家と抗争中。狒々王を長と
している。

●外部勢力●

アギイ（アギルダー）…ある目的のために砂漠にやってきた。諜報
活動に長ける。冷静。シュバの相棒。

シュバ（シュバルゴ）…ある目的のために砂漠にやってきた。戦闘
担当。強い。アギイの相棒。

「ふぁ……あれ、頭巾のお兄ちゃん……？」

メグがズルズキンの背で目を覚ましました。

裏口から拠点を抜け出し、砂漠をしばらく歩き出したところでした。サクサクと、足音が聞こえます。

太陽はいつの間にか身を隠していました。

「起きたか」

「お兄ちゃん、体、大丈夫なの……どこに行くの？」

背に揺られつつ、メグが不安そうに尋ねます。

「……ちよつとな。お前達が昔使っていたという拠点を見てみたいと思っただ。案内してくれないか？」

メグはまだ寝ぼけているようでした。

「昔の拠点は、どんな場所だったんだ？」

「あそこは……今のおうちよりも少し狭かったけど、あの頃はみんな小さかったから……ねえ、頭巾のお兄ちゃん、みんなは？」

ズルズキンは無言で歩を進めました。

「……ねえ、頭巾のお兄ちゃん？」

時折砂塵がピシピシと頬を叩きます。大きな砂嵐の前兆のようでした。

「あいつらは、先に向かっているよ。俺達も早く行かないとな」

「……頭巾のお兄ちゃん、嘘付いてる」

「何言ってる？俺は嘘などついていない」

「嘘！わかるもん！わからないけど、嫌な感じがするんだもん！頭巾のお兄ちゃん、拠点に戻ろう！みんな一緒じゃなきゃいやだ！」

メグは突然じたばたと暴れました。

ズルズキンはいつも通りに振舞っていたつもりでしたが、メグは何かを感じ取ったようでした。

「なんだか……お父さんが帰ってこなくなっちゃった時みたいなの……」

ひとしきりズルズキンの背中ではれた後、メグは泣き出してしまいました。

しばらくした後、ズルズキンはため息混じりに言いました。

「…わかった。だが、戻るのは俺だけだ。お前は物陰に隠れている」
「うん！」

「何故戻ってきた？これでこいつが体を張った意味は無くなったも同然だ」

アギイの声が拠点の中に響き渡ります。

「…」
頭部から血を流したビルが、壁にもたれてかろうじて立っていました。

「…全く、何で言う事聞いてくれないんですか…」

息も絶え絶えと言った様子で、ビルが声を発しました。

戻ってきたズルズキンを見ると、ビルは糸が切れたようにその場に崩れ落ちてしまいました。

ズルズキンは慌ててビルを支え、安心させるように言葉をかけます。

「メグは隠れている、大丈夫だ。……なんでさっさと逃げなかった。お前なら俺達が行った後でも離脱できただろうに…」

荒い呼吸に混じって、ビルの言葉が聞こえてきました。

「…今のあなたでは、すぐに追いつかれてしまうでしょう。私は、守りたかったんですよ…体を張って大切な妹を守ってくれた人の事も」

「アギイ。早いな、もう北から戻ってきたのか」

拠点の中に、聞き覚えの無い声がもう一つ響きました。

ドサツと、何か重量感のあるものが無造作に放り出されます。

「……アル？」

流れ出る血が、地面に赤黒い染みを作っていきます。
紅く染まったアルは、ピクリとも動きませんでした。

声の主はまるで騎士のような外見をしています。アルの返り血で、その鎧はところどころ紅く染められていました。

アルに見向きもせずこちらに向かってくる騎士は、まるで不吉の象徴のようでした。

騎士はビルを見て言います。

「そこに倒れているのは、砂鰐……ではないな。アギイ、砂鰐はまだか？」

「もうしばらくかかりそうだ」

「そうか。しかしアルといったか、そのワルビアル。中々できる。砂鰐への期待も膨らむと言うものだ」

ズルズキンは心の中に、何かが膨れ上がっていくのを感じました。

憎しみ。

数多くの敵と戦ってきたズルズキンでしたが、戦いの理由に憎しみを抱くのは初めての事でした。

” なんだか最近、心の中がせわしないな…… ”

ズルズキンは深く呼吸をしました。ズルズキンの周囲をエネルギーが円を描くように回り始めます。

「竜の気……貴様まさか、竜戦士か？」

鋼の騎士が目を細めます。

「……その名は何度か耳にしたが、人違いだな。俺はただのワルビアル一家の新入りだ」

- 頭巾と砂ワニ 15 - (後書き)

大会始まりますね。

エントリーまでにパーティー練り直さないと。

●ワルビアル一家●

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

●ヒビダルマー派●

砂漠北部を支配している。ワルビアル一家と抗争中。狒々王を長と
している。

●外部勢力●

アギイ（アギルダー）…ある目的のために砂漠にやってきた。諜報
活動に長ける。冷静。シュバの相棒。

シュバ（シュバルゴ）…ある目的のために砂漠にやってきた。戦闘
担当。強い。アギイの相棒。

「…殺す」

竜のエネルギーが収束するやいなや、ズルズキンは躊躇せずアギイに向かって蹴りを放ちました。

竜の力で怪我が回復するわけではありません。ズルズキンが満足に動ける時間はそれほどありませんでした。

「…」

アギイは素早い動きで蹴りをいなすと、そのまま勢いをつけてズルズキンを洞窟の壁に叩き付けました。

「っ…！」

ズルズキンには、目の前から突然アギイが消えたように見えました。一瞬何が起きたか把握できませんでした。遅れてやってきた痛みがそれを自覚させました。

「…俺より…まだ早いのかっ…！」

身体能力が上昇しているはずのズルズキンの蹴りを難なく受け流す。それは、アギイがズルズキンより数段上の領域にいる証でした。

再びズルズキンの周りに竜の力が舞い踊ります。

「…ぐうっ…」

「やめておけ。その体でそれ以上の肉体強化は危険だぞ」

「…黙れっ！」

アギイは素早く動き、一気にズルズキンの目の前まで迫ると、耳元で囁くように音波を放ちました。

「がっ…！」

自らの意思と裏腹に、ズルズキンはその場に倒れてしまいました。視界がグルグルと歪み、まともに立っている事ができないのです。

「大人しく寝ている。お前達にはもう用は無い」

ふざけるな！と叫ぼうとしたズルズキンでしたが、舌が上手く回らずそれさえ言葉にできません。

それでもなんとか、ズルズキンはフラフラと立ち上がりました。
「ほう、まだ立つのか。元からの傷も決して浅くはなかるうに」
シュバが感心したように言います。

「俺は、始めて、相手を、死に物狂いで、殺してやりたいと思ったよ」

「それは光栄だ。しかし、貴様の体は限界のようではないか。気持ちだけでは俺達は殺せんよ。ズルズキンよ、戦闘において最も重要な要素は何だ？」

「……」

ズルズキンは無言でしたが、シュバは続けます。

「心構えだ。覚悟と言い換えてもいい。例えば恐怖に脅えてばかりでは、本来のパフォーマンスの半分も発揮できまい。ああ、もちろん気持ちで勝てるなどくだらん事を言うつもりはない。それはつまり、本来自分が持ちえる最大限界を発揮しているにすぎないからな。それを発揮できないのは、要するに甘いのだよ。貴様達は今、無様に横たわっているわけだが、それは何故だ？まさか怪我を言い訳にするつもりはないだろう」

「ああ……頭巾の兄さんが倒れているのは、アタシの不甲斐なさ故でさあ」

一同が拠点の入り口を一齐に振り返りました。大きな影が立っています。

「くそつたれめ……アタシはどうしていつも肝心なときに……」

ビアルは荒い息をついています。

「貴様、砂鰐………だな」

シュバの声を無視して、ビアルはズルズキンの元に歩を進めました。ズルズキンは限界が来たのか、その場に崩れ落ちてしまいます。

「頭巾の兄さん！」

「砂鰐……すまん……」

「頭巾の兄さん、なに謝ってるんですか」

「メグは…無事だ。裏で隠れている」

「そうですか！そいつは嬉しいニュースだ」

ビアルは少しホッとしたように言いました。

「一旦…引いたほうがいい…あいつら、普通じゃ…」

「残念ながら、そんな選択枝はないですよねえ。素直に退却させてくれるとは思えません。…それにより…こんな光景見せられて許せるはずねえ」

「砂鰐か…なるほど、そこで無様に倒れている奴らとはモノが違うようだ」

無造作に倒れている仲間達を見て放心状態に陥っているビアルに、背後から声が覆いかぶさります。

「…あん？」

ビアルの瞳に、暗い炎が灯ります。

「言葉はいらんだろう、来い。どれほどの者が、見せてもらおう」

「……………なに寝ぼけたこと言ってやがる…直接くればいくらでも相手してやったのによ。ああ、全く砂漠つてのは本当にくだらねえぜ」

「心地よい殺気。楽しみだ」

シュバが槍を構えます。

「バラバラになってから後悔するんじゃないぞ…かかってきやがれ、三下がぁ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0742q/>

ポケットモンスター * アスタリスク *

2011年11月27日13時48分発行